財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第121集
関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

野上塩之入遺跡
塩之入城遺跡

—山間部における奈良・平安時代の集落と中世山城の調査—

1991

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第121集
関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第７集

野上塩之入遺跡
塩之入城遺跡

—山間部における奈良・平安時代の集落と中世山城の調査—

1991

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

野上塩之入遺跡　塩之入城遺跡全景（手前　野上塩之入遺跡A区、中　B区、奥 塩之入城遺跡）

塩之入城遺跡全景（東上空から）

序

藤岡市から長野県佐久市に向かう上信越自動車道の建設工事は、平成４年度の開通を目指して大きく前進してまいりました。

発掘調査は、群馬県教育委員会の委託を受け、昭和61年度から実施しておりますが、今回報告する「野上塩之入・塩之入城」は、昭和62年度～63年度にかけて行われた調査であります。

山頂付近にある遺跡のため、工事用道路の開通を待ち、さらに、急傾斜地のため、調査方法に試行錯誤を繰りかえすなど、調査関係者の労苦のにじむものとなりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県教育委員会・富岡市教育委員会・地元の皆様・日本道路公団東京第二建設局・同富岡工事事務所・工事関係者各位の深い御理解に深く感謝申し上げます。

本報告書を刊行することで、教育・学術研究の資料として広く活用されることを希望いたします。

平成３年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　清　水　一　郎

例　　言

1　本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「野上塩之入遺跡」「塩之入城遺跡」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査地の所在地は以下のとおりである。

野上塩之入遺跡　群馬県富岡市野上1591番地他

塩之入城遺跡　群馬県富岡市野上1567番地他

3　本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。

4　実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台３－15－８所在）が担当した。

5　調査期間及び担当者

(1)　発掘調査　調査期間　昭和63年２月16日～昭和63年10月31日

調査担当者　津金澤吉茂（昭和62・63年度　主任調査研究員、現専門員）

田口正美（昭和62年度　調査研究員、現主任調査研究員）

新井　仁（昭和62・63年度　調査研究員）

山口良寛（昭和63年度　調査研究員）

(2)　整　理　整理期間　平成２年10月１日～平成３年３月31日

整理担当者　新井　仁

(3)　事　務　常務理事　白石保三郎（昭和62・63年度）、邊見長雄（平成元・２年度）

事務局長　井上唯雄（昭和62年度）、松本浩一（昭和63～平成２年度）

管理部長　田口紀雄（昭和62～平成３年度）

調査研究部長　上原啓巳（昭和62・63年度）、神保侑史（平成元・２年度）

関越道上越線事務所長　井上　信（昭和62・63年度）、高橋一夫（平成元・２年度）

総括次長　片桐光一（昭和62～平成元年度）、大澤友治（平成２年度）

次　　長　原田恒弘（昭和62年度）、徳江　紀（昭和63～平成２年度）

庶 務 課　係長代理　黒沢重樹（昭和62・63年度）、宮川初太郎（平成元・２年度）

主任　国定　均（昭和63～平成元年度）、笠原秀樹（平成２年度）

臨時職員　山崎郁夫、神戸市四郎、富沢音二、大手芳郎、松井留男、町田康子、本城美樹、後関玲子、田中智恵美

6　報告書作成担当者

編集担当　新井　仁

本文執筆　新井　仁、木村　収（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）（Ｖ－１）

遺構写真　津金澤吉茂、田口正美、新井　仁、山口良寛

遺物写真　佐藤元彦（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

保存処理　関　邦一（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

遺物観察　新井　仁、菊池　実（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団主任調査研究員）

整理補助員　宇田川千恵、小島八重子、小林幸子、堤由美子、湯浅美枝子、渡部重子

委託関係　航空写真はK&Mエンタープライズ株式会社に、遺構測量は技研測量設計株式会社に、遺物トレースは株式会社測研に委託し、石材鑑定は陣内圭一（群馬県立自然科学資料館）、炭化材の分析は鈴木三男（金沢大学教養部）・能城修一（農林省森林総合研究所）の各位に依頼し、鈴木・能城両氏からは分析結果の玉稿を賜った。

7　出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

8　発掘調査および整理作業・報告書作成に当たり、以下の諸機関、諸氏から御教示、御指導いただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略）

富岡市教育委員会、富岡市農協、村田修三（奈良女子大学）、山崎　一（群馬県文化財保護審議会委員）

また、塩之入城遺跡の調査に当たり、地権者の下山邦雄氏からは、杉材を提供していただいた。

9　内部協力者

井上昌美、菊池　実、桜井美枝、関口功一、田口正美、谷藤保彦、津金澤吉茂、山口逸弘、綿貫銳次郎

10　発掘調査従事者

相川富士江、赤尾由市、赤尾チエノ、浅川裕子、新井正子、飯塚喜与治、石井京子、市川はつみ、伊藤しちを、大岡静枝、大岡弥生、大河原ひで子、岡野乙二、岡野てる、小川甲子、小川國雄、桐渕サダ、黒沢きみ枝、小菅弘子、小島良雄、小林　茂、小林たか、小林フミ江、斎藤昇三、斎藤隆男、斎藤リン、斎藤つる、斎藤俊夫、坂本豊吉、佐々木福寿、佐藤節子、佐藤信平、佐藤ふじ江、沢田八蔵、柴山静弥、清水洋子、神保京子、須賀茂平治、白石かね子、高田秀介、高橋仁太郎、高橋敏子、高橋ツナ、高橋政雄、田島一布、田中喜代美、田中　健、鶴田多恵子、中村朝子、中村静子、中村とも子、中村ひで、中村福治、永峰うめ子、苗塚　峯、林　通清、広木正幸、細野やすの、堀口長太郎、本多サイ、真下伍男、松井松次、三田とめ、三ッ木國雄、宮下君枝、宮下保次、茂木はるえ、森千代子、安河内恵子、柳沢一寿、柳沢昭一、山口　清、山田晋三郎、山田春一、山田福一、横山子之吉、吉田美津子、吉川まさ子、吉田泰徳、渡辺文江

上記の他、富岡市を中心として、多くの方々の協力を得た。

凡　　例

1　本書の遺構番号は、発掘調査時に付したものをそのまま使用しているが、以下の遺構名称は整理作業の過程で変更した。

20号土坑→1号炭焼窯跡　　21・37号土坑→2号炭焼窯跡　　33号土坑→3号炭焼窯跡

7号住内土坑（南側）→17A号土坑　　7号住内土坑（北側）→17B号土坑

また、調査時の遺構名称が適当でないものについては欠番とした。

2　本書の遺構・遺物挿図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、統一できないものも多いためスケールを参照されたい。

遺構　竪穴住居・土坑　1/60　竪穴住居カマド　1/30　城曲輪　1/120

遺物　坏・小型石器　1/3　甕・大型石器　1/4　鉄器　1/2　石鏃・銅銭　1/1

3　遺構図中の方位記号は国家座標の北を表す。

4　遺物観察表中の計測単位はcm・gを使用した。出土位置の＋、－は床面からの高さを示す。量目中の（　）内は推定長を、〔　〕内は現長を表す。土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色監修『新版標準土色帖　1988年版』に基づいている。

5　遺構図、遺物実測図、遺物観察表の番号は基本的に一致する。

6　遺構図中の断面基準線は標高で表し、単位はmを用いた。

7　遺構及び遺物図中のスクリーントーンおよびシンボルマークは下記のことを表す。

遺構　遺構下　焼土　炭化物・灰　粘土

遺物　須恵器断面　灰釉部分　石器使用面

土器●　石器△　鉄製品▲　銅製品■　炭化材○

8　周辺遺跡図に使用した地図は、国土地理院発行50,000分の1地形図の「富岡」である。

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
第Ⅰ章　発掘調査の実施と経過
第1節　調査に至る経緯と調査の経過……2
第2節　調査の方法……4
第3節　基本土層……7
第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境
第1節　地理的環境……8
第2節　歴史的環境……9
第Ⅲ章　野上塩之入遺跡
第1節　遺跡の概観……15
第2節　A区奈良・平安時代……17
第3節　A区縄文時代……40
第4節　A区その他の遺構……64
第5節　B区中近世……83
第6節　B区縄文時代……85
第7節　B区旧石器時代……92
第Ⅳ章　塩之入城遺跡
第1節　遺跡の概観……96
第2節　中近世……96
第3節　古墳時代……112
第Ⅴ章　調査の成果と問題点
第1節　縄文時代中期初頭の遺物について……119
第2節　奈良・平安時代の遺構について……120
第3節　塩之入城について……123
付載　野上塩之入遺跡出土炭化材の樹種……132
写真図版

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置図 …… 5
第 2 図　グリッド配置図 …… 5
第 3 図　野上垣之入遺跡トレンチ位置図 …… 6
第 4 図　基本土層 …… 7
第 5 図　周辺古墳・古墳群位置図 …… 10
第 6 図　周辺の主要遺跡 …… 12
第 7 図　野上垣之入遺跡A区全体図 …… 16
第 8 図　1号住居跡 …… 17
第 9 図　1号住居跡遺物出土状況 …… 18
第10図　1号住居跡カマド …… 19
第11図　1号住居跡出土遺物(1) …… 20
第12図　1号住居跡出土遺物(2) …… 21
第13図　1号住居跡出土遺物(3) …… 22
第14図　1号住居跡土器分類グラフ …… 22
第15図　3号住居跡 …… 23
第16図　3号住居跡カマド …… 24
第17図　3号住居跡土器分類グラフ …… 24
第18図　3号住居跡出土遺物 …… 25
第19図　4号住居跡土器分類グラフ …… 26
第20図　4号住居跡 …… 27
第21図　4号住居跡カマド …… 29
第22図　4号住居跡出土遺物(1) …… 29
第23図　4号住居跡出土遺物(2) …… 30
第24図　5号住居跡土器分類グラフ …… 31
第25図　5号住居跡 …… 32
第26図　5号住居跡カマド …… 33
第27図　5号住居跡出土遺物(1) …… 34
第28図　5号住居跡出土遺物(2) …… 35
第29図　5号住居跡出土遺物(3) …… 36
第30図　1号炭焼窯跡 …… 38
第31図　2号炭焼窯跡 …… 39
第32図　3号炭焼窯跡 …… 39
第33図　3号炭焼窯跡出土遺物 …… 39
第34図　6号住居跡 …… 40
第35図　6号住居跡炉 …… 41
第36図　6号住居跡出土遺物(1) …… 41
第37図　6号住居跡出土遺物(2) …… 42
第38図　6号住居跡出土遺物(3) …… 43
第39図　2号住居跡 …… 44
第40図　2号住居跡炉 …… 45
第41図　7号住居跡 …… 45
第42図　縄文住居跡出土石器石材分類グラフ …… 46
第43図　2・7号住居跡周辺遺物出土状況 …… 47
第44図　2号住居跡出土遺物(1) …… 47
第45図　2号住居跡出土遺物(2) …… 48
第46図　2号住居跡出土遺物(3)
　　7号住居跡出土遺物(1) …… 49
第47図　7号住居跡出土遺物(2) …… 50
第48図　7号住居跡出土遺物(3) …… 51
第49図　7号住居跡出土遺物(4) …… 52
第50図　7号住居跡出土遺物(5)
　　2・7号住居跡周辺出土遺物(1) …… 51
第51図　2・7号住居跡周辺出土遺物(2) …… 52
第52図　2・7号住居跡周辺出土遺物(3) …… 55
第53図　17A・B号土坑および出土遺物(1) …… 59
第54図　17A・B号土坑出土遺物(2) …… 60
第55図　17A・B号土坑出土遺物(3) …… 61
第56図　27号土坑および出土遺物(1) …… 61
第57図　27号土坑出土遺物(2) …… 62
第58図　32号土坑および出土遺物 …… 63
第59図　46号土坑および出土遺物 …… 63
第60図　36・45号土坑 …… 66
第61図　18・23～26・28～31・34号土坑 …… 67
第62図　38・44号土坑 …… 68
第63図　39～42号土坑 …… 69
第64図　23・26・30・36・38号土坑出土遺物 …… 69
第65図　30・36号土坑出土遺物 …… 70
第66図　36・38号土坑出土遺物 …… 71
第67図　43号土坑遺物出土状況および出土遺物 …… 72
第68図　47・48号土坑遺物出土状況および出土遺物(1) …… 73
第69図　47・48号土坑出土遺物(2) …… 74
第70図　A区遺構外出土遺物(1) …… 74
第71図　A区遺構外遺物出土状況 …… 75
第72図　A区遺構外出土遺物(2) …… 76
第73図　A区遺構外出土遺物(3) …… 77
第74図　A区遺構外出土遺物(4) …… 78
第75図　A区遺構外出土遺物(5) …… 79
第76図　野上垣之入遺跡B区全体図 …… 81
第77図　1号溝 …… 83
第78図　2・5・8号土坑および出土遺物 …… 84
第79図　A54－II58Gr遺物出土状況および出土遺物 …… 85
第80図　B区遺構外出土遺物(1) …… 86
第81図　B区遺構外遺物出土状況 …… 87
第82図　B区遺構外出土遺物(2) …… 89
第83図　B区遺構外出土遺物(3) …… 90
第84図　B区遺構外出土遺物(4) …… 91
第85図　旧石器出土状況 …… 92
第86図　プレ試掘トレンチ位置図 …… 93
第87図　プレ試掘拡張区 …… 95
第88図　A60－II46Gr出土旧石器 …… 95
第89図　垣之入域遺跡全体図 …… 97
第90図　垣之入域出輪呼称図 …… 98
第91図　曲輪1 …… 99
第92図　曲輪1セクション図 …… 101
第93図　曲輪1出土遺物 …… 102
第94図　1号土坑 …… 102
第95図　曲輪2および出土遺物 …… 103
第96図　曲輪3および出土遺物 …… 104
第97図　曲輪4・5・6・7 …… 105
第98図　1号墳周辺遺物出土状況 …… 108
第99図　1号墳周辺出土遺物(1) …… 108
第100図　1号墳周辺出土遺物(2) …… 109
第101図　1号墳周辺出土遺物(3) …… 110
第102図　1号墳全体図 …… 113
第103図　1号墳石出土状況 …… 115
第104図　1号墳石室および石室掘り方 …… 116
第105図　1号墳出土遺物 …… 117
第106図　笠懸村稲荷山遺跡遺構配置図 …… 121
第107図　外郭山遺跡遺構配置図 …… 121
第108図　笠懸村稲荷山遺跡炭焼窯跡 …… 122
第109図　外郭山遺跡炭焼窯跡 …… 122
第110図　十三塚遺跡炭焼窯跡 …… 122

第111図　塩之入城周辺地形図……124
第112図　塩之入城縄張り図……125
第113図　鎌川周辺中世城郭位置図……126
第114図　鎌川周辺中世城郭縄張り図(1)……127
第115図　鎌川周辺中世城郭縄張り図(2)……129
第116図　1・3号炭焼窯跡分析資料出土状況……147

表　目　次

第 1 表　周辺主要遺跡一覧表……11
第 2 表　野上塩之入遺跡住居跡・土坑一覧表……15
第 3 表　鎌川周辺中世城郭一覧表……131
第 4 表　群馬県野上塩之入出土炭化材の樹種……134

写真図版目次

図版 1　野上塩之入遺跡A区全景
図版 2　1号住居跡
図版 3　1・3号住居跡
図版 4　4号住居跡
図版 5　5号住居跡
図版 6　1・2・3号炭焼窯跡
図版 7　6・2・7号住居跡
図版 8　17・27・32・46・18号土坑
図版 9　25・26・29・30・31・34・36・38号土坑
図版 10　44・45号土坑、B区全景、1号溝
図版 11　「テシロ」部、A60－II40Gr旧石器、2・8号土坑
図版 12　1号住居跡出土遺物
図版 13　3・4号住居跡出土遺物
図版 14　5・6号住居跡、3号炭焼窯跡出土遺物
図版 15　6・2・7号住居跡出土遺物
図版 16　2・7号住居跡、2・7号住居跡周辺出土遺物
図版 17　2・7号住居跡、2・7号住居跡周辺出土遺物
図版 18　17・27・32・46・23・30・36号土坑出土遺物
図版 19　38・43・47・48号土坑、A区遺構外出土遺物
図版 20　A区遺構外、2号土坑、B区遺構外出土遺物
図版 21　B区遺構外出土遺物
図版 22　塩之入城遺跡全景、安全柵、登坂道
図版 23　曲輪1、1号土坑、虎口
図版 24　曲輪2・3・5・6、北側斜面石組
図版 25　1号墳
図版 26　1号墳
図版 27　曲輪1・2・3、1号墳周辺出土遺物
図版 28　1号墳周辺、1号墳出土遺物

抄　　録

1　遺 跡 の 概 略

野上塩之入遺跡は、群馬県富岡市野上の鏑川右岸に広がる丘陵地上に所在する。間に谷地を挟んで東側のA区、西側のB区に分かれる。調査により、中近世の溝、土坑、奈良・平安時代の竪穴住居跡、炭焼窯跡、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、先土器時代の石器等が検出された。

塩之入城遺跡は、群馬県富岡市野上に所在し、野上塩之入遺跡B区から谷地を隔てて西に位置している。調査により、中世城郭跡、古墳が検出された。

調査期間は、両遺跡合わせて、昭和63年2月16日から昭和63年10月31日までの8カ月半である。

2　遺 構 数 量

	種　別	時　代	数量	備　　考
野上塩之入遺跡	竪穴住居跡	奈良平安	4	1軒は覆土に浅間B軽石を含む。
	竪穴住居跡	縄　文	3	前期1軒、中期2軒。
	炭焼窯跡	奈良平安	3	覆土に浅間B軽石を含むもの2基。
	土　坑	縄　文	5	A区。時期は中期。
	土　坑	その他	21	A区。
	土　坑	中近世	3	B区。
	溝	中近世	1	
	先土器遺物	先土器	1	遺構なし。
塩之入城遺跡	城　郭	中　世	1	
	曲　輪	中　世	7	
	土　坑	中近世	1	下層から炭化材出土。
	古　墳	古　墳	1	横穴式石室をもつ。後期古墳。

3　ま　と　め

野上塩之入遺跡

奈良・平安時代の住居は4軒あるが、東カマドのものが2軒で、北カマドのものが2軒である。時期は、東カマドが平安時代、北カマドが奈良時代になると考えられる。1号住居跡と3基の炭焼窯跡とは、覆土に浅間B軽石を含む黒色土を同程度に含んでおり、ほぼ同時期に存在したものと思われるため、1号住居跡は炭焼きを生業とした人々の住居であったと考えられる。

縄文時代は前期関山式期の住居が1軒単独で検出され、また中期初頭五領ヶ台式期の住居跡が2軒と土坑が5基検出されている。中期の2軒はかなりの傾斜地に立地している。

先土器時代の石器はスクレイパーと思われるが、1点のみの出土で他に遺構・遺物は検出されていない。

塩之入城は、北西隅の平坦面を主郭部とし、南東の斜面を利用して曲輪を築いており、7カ所曲輪を確認した。主郭部からは、虎口、土塁状の高まりが検出されているが、建物跡は他の曲輪も含めて、1棟も検出されていない。東部には浅間A軽石を含んだ土坑があり、炭化材が出土しているため、烽火台としての機能も考えられる。

古墳は横穴式石室を持つ後期古墳であるが、城郭築造時に大きく削平されている。

野上塩之入遺跡
塩之入城遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の実施と経過

第1節　調査に至る経緯と調査の経過

1　調査に至る経緯

関越道上越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団により建設される。その埋蔵文化財調査の調整は、群馬県教育委員会文化財保護課が行い、路線内の分布調査をもとに、昭和60年上越線地域埋蔵文化財調査計画を策定した。調査は昭和61年度から5年間の予定で開始され、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核として、対応できない部分に調査会方式を導入することとし、藤岡市～富岡市の区間を同事業団、妙義町～松井田町の区間を調査会が調査することになった。同事業団は、上越線埋蔵文化財調査を専門とする組織を「関越道上越線調査事務所」として、吉井町南陽台に設置した。

塩之入城遺跡は、北は鏑川、南は野上川、東西は山地が続く地形となっており、谷に挟まれて独立した丘陵の頂部に主郭をもつ山城として、すでに知られていた。また、野上塩之入遺跡も県教育委員会文化財保護課による分布調査により遺物の散布が見られた地点で、A区は試掘を要する地区、B区は分布の薄い地区とされた。

2　調査の経過

調査は工事工程との関係もあり、また表土掘削用重機や調査器材搬入に適切な道路がなかったため、工事用道路の完成を待って、昭和63年2月16日から開始した。傾斜地にある遺跡のため、平地における発掘調査に比べ多くの困難があり、以下のような措置を取った。

(1)　調査事務所・駐車場を現地におくことができず、丘陵下の富岡市大島に置いて作業員・担当者は自動車で往復した。

(2)　この地域は地すべり地帯であり、自動車での移動に危険が伴うため、安全確認のため警備会社に委託して警備員を置いた。

(3)　電気・水道が届かず、水はタンクに入れて自動車で運搬した。

(4)　特に塩之入城遺跡は周囲が急傾斜であるため、岩盤を削って登坂路を取り付け、安全柵を設置した。

(5)　夏季は落雷の心配があるため避雷針を設置し、雷雲が発生したら直ちに引き上げた。

(6)　傾斜地であり、排土には危険が伴うため、多くの時間をさいて処理を工夫した。

以上のような条件下で調査が続けられ、8月上旬で野上塩之入遺跡の、10月末で塩之入城遺跡の調査が終了した。

調査日誌（抄）

昭和63年

2月16日(火)　野上塩之入遺跡A区調査開始。トレンチ設定、試掘開始。
2月29日(月)　B区トレンチ設定、試掘開始。
3月7日(月)　B区土坑掘り下げ開始。
3月9日(水)　方眼杭打ち測量（技研測量設計（株）委託、10日まで）。
3月15日(火)　A・B区間登坂路安全柵（手すり）設置（業者委託）。
3月23日(水)　工事用道路法面崩落のため発掘作業中止。室内作業を行う。
3月28日(月)　年度末につき発掘作業一時中断。
4月15日(金)　発掘作業再開、B区1号溝調査。
4月22日(金)　A区遺構検出作業開始。
5月10日(火)　A区浅間B軽石の堆積した土坑掘り下げ開始(20・22号土坑)。以後の調査で炭焼窯跡・住居跡であることが判明。
5月11日(水)　塩之入城遺跡下草刈り開始（業者委託）。
5月17日(火)　現場～事務所間移動のためマイクロバス運行開始。
5月18日(水)　塩之入城遺跡器材用テント設置。
5月19日(木)　A区22号土坑は住居跡であることが判明、1号住居跡とする。
5月20日(金)　A区20号土坑から炭化材検出、炭焼窯跡であることが判明。

5月24日(火)　33号土坑掘り下げ。炭化材が出土し炭焼窯跡であることが判明。
5月25日(水)　B区A60－Ⅱ46Grより旧石器（スクレイパー）出土。
6月１日(水)　遺跡の安全確認のため、警備保障会社に委託して警備士を配置。
6月４日(土)　塩之入城遺跡方眼杭打ち測量（技研測量設計（株）委託）。
6月６日(月)　塩之入城遺跡最下部テラストレンチ設定、掘り下げ開始。
6月７日(火)　21・37土坑が同一のもので、炭焼窯跡であることが判明。
6月10日(金)　ラジコンヘリによる野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡の航空写真撮影実施（K&Mエンタープライズ（株）委託）。
6月15日(水)　A区A46～49－Ⅰ90～93Gr付近縄文土器集中散布地点の調査開始。
6月21日(火)　塩之入城遺跡に避雷針設置工事(29日まで)
6月28日(火)　A区縄文土器集中散布地点を２号住居跡とし、遺物取り上げ、全景写真撮影を行う。20号土坑の下から住居跡を検出、３号住居跡とする。
塩之入城遺跡北面および西面に安全フェンスを設置。
7月１日(金)　A区19・21・37土坑の下から大型の住居跡を検出、４号住居跡とする。
7月６日(水)　３号住居跡の下にもう１軒住居跡を確認、５号住居跡とする。
7月14日(水)　５号住居跡床下から縄文前期の住居跡を検出、６号住居跡とする。
7月19日(火)　塩之入城遺跡休憩用テント設置、器材テント移動、落石防止板取り付け。以後本格的調査に入る。
7月21日(木)　A区２号住居跡の下にもう１軒縄文の住居跡を確認、７号住居跡とする。
塩之入城遺跡トレンチ設定、掘り下げ開始。最下テラス表土掘削開始。
作業員・担当者昇降用の登坂路工事開始。
7月25日(月)　B区旧石器出土地点周辺を掘り下げるが遺物の出土無し。
7月26日(火)　７号住居跡床下より土坑検出。掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。
8月３日(水)　A区住居跡周辺写真撮影、A区調査終了。
8月４日(木)　遺跡東の丘陵上からA区・B区の全景写真撮影。
塩之入城遺跡最上部のテラス（テラス①）から人力により掘り下げ開始。
8月５日(金)　B区調査終了。
塩之入城遺跡最下部のタンクから最上部のテラスまで水を上げる送水設備工事を行う。
8月10日(水)～８月15日(火)　断続的な降雨のため室内作業。
8月19日(金)・20日(土)　長雨のため、B区東側斜面、南側斜面、塩之入城北まで往復できず室内作業を行う。
8月23日(火)　塩之入城最上部のテラス南西傾斜面から、虎口への登坂路と思われる階段状の石組が検出される。
8月26日(金)　テラス①東側斜面から擂大の礫が多数出土する。後の調査で古墳の遺物と判明。
9月２日(金)　テラス①の南東斜面下から土師器・須恵器の破片が集中して出土したため、平面実測して取り上げ始める。
9月９日(金)　テラス①の東側のテラスで壁面・底面を検出し、城の曲輪（曲輪２）になることが判明。
9月13日(火)～９月30日　塩之入城北側の急斜面を、安全フェンスまで人力で表土を剥ぐ。
10月５日(水)　テラス③の壁面・底面の検出作業を行い曲輪であることを確認、曲輪３とする。
10月12日(水)　曲輪１東部の浅間A軽石を混入する土坑を掘り下げたところ下層から虎化材が出土。１号土坑とする。
10月14日(金)　曲輪１南西部の虎口状遺構から下の階段状遺構にかけて精査を開始する。
10月20日(木)　曲輪１南東部の石組・落ち込みは、古墳の石室と周囲であることが判明。平面実測と掘り下げを開始。
10月26日(水)　南側調査区外のテラス平面実測（技研測量設計（株）委託）。
10月27日(木)　城郭部分の調査終了。
10月28日(金)　ラジコンヘリによる航空写真撮影（K&Mエンタープライズ（株）委託）。
10月29日(土)　古墳石室調査終了。
10月30日(日)　曲輪１～６全景写真撮影。
古墳石室解体、掘り方検出。
10月31日(月)　古墳掘り方平面実測。
調査終了。

3　整理作業の経過

関越自動車道上越線の埋蔵文化財整理事業は、昭和63年４月から多野郡吉井町南陽台にある調査事務所敷地内の整理棟で開始された。

野上塩之入遺跡、塩之入城遺跡の整理事業については、両遺跡合わせて半年間で、整理開始後２年半たった平成２（1990）年10月から平成３年３月までとなった。

主な作業の流れ

２年10月　土器の分類・接合・復元作業。土器・石器の実測作業。土器拓本作業。
11月　石器の実測作業。遺構図面の修正作業。遺物写真撮影。
12月　遺構・遺物トレース作業。遺構写真図版の版下作成。遺物観察表作成。原稿執筆開始。
３年１～２月　遺物写真図版の版下作成。遺物トレース作業。遺物・遺構挿図の版下作成。原稿執筆。入札。
３月　校正。報告書刊行。遺物収蔵作業。

第2節　調査の方法

1　遺跡名の選定

塩之入城は調査前から山城として知られており、塩之入城の名前もあったため、調査当初は、塩之入城遺跡、塩之入城東遺跡と命名されていた。その後63年8月に遺跡名が検討され、埋文事業団担当遺跡については、原則として大字小字の連記を遺跡名とするように変更した。旧遺跡名は廃止せずに、事業名称として存続させることとした。これにより塩之入城東遺跡は野上塩之入遺跡と変更したが、塩之入城遺跡は中世城郭の単一遺跡の可能性が高く、周知の名称でもあるのでそのまま新遺跡名とした。

2　グリッド設定法

野上塩之入遺跡、塩之入城遺跡は東西に細長く並んでおり総距離は500mにおよぶ。調査区の区割りは、国家座標に乗る形で軸線を設定し、グリッドの呼称は両遺跡を通してできるようにした。

調査原点は、野上塩之入遺跡の北東部、国家座標のX＝＋26600.000、Y＝－87600.000の地点とし、ここをA0－I0とした。ここを基準とし、1グリッド2mとして南・西に向かって設定していった。南北ラインは、A0、A1、A2、・・・・・A98、A99、B0、B1、・・・・・とアルファベットとアラビア数字の併記とし、200mでアルファベットが、2mでアラビア数字が変わるものとした。東西ラインは、I0、I1、I2、・・・・・I98、I99、II0、II1、・・・・・とローマ数字とアラビア数字の併記とし、200mでローマ数字が、2mでアラビア数字が変わるものとした。そしてA1－I2のように、南北、東西の順で併記してグリッドの呼称とした。各グリッドの呼称は北東隅のポイント名をもってそのグリッドを表すものとした。

3　調査の手順

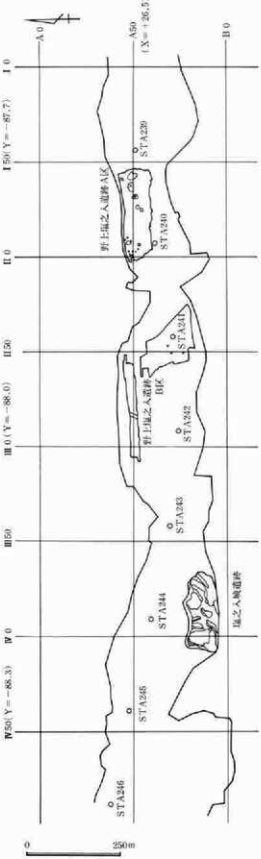
まず野上塩之入遺跡A区の調査に入り、2月末からはB区の調査にも入った。以後並行してA区とB区の調査を行い、6月からは一部塩之入城遺跡の調査にも入った。8月にA区・B区の調査を終了し、以後は塩之入城遺跡の調査を終了まで行った。調査は両遺跡とも、まずトレンチを設定し試掘を行った。その後表土を掘削し全面調査を行った。遺構の調査が終了後、ロームの残りの良い野上塩之入遺跡B区の東部について、8×8mに2×2mのトレンチ1基の割合で、プレの試掘を行った。

4　遺構の調査

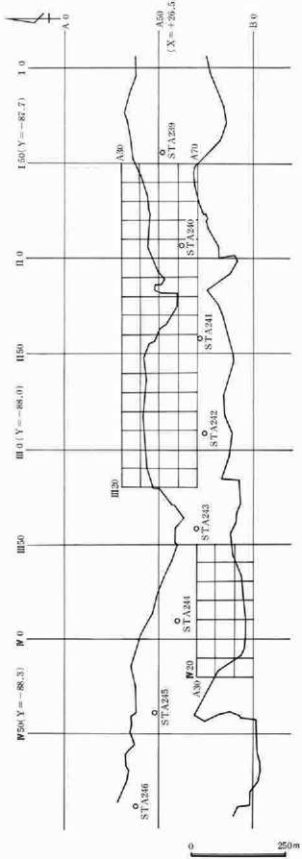
遺構平面図・地形図は20分の1で作成することを基本とし、住居跡のカマド、炉、詳細な遺物出土状況は10分の1で作成した。遺物は原則として出土位置、高さを記録して取り上げることとしたが、出土位置が不明になったもの、耕作溝等の新しい遺構に伴うものは一括して取り上げた。古墳は最終的に掘り方面まで出したが、石室の解体にはチェーンブロックを用い、大きくて取り上げられない場合はハンマーで割って取り上げた。

5　写真撮影

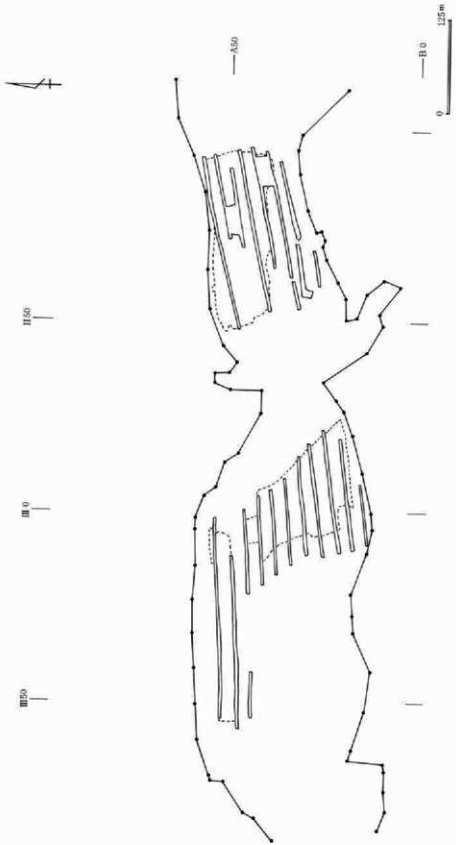
遺構写真は、白黒は6×7と35㎜フィルムを使用し、カラーリバーサルは35㎜を使用することを原則とした。遺跡全景航空写真は、K&Mエンタープライズ（株）に委託しラジコンヘリコプターで撮影した。



第１図　遺跡位置図



第２図　グリッド配置図



第3図　野上堤之入遺跡トレンチ配置図

第３節　基　本　土　層

野上塩之入遺跡、塩之入城遺跡とも丘陵上にあり、ローム層が堆積しているが、その上部には堆積土は少なく、浅間Ａ軽石を混入する暗褐色土の表土が薄く堆積している。

ローム層の下は、野上塩之入遺跡Ａ区では、新生代第三紀中新世の海成層である富岡層群の砂岩泥岩互層が存在しているが、Ｂ区および塩之入城遺跡では、中生代白亜紀後期から古第三紀にかけて堆積している下仁田構造帯の神農原礫岩層が存在しており、Ａ区とＢ区の間が層の境界となっている。

塩之入城遺跡

第Ⅰ層　暗褐色土　枯れ葉が堆積してできた腐葉土で、浅間Ａ軽石を多量に含んでいる。厚さは５～10cm

第Ⅱ層　褐色土　浅間Ａ軽石を多く含む耕作土。厚さは10～20cmである。

第Ⅲ層　黄褐色土　地山ローム層

野上塩之入遺跡Ａ区

第Ⅰ層　灰褐色土　浅間Ａ軽石を含む現表土。厚さは20～40cmである。

第Ⅱ層　暗褐色土　浅間Ｂ軽石を少量含む粘性の弱い土。厚さは20～30cmである。

第Ⅲ層　黄褐色土　地山ローム層

野上塩之入遺跡Ｂ区

第Ⅰ層　暗褐色土　浅間Ａ軽石を多量に含む耕作土。しまり弱い。厚さは10～20cmである。

第Ⅱ層　黄褐色土　ロームをベースとする層であるが、しまりは弱い。厚さは20～40cmである。

第Ⅲ層　黄褐色土　浅間板鼻黄色軽石（ＹＰ）を少量含む。

第Ⅳ層　明黄褐色土　浅間板鼻黄色軽石層

第Ⅴ層　明褐色土　炭化粒子を多く含む。

第Ⅵ層　明黄褐色土　砂粒、炭化粒子を少量含む。

第Ⅶ層　にぶい黄褐色土　砂粒を少量含む。

第Ⅷ層　赤褐色土　浅間板鼻褐色軽石（ＢＰ）層

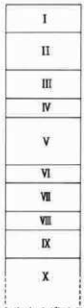
第Ⅸ層　明赤褐色土　浅間室田軽石（ＭＰ）層

第Ⅹ層　灰褐色土　砂質粘土層

ローム層

塩之入城遺跡

野上塩之入遺跡Ａ区



野上塩之入遺跡Ｂ区

第４図　基本土層図

第II章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境

本遺跡が所在する富岡市は群馬県南西部に位置し、ほぼ中央を鏑川が西から東へ流れている。鏑川は長野県境付近の矢川峠を源とし、下仁田町、富岡市、甘楽町、吉井町、藤岡市を流れ、高崎市倉賀野町で烏川と合流している。流れは東西方向であるが、所々で北へ曲がっており少しづつ北へ移って行く。支流は、南側に野上川、下川、雄川、北側に丹生川、高田川、星川等があり、南からのものが鏑川にほぼ直角に合流するのに対し、北側のものは鏑川とほぼ平行に流れている。

鏑川の両岸は上下二段の河岸段丘を形成している。段丘面は鏑川の南側が広く北側が狭くなっており、特に上位段丘面でその傾向が強くなっている。上位段丘面は、鏑川の北側で標高210～240m、下位面との標高差30～40mで、段丘面の幅は100～800m程である。鏑川の南側の上位段丘面は、標高200～240m、下位面との標高差40～50mで、北方へゆるく傾斜しており、幅は500m程である。下位段丘面は、標高が西部で230m東部で130m程であり、ゆるやかに東に傾斜した連続した平坦面になっている。幅は600～3,000m程であり、鏑川河床との標高差は13～15mである。

河岸段丘の両側には丘陵地になっているが、いずれも小さな谷が複雑に入り組んでいる。北部の丘陵地は標高240～300m程で、丘頂面が広く発達しており、南部の丘陵地は標高250～300mで北へ傾斜している。

市南部および西端部は山地となっている。南部の甘楽町・下仁田町の境界付近は、谷が深く尾根筋の狭い壮年期の山地地形を呈している。特に野上川上流から岩染川上流にかけては険しい崖となっている所が多い。

遺跡は鏑川の右岸に広がる丘陵地上に所在する。北端部に分水嶺を持ち、これ以北は鏑川に向かい一気に落ち込む、通称「蛇崩」と呼ばれる絶壁をなしており、河岸段丘は形成されていない。南側は緩斜面になっており、約1km先で東北東に流れる野上川に至るが、谷が入りくんでおり、遺跡も谷により3カ所に分かれている。遺跡地の標高は260～320mあり、鏑川との標高差は100mに達する。

地質的には、富岡市は関東山地の北縁に位置しているため、市の南部は関東山地の構成岩である三波川結晶片岩が分布している。市西部の大桁山南東麓には中世代白亜紀の層が分布している。黒色粘板岩を主とする南蛇井層、滑花崗岩、川井山石英閃緑岩などや跡倉層、神農原礫岩層などである。しかしながら、市内のほとんどの地域には、新生代第三紀中新世の海成層である富岡層群が広がっている。富岡層群は、牛伏層、小幡層、井戸沢層、福島層、吉井層、板鼻層に細分されるが、いずれも砂岩と泥岩が交互に積み重なる砂泥互層を基本としている。また鏑川の流域は二段の河岸段丘が発達しているが、上位段丘は第四紀洪積世末に、下位段丘は第四紀沖積世に形成されたものである。

野上塩之入遺跡、塩之入城遺跡はいずれも上部はローム層に覆われているが、その下は、野上塩之入遺跡A区では富岡層群の砂泥互層、野上塩之入遺跡B区と塩之入城遺跡では神農原礫岩層が堆積しており、野上塩之入遺跡A・B区間が地層の境目となっている。

第2節　歴史的環境

先土器時代　富岡市域内では、10数年前にこの時代の最終末に属すると考えられる長さ15.6cmの尖頭器が採集されているが、出土地は不明であり、他には先土器時代の遺構・遺物は検出されていなかった。

関越道上越線地域では、内匠日影周地遺跡から尖頭器が、下高瀬寺山遺跡から細石核が出土しているが、遺構として確認できるものはなかった。両遺跡とも丘陵地に立地している。

縄文時代　この時代の遺跡は、鏑川の上位段丘面および丘陵地に多くの遺跡の分布が見られる。最も古いものは上丹生字和田で採集された押型文系土器である。続いて前期関山式土器、諸磯式土器等の出土、採集がある。中期以降は確実に集落を形成するようになると思われるが、遺構の調査例は少ない。本宿・郷土遺跡では、前期関山式期の住居跡2軒と中期の柄鏡形敷石住居跡1軒が検出されており、小塚遺跡では、中期五領ヶ台式期の住居跡1軒と屋外埋設土器3基が検出されている。

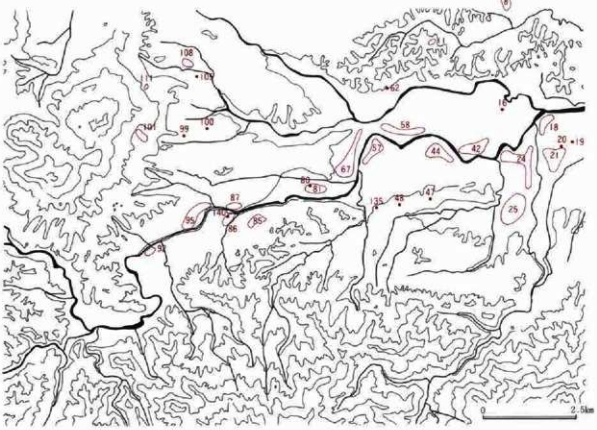
関越道上越線地域では、富岡市内のほとんどの遺跡で遺構・遺物が検出されている。前期の遺構は、本遺跡で関山式期の住居跡、南蛇井増光寺遺跡では黒浜式期の集落が検出されており、下高瀬寺山遺跡では諸磯b期の住居跡9軒、中高瀬観音山遺跡でも諸磯b期の住居跡6軒が検出されている。中期は、田篠中原遺跡で加曽利E式期の環状列石と配石遺構群が、内匠上之宿遺跡で竪穴住居3軒が、南蛇井増光寺遺跡で加曽利E式期の竪穴住居跡15軒と敷石住居跡3軒が検出されている。後期は、内匠上之宿遺跡で敷石住居跡が1軒、屋外埋設土器・土坑等が、南蛇井増光寺遺跡で敷石住居跡が1軒検出されている。

弥生時代　この時代は、上位段丘面・丘陵地とともに下位段丘面にも遺跡が増加する。しかしながら、遺跡数は縄文時代に比べ少なく、発掘調査が行われている遺跡も非常に少ない。その中で、小塚遺跡は中期後半の住居跡7軒と環濠と思われる溝が検出されている。

関越道上越線地域では、後期の住居跡が内匠上之宿遺跡で4軒、内匠日影周地遺跡で13軒、下高瀬寺山遺跡で1軒、中高瀬観音山遺跡で103軒、南蛇井増光寺遺跡で154軒検出されている。特に中高瀬観音山遺跡と南蛇井増光寺遺跡では100軒以上と多く、大規模な拠点的集落であると言えよう。

古墳時代　この時代になると下位段丘面に古墳群・集落が大規模に展開するが、丘陵地にも多くの遺跡が存在している。富岡市内で最も古い古墳と考えられるのは、北山茶臼山古墳と北山茶臼山西古墳である。両古墳は、鏑川右岸の丘陵上に存在するが、いずれも単独丘陵的な様相を呈す小丘陵上に立地する。北山茶臼山古墳は径40mの円墳と考えられ、三角縁神人車馬画像鏡や石釧が出土している。北山茶臼山西古墳は、全長28mの前方後方墳で、方格規矩鏡や鉄矛が出土している。出土土器や墳丘形態より、西古墳が茶臼山古墳に先行する可能性が高い。これ以後は後期に至るまで、富岡市域では古墳はほとんど検出されていない。新しく発見される可能性はあるが、後期に比べ圧倒的に少ないと考えられる。

後期には市域内の各所に多数の古墳が築かれるようになるが、これらは古墳群をなしているものが多い。主なものは、塚原古墳群、上田篠古墳群、善慶寺古墳群、長久保古墳群、桐渕古墳群、横瀬古墳群、芝宮古墳群、七日市古墳群、一ノ宮古墳群、神成古墳群、上小林古墳群、南蛇井古墳群、である。主要な古墳群は、すべて鏑川の両沿岸部の下位段丘面に集中している。古墳群周辺には、同時代の集落遺跡が存在している場合が多く、一ノ宮古墳群と本宿・郷土遺跡、長久保古墳群と内匠遺跡、上田篠古墳群と原田篠遺跡等があげられる。本宿・郷土遺跡から竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡3棟が、内匠遺跡から竪穴住居跡15軒が、原田篠遺跡から竪穴住居跡が8軒検出されている。この他、豪族の居館跡が本宿・郷土遺跡から、祭祀に関係す



第５図　周辺古墳・古墳群位置図（数字は一覧表の番号と一致する）

ると思われる滑石製模造品が曽木久保遺跡から検出されている。

関越道上越線地域でもほとんどの遺跡から古墳時代の遺構が検出されている。古墳は、田篠上平遺跡で後期古墳が３基、内匠日影周地遺跡で前期古墳１基、後期古墳１基、下高瀬上之原遺跡では、中期古墳が７基、北山茶臼山古墳では前期古墳１基が検出されている。竪穴住居跡は、内匠上之宿遺跡で後期が14軒、内匠諏訪前遺跡では後期が８軒、内匠日影周地遺跡では前期が１軒、後期が10軒、下高瀬上之原遺跡では前期が４軒、後期が39軒、中高瀬観音山遺跡では前期が８軒、後期が１軒、南蛇井増光寺・中沢平賀界戸遺跡では前期・後期合わせて300軒以上が検出されている。この他、下高瀬上之原遺跡で、埴輪窯跡２基が検出されている。

奈良・平安時代　奈良・平安時代の集落跡は、古墳時代後期の集落から継続して営まれている場合が多い。実際に発掘調査された例は少なく、本宿・郷土遺跡で奈良時代28軒、平安時代71軒、内匠遺跡で奈良時代３軒、平安時代７軒、原田篠遺跡で奈良時代２軒、平安時代８軒の住居跡が検出されている。

関越道上越線地域では、田篠上平遺跡で竪穴住居跡が50軒、掘立柱建物跡が23棟、下高瀬上之原遺跡で竪穴住居跡が９軒、下高瀬寺山遺跡で２軒、中高瀬観音山遺跡で３軒、中高瀬庚申山遺跡で５軒、北山茶臼山古墳で１軒、南蛇井増光寺遺跡で100軒以上検出されている。田篠上平遺跡と南蛇井増光寺遺跡以外は10軒以下の小規模なもので、古墳時代から継続しているもののほとんど規模が縮小している。古墳時代に下位段丘面に集落が営まれるようになるが、この時代には、奈良時代に始まる田篠上平遺跡の大規模集落に見られるように、丘陵上や上位段丘面の集落が減少して、下位段丘面にさらに多くの集落が新しく開始されるようになると思われる。また、浅間Ｂ軽石の降下以前の水田が内匠日向周地遺跡と南蛇井増光寺遺跡で検出されて

いるが、いずれも谷地等の幅の狭い場所に存在するため条里制との関係は推定できない。しかし、鏑川の右岸にある通称「高瀬田んぼ」は、下位段丘面の広い低地に立地し、条里制の区割りを残すと考えられる畦畔・道路が存在し、一部発掘調査により現用水路下から浅間B軽石の堆積する水路が確認されているため、条里制水田があった可能性が高いと思われる。

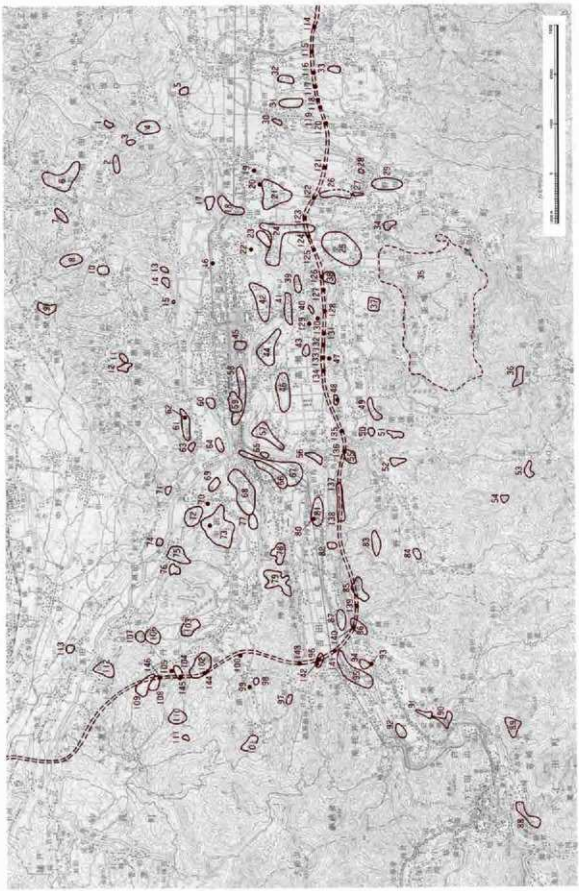
中近世　中近世の遺跡の調査例は少ないが、本宿・郷土遺跡および隣接する稲荷森遺跡で、中世の溝、井戸、掘立柱建物、墓壙と考えられる土坑等が検出されている。

鏑川の両岸には多くの城郭跡がある。（第113図参照）地形の影響があるためか、立地は丘城と山城がほとんどで、平城はない。発掘調査が行われているものは少ないが、宮崎城で、二の丸の大部分と本丸東半部が行われ、本丸堀と柱穴6基が検出されている。宇田城では、西城が発掘され西面に犬走りが検出された。

関越道上越線地域では、中近世の遺構・遺物も数多く検出されている。田篠上平遺跡では近世の墓壙1基が、内匠上之宿遺跡で内匠城の外堀・土塁、掘立柱建物跡6棟、井戸11基、配石遺構、溝、土坑が、内匠諏訪前遺跡では、近世の屋敷跡、掘立柱建物、井戸が、日影周地内匠日向周地遺跡では中近世の水田2面が、下高瀬上之原遺跡では近世の墓壙13基が、中高瀬庚申山遺跡では近世庚申塔基礎1基が、大島上城遺跡では、大島上城のテラス・柱穴列・土坑・虎口、中近世の祭祀遺構・墓壙が、南蛇井増光寺遺跡では中世の掘立柱建物、堀、井戸、土坑が、中沢平賀界戸遺跡では中世の竪穴状遺構、掘立柱建物、塚、墓壙、近世の配石遺構が検出されている。

周辺主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	種別	備考
1	鍬城跡	中世	城館跡	
2	白岩遺跡	縄文時代、古墳時代	包蔵地	
3	後賀上橋	古墳時代	墳墓	
4	後賀遺跡	縄文時代	包蔵地	
5	庭谷城跡	中世	城館跡	
6	相撲田遺跡	縄文時代	包蔵地	
7	諏訪谷古墳群	古墳時代	墳墓	
8	清水入古墳群	古墳時代	墳墓	8基存在。7世紀代の築造。
9	天王山城跡	中世	城館跡	
10	上ノ山遺跡	縄文時代	包蔵地	
11	桐谷古墳群	古墳時代	墳墓	
12	高林城跡	中世	城館跡	
13	背谷戸遺跡	縄文時代	包蔵地	
14	宮岡城跡	中世	城館跡	
15	十王山烽火台	中世	城館跡	
16	妙部塚古墳	古墳時代	墳墓	
17	星田城跡	中世	城館跡	
18	塚原古墳群	古墳時代	墳墓	33基の円墳から成る。7世紀代の築造。
19	天皇塚古墳	古墳時代	墳墓	前方後円墳。竪穴系の主体部と考えられる。5世紀前半の築造。
20	宿の森稲荷塚古塚	古墳時代	墳墓	周濠をもつ全長100mの前方後円墳。両袖型横穴式石室をもつ。
21	二日市古墳群	古墳時代	墳墓	20基程の円墳が残る。5世紀後半からの築造。
22	久保遺跡	古墳時代	祭祀遺跡	滑石製模造品多数出土。
23	原田篠遺跡	古墳～平安時代	集落跡	「上田篠古墳群・原田篠遺跡」富岡市教委（1981）
24	上田篠古墳群	古墳時代	墳墓	〃　　30数基現存。
25	善慶寺古墳群	古墳時代	墳墓	約20基現存。かつては50基以上存在。
26	下城跡	中世	城館跡	
27	中城跡	中世	城館跡	
28	上野城跡	中世	城館跡	
29	中村遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代	包蔵地	



第6図　周辺の主要遺跡

No.	遺　跡　名	時　　代	種　別	備　　考
30	大畑屋敷跡	中世	城館跡	
31	浅湯城跡	中世	城館跡	
32	仁井屋城跡	中世	城館跡	
33	倉内城跡	中世	城館跡	
34	鳥井戸屋敷跡	中世	城館跡	
35	国越城跡	中世	城館跡	
36	峠城跡	中世	城館跡	
37	岡本堀ノ内	中世	城館跡	
38	内匠城跡	中世	城館跡	
39	内匠遺跡	古墳～平安時代	集落跡	「内匠遺跡」富岡市教委（1982）
40	向山遺跡	古墳時代	集落跡	
41	長久保遺跡	古墳時代	墳墓	
42	芝宮古墳群	古墳時代	墳墓	105基存在。６～７世紀代の築造。
43	陣屋遺跡	古墳時代	集落跡	
44	桐岡古墳群	古墳時代	墳墓	45基程存在。
45	富岡陣屋跡	中・近世	城館跡	
46	一本木遺跡	古墳時代	包蔵地	
47	天皇塚古墳	古墳時代	墳墓	
48	北山茶臼山西古墳 茶臼山の砦跡	古墳時代 中世	墳墓 城館跡	三角縁神人車馬画像鏡出土、径40mの円墳か。
49	菅原遺跡	縄文時代、古墳時代	包蔵地	
50	原遺跡	縄文時代	包蔵地	
51	浅香入城跡	中世	城館跡	
52	岩象城跡	中世	城館跡	
53	藤田城跡	中世	城館跡	
54	二ツ山城跡	中世	城館跡	
55	大島上城跡	中世	城館跡	
56	大島下城跡	中世	城館跡	
57	横瀬古墳群	古墳時代	墳墓	27基分布。「横瀬古墳群」富岡市教委（1989）
58	七日市古墳群	古墳時代	墳墓	26基分布。御三社古墳（前方後円墳）含む。６～７世紀代の築造。
59	七日市陣屋跡	中世	城館跡	
60	観音前遺跡	縄文時代	包蔵地	
61	馬川遺跡	縄文時代	包蔵地	
62	御嶽塚古墳	古墳時代	墳墓	終末期古墳。銅製帯金具出土。
63	馬川城跡	中世	城館跡	
64	小塚遺跡	縄文時代、弥生時代	集落跡	「小塚・六反田・久保田遺跡」富岡市教委（1987）
65	生田遺跡	縄文時代	包蔵地	
66	本宿・郷土遺跡	縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世	集落跡 居館跡	縄文・古墳～平安の集落跡、古墳時代の豪族居館跡、中世の建物、塩等を検出。「本宿・郷土遺跡」富岡市教委（1981）
67	一ノ宮古墳群	古墳時代	墳墓	17基存在。前方後円墳２基を含む。（太子堂塚・堂山稲荷）
68	賀前神社遺跡	縄文時代	包蔵地	
69	阿蘇岡遺跡	縄文時代、弥生時代	包蔵地	
70	不動塚古墳	古墳時代	墳墓	
71	金比羅山の砦	中世	城館跡	
72	山根遺跡	古墳時代	包蔵地	円筒埴輪、形象埴輪散布。
73	恵下原遺跡 宇田城跡	縄文時代、古墳時代、中世	集落跡 城館跡	滑石製模造品の製品・未製品・剥片等多数発見。
74	前期高田館	中世	城館跡	
75	高田城跡	中世	城館跡	
76	高田西城跡	中世	城館跡	
77	押出遺跡	古墳時代	集落跡	
78	宮崎城跡	中世	城館跡	
79	神成城跡	中世	城館跡	
80	駒塚古墳	古墳時代	墳墓	
81	神農原古墳群	古墳時代	墳墓	
82	大山城跡	中世	城館跡	
83	中山古墳群	古墳時代	墳墓	
84	野上の砦	中世	城館跡	
85	袖瀬古墳群	古墳時代	墳墓	
86	下鍋田古墳群	古墳時代	墳墓	

No	遺跡名	時代	種別	備考
87	上小林古墳群	古墳時代	墳墓	
88	鷹ノ巣城跡	中世	城館跡	
89	吉崎城跡	中世	城館跡	
90	馬山西城跡	中世	城館跡	
91	馬山東城跡	中世	城館跡	
92	竹ノ上古墳群	古墳時代	墳墓	
93	大塚古墳	古墳時代	墳墓	
94	原城跡	中世	城館跡	
95	南蛇井古墳群	古墳時代	墳墓	52基存在。6世紀後半～7世紀代築造。
96	平賀城跡	中世	城館跡	
97	鼓淵の砦	中世	城館跡	
98	原の内出跡	中世	城館跡	
99	丹生5号墳	古墳時代	墳墓	
100	丹生3・4号墳	古墳時代	墳墓	
101	山口古墳群	古墳時代	墳墓	
102	丹生城跡	中世	城館跡	
103	丹生東城跡	中世	城館跡	
104	五分一遺跡	縄文時代	包蔵地	
105	金東塚古墳	古墳時代	墳墓	
106	中山遺跡	縄文時代	包蔵地	
107	早道場遺跡	古墳時代	集落跡	
108	千足古墳群	古墳時代	墳墓	
109	千足遺跡	縄文～平安時代	集落跡	
110	和田遺跡	縄文時代	包蔵地	
111	和田古墳群	古墳時代	墳墓	
112	郷土ケ谷津の砦	中世	城館跡	
113	鎌前上の砦	中世	城館跡	
114	長根安坪遺跡	縄文～平安時代	集落・墳墓	縄文～平安の集落・墳墓が重中する。
115	天引口明塚遺跡	古墳時代	墳墓	
116	天引狐崎遺跡	弥生・古墳時代、中世	集落・墳墓	
117	天引向原遺跡	先土器～近世	集落跡	
118	白倉下原遺跡	先土器～近世	集落跡	古墳～平安の大集落、滑石製工房跡検出。
119	白倉東八幡遺跡	縄文・古墳時代	集落跡	
120	白倉南水塚遺跡	縄文・古墳時代	集落跡	
121	上野松葉遺跡	古墳～平安時代	集落跡	
122	上野寺塚遺跡	弥生～平安時代	集落跡	
123	田篠上平遺跡	古墳・奈良・平安時代	墳墓・集落	古墳3基。奈良・平安時代の集落。
124	田篠中原遺跡	縄文時代	集落跡	縄文中期の環状列石・配石遺構群。
125	善慶寺早道場遺跡	古墳～平安時代	集落跡	古墳時代後期以降の集落。
126	内匠上之宿遺跡	縄文～古墳時代、中世	集落・城跡	内匠城外堀虎口付近調査。縄文・弥生・古墳の住居散見。
127	内匠諏訪前遺跡	縄文・弥生時代、近世	集落跡	浅間A軽石降下前後の屋敷跡検出。
128	内匠日影周地遺跡	縄文・弥生・古墳時代	集落・墳墓	丘陵端部に弥生後期の小規模集落が展開
129	下高瀬前田遺跡	近世	生産跡	江戸時代の畑跡。
130	内匠日向周地遺跡	古墳・平安時代、中世	生産跡	平安時代・中近世の水田、古墳時代の木製品多数出土。
131	下高瀬上之原遺跡	古墳・奈良・平安時代	集落・墳墓	古墳～平安時代の集落、中期古墳群、埴輪窯跡を検出。
132	下高瀬寺山遺跡	縄文・弥生・平安時代	集落跡	縄文前期の小規模集落。
133	中高瀬観音山遺跡	縄文・弥生～奈良時代	集落跡	弥生時代後期の拠点的集落。
134	中高瀬庚申山遺跡	縄文・弥生～平安時代	集落跡	平安時代の住居跡から須恵器の水瓶出土。
135	北山茶臼山西古墳	古墳・平安時代	墳墓	前期の前方後方墳。方格規矩鏡出土。
136	大島上城遺跡	中近世	城館跡	中世城郭、鉄砲玉出土。隣接する大島富士は中世以降の信仰対象。
137	野上塩之入遺跡	縄文・奈良・平安時代	集落跡	当該遺跡。
138	塩之入城遺跡	古墳時代、中世	城館跡	当該遺跡。
139	柚瀬遺跡	縄文・古墳時代、中世	墳墓・城跡	中世城郭柚瀬城の主郭部を調査。
140	下鎌田遺跡	縄文～平安時代、中世	集落・城跡	縄文時代中期の大集落。中世城郭下鎌田城を調査。
141	海蛇井増光寺遺跡	縄文～平安時代、中世	集落跡	縄文～中世の複合遺跡、各時代の住居跡が大規模に展開。
142	中沢平賀界戸遺跡	縄文～平安時代	集落跡	古墳時代後期の住居が主体。
143	前畑遺跡	縄文・古墳～平安時代	集落跡	
144	丹生城西遺跡	平安～近世	溝・土坑	
145	五分一遺跡	縄文・土師	散布地	
146	千足遺跡	縄文～平安時代	集落跡	

第Ⅲ章　野上塩之入遺跡

第１節　遺 跡 の 概 観

野上塩之入遺跡Ａ区は、調査区中央東よりに南に開く谷があり、それを小尾根が取り巻く地形になり、北西隅が最も高くなっている。遺構としては、竪穴住居跡７軒（縄文時代前期１・中期２、奈良時代２、平安時代２）炭焼窯跡３基（平安時代）、土坑23基（縄文時代５基、他は奈良時代以降か？）が検出されている。

野上塩之入遺跡Ｂ区は、谷津を隔ててＡ区の西側に位置している。さらに谷を隔てた西には塩之入城遺跡が存在する。東西にのびる丘陵の頂部と、そこから南東にのびる幅広い尾根の緩斜面上にあり、中近世の溝、土坑等の遺構と、縄文時代の遺物、先土器時代の石器が検出されている。溝は、調査区北西部を南北に走り、東西に長い丘陵を分断する形になっている。溝の西側は、通称「テシロ」と呼ばれた場所で、塩之入城と関係する部分であると思われる。土坑は３基あり、いずれも中近世のものと思われるが、出土遺物は少ない。また、南東部の斜面には、浅間Ｂ軽石を含む黒褐色土が数カ所認められたため、土坑として掘り下げた結果、人為的なものではなく、地下棲息動物等の穴であることが判明した。

野上塩之入遺跡　竪穴住居跡・土坑一覧表

奈良・平安時代住居跡

No.	平面形	規模(m)	面積(㎡)	壁高(cm)	主軸方位	カマド 位置	カマド 規模(m)	カマド 主軸方位	出土遺物
1	長方形	3.52×3.28	9.5	56	N-84°-E	東壁南寄り	1.06×0.87	N-81°-E	土師甕・坏、須恵甕・瓶・坏、灰釉、鉄斧、鉄製紡錘車、砥石、縄文土器
3	長方形	3.40×3.00	9.5	60	N-93°-E	東壁南寄り	1.65×1.00	N-95°-E	土師甕・坏、須恵甕・瓶・坏、縄文土器
4	長方形	8.40×4.20	35.0	90	N-6°-E	北壁東寄り	1.40×1.06	N-5°-W	土師甕・坏・鍋、須恵甕・瓶・蓋、縄文土器
5	長方形	4.68×4.00	16.0	56	N-86°-E	北壁中央部	1.79×1.20	N-5°-W	土師甕・坏、須恵甕・坏、こも編石、縄文土器

縄文時代住居跡

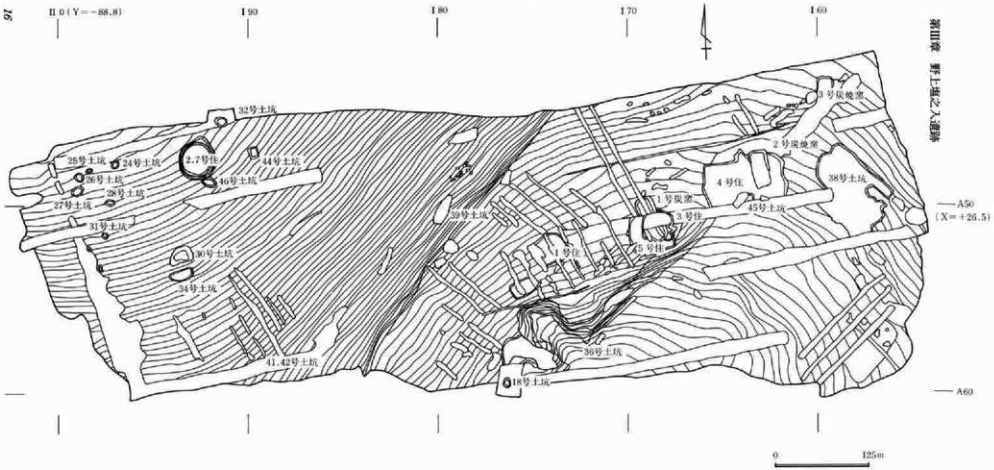
No.	平面形	規模(m)	面積(㎡)	壁高(cm)	主軸方位	炉 位置	炉 規模(cm)	炉 深さ	炉 主軸方位	出土遺物
6	長方形	3.26×2.96	8.5	88	N-2°-W	中央北より	61×38	15	N-4°-W	縄文土器、くぼみ石、磨石
2	楕円形	3.80×3.28	10.0	50	N-13°-E	中央部				縄文土器、多孔石、くぼみ石、磨石、打斧
7	不正形	4.20×4.10	14.0	64	N-56°-E					縄文土器、多孔石、くぼみ石、磨石

炭焼窯跡

No.	平面形	規模(m)	深さ	主軸方位	出土遺物	No.	平面形	規模(m)	深さ	主軸方位	出土遺物
1	隅丸長方形	4.00×1.60	50	N-28°-W	炭化材	3	隅丸長方形	(2.24)×1.74	26	N-S	炭化材、石鏃
2	長方形	4.20×2.00	74	N-77°-E							

土　坑

No.	平面形	規模(m)	深さ	主軸方位	出土遺物	No.	平面形	規模(m)	深さ	主軸方位	出土遺物
17A	楕円形	1.40×1.02	45	N-90°-E	縄文土器、石器	34	楕円形	2.58×1.16	46	N-72°-E	縄文土器
17B	楕円形	2.08×1.73	134	N-90°-E	縄文土器、石器	36	不正形	9.00×5.00	134	N-45°-W	土師器、須恵器、縄文土器、石器
27	楕円形	1.58×1.08	106	N-54°-E	縄文土器、石器						
32	不正円形	1.28×0.90	42	N-90°-E	縄文土器、石器	38	不正形	9.70×6.80	52	N-42°-W	土師器、須恵器、縄文土器、石器
46	不正形	1.85×1.20	25	N-25°-E	縄文土器						
18	楕円形	1.00×0.80	30	N-S	なし	39	長方形	3.24×1.34	70	N-26°-E	なし
23	長方形	2.60×2.00	30	N-62°-E	須恵甕	40	長方形	2.92×0.74	32	N-24°-E	なし
24	楕円形	1.00×0.94	16	N-20°-E	なし	41	隅丸長方形	0.90×0.44	48	N-56°-E	なし
25	台形	0.66×0.56	14	N-26°-E	なし	42	不正形	5.60×2.04	38	N-27°-E	なし
26	隅丸方形	1.04×0.90	26	N-28°-W	なし	44	正方形	0.73×0.69	27	N-72°-E	なし
28	隅丸長方形	0.88×0.56	28	N-89°-E	縄文土器	45	長方形	1.04×0.90	86	N-90°-E	なし
29	楕円形	0.96×0.72	36	N-73°-E	なし	2	不正円形	1.52×1.40	44	N-2°-W	石器
30	不正円形	2.44×1.70	38	N-80°-E	縄文土器、石器	5	楕円形	1.20×1.06	48	N-79°-E	なし
31	長方形	1.00×0.64	36	N-10°-W		8	隅丸長方形	1.32×0.86	64	N-55°-E	なし



第7図　野上塩之入遺跡A区全体図

第2節　A区奈良・平安時代

1号住居跡

位置　A51・52－I73・74Gr　**重複**　新しい耕作溝・ピットに切られているだけである。

平面形態　南北に長い長方形　**規模**　東西3.52m×南北3.28m

壁高　56cm　やや傾斜している。　**面積**　9.5m²　**主軸方位**　N－81°－E　**壁溝**　なし

柱穴　なし　**貯蔵穴**　南東隅に位置し、東西1.0m南北0.7mの楕円形を呈する。深さは41cmである。

床面　黒褐色土を貼り床とし、南に向かってやや傾斜している。東壁際及び中央の一部に焼土の広がりが見られる。

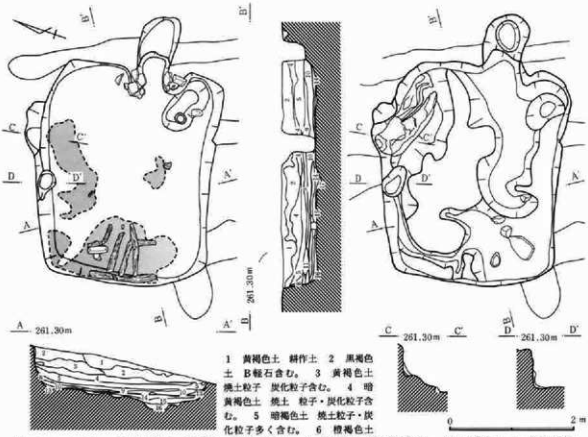
掘り方　中央北よりがやや高くなっており、所々に地山岩盤が露呈している。

遺物出土状況　カマド前、カマド左脇、住居中央部に土器が多く出土し、南壁際には炭化材が出土している。

カマド

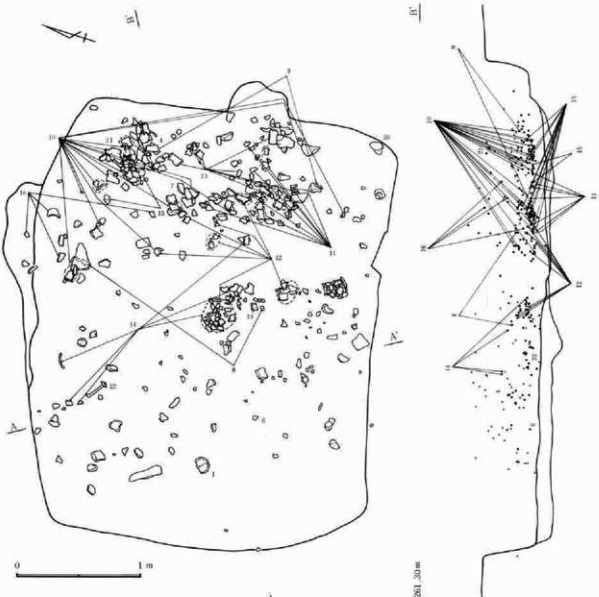
位置　東壁やや南より　**主軸方位**　N－81°－E　**規模**　全長1.06m　幅0.87m

構築　袖は礫岩及び凝灰岩を袖石とし、黒褐色土で構築されている。燃焼部はほぼ壁の位置にあり、火床面は床面より10cm程低くなっている。煙道部は壁より30cm外側で、約60度の角度で一旦立ち上がり、さら



1　黄褐色土　耕作土　2　黒褐色土　B軽石含む。　3　黄褐色土　焼土粒子　炭化粒子含む。　4　暗黄褐色土　焼土　粒子・炭化粒子含む。　5　暗褐色土　焼土粒子・炭化粒子多く含む。　6　橙褐色土　焼土をベースとする。　7　暗褐色土　焼土粒子・炭化粒子含む。　8　黒褐色土　焼土粒子含む。　9　暗褐色土　ローム粒子含む。　10　暗褐色土　ローム・焼土ブロック含む。　11　暗赤褐色土　焼土層　12　暗黄褐色土　ロームを含む。　13　暗褐色土　焼土粒子含む。　14　黒褐色土　焼土粒子含む。貼床　15　黒褐色土　白色粒子含む。貼床　16　黒褐色土　貼床　17　暗黄褐色土　貼床

第8図　1号住居跡



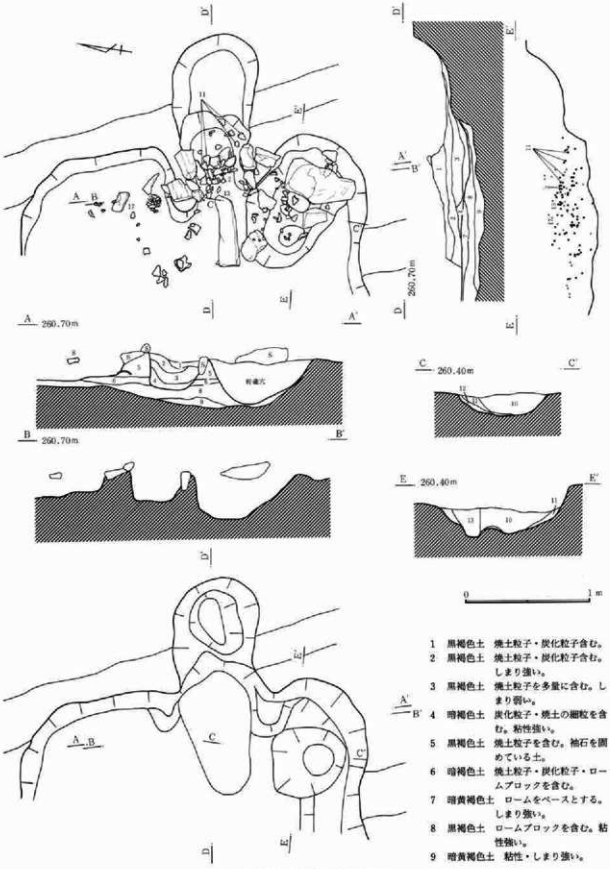
第9図　1号住居跡遺物出土状況

に60cm外側で立ち上がっているが、上部は耕作ピットにより削平されているため不明である。

遺物出土状況　燃焼部に土器が集中して見られ、前面及び貯蔵穴上面に、礫岩・凝灰岩が散布している。

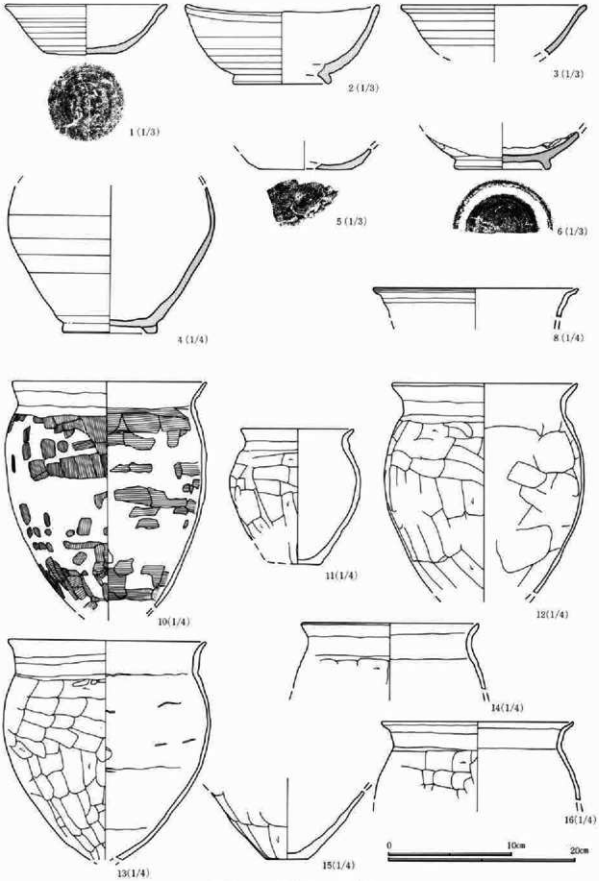
出土遺物　土師器では、甕が268点（8～16他）と多くなっている。ほとんどが「コ」の字状口縁で胴部外面箆削りの壁であるが、10のみ胴部内外面とも刷毛調整となっている。坏は6点（23他）と非常に少なくしかも前代の混入品がほとんどである。逆に須恵器の坏は18点（1～3・5・24～26他）と多く、供膳具の主流をしめている。また灰釉陶器（6）も1点出土し、他に鉄斧（21）と鉄製の紡錘車（22）が出土している。

所見　炭化材の出土や床・壁面が焼けていることなどから、焼失家屋であった可能性が高い。覆土には浅間B軽石を含む黒色土が1～3号炭焼窯と同じ状態で存在するため、炭焼窯とほぼ同時期のものと思われ、炭焼きを生業とした人々の住居であったことも考えられる。しかしながら、出土遺物は他の一般集落のものと

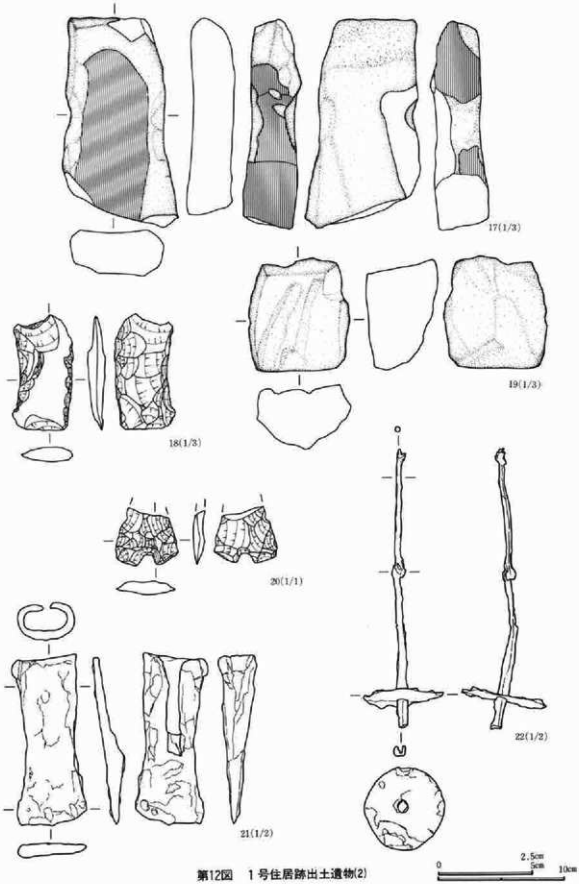


1　黒褐色土　焼土粒子・炭化粒子含む。
2　黒褐色土　焼土粒子・炭化粒子含む。しまり強い。
3　黒褐色土　焼土粒子を多量に含む。しまり弱い。
4　暗褐色土　炭化粒子・焼土の細粒を含む。粘性強い。
5　黒褐色土　焼土粒子を含む。袖石を固めている土。
6　暗褐色土　焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックを含む。
7　暗黄褐色土　ロームをベースとする。しまり強い。
8　黒褐色土　ロームブロックを含む。粘性強い。
9　暗黄褐色土　粘性・しまり強い。

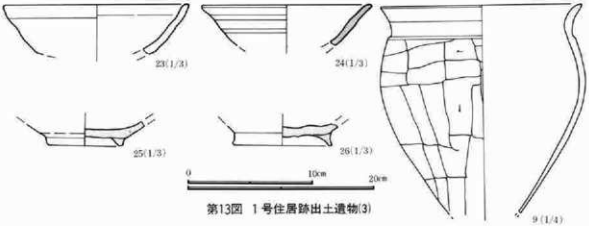
第10図　1号住居跡カマド



第11図　1号住居跡出土遺物(1)



第12図　1号住居跡出土遺物(2)

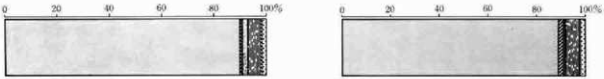


第13図　1号住居跡出土遺物(3)

変わらないため、生活は一般農耕集落の人々と同様なものであったと思われる。

1号住土器分類表

種別	土師器		須恵器			灰釉陶器	縄文土器	計
器種	甕	坏	甕	甑	坏			
点数	268	6	2	1	18	1	5	301
重量(g)	5675	45	30	135	300	50	75	6280



第14図　1号住居跡土器分類グラフ

1号住居跡出土遺物観察表

図No.	種別 器種	出土位置	量目 (cm)	①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②構成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	須恵器 坏	南西 +14	①12.8 ③ 4.0	②5.4 ④3/4	①灰黄色～黄灰色 ②還元焔、やや軟 ③雲母、白色粒子、砂粒を含む。	体部内外面ともロクロ調整。底部は回転糸切り無調整。内面の大部分と外面の1部が黑変。
2	須恵器 高台付埦	カマド +23	①(15.2) ③ 6.3	②(7.6) ④1/3	①灰色 ②還元焔、硬 ③白色粒子、砂粒を含む。	体部内外面ともロクロ調整。付高台。
3	須恵器 坏	カマド +16	①(14.6) ③—	②— ④口～体1/4	①黄灰色 ②還元焔、やや軟 ③雲母・白色粒子・砂粒を含む。	体部内外面ともロクロ調整。
4	須恵器 甑	北東 +12	①— ③—	②10.0 ④1/2	①灰色 ②還元焔、やや硬 ③砂粒を含む。	ロクロ調整。
5	須恵器 坏	住居外 北東	①— ③—	②(7.1) ④体～底1/4	①にぶい黄橙色 ②酸化焔気味、やや軟 ③白色粒子・砂粒を含む。	底部回転糸切り無調整。
6	灰釉陶器 高台付埦	南西 +8	①— ③—	②(7.2) ④底部1/2	①灰白色 ②還元焔、硬 ③砂粒を微量含む。	ロクロ調整。底部櫛で調整。付高台、釉は塗り掛けか。
8	土師器 甕	北東 +16	①(21.8) ③—	②— ④口縁部1/3	①明褐色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。
9	土師器 甕	北東 +8	①21.4 ③—	②— ④2/3	①明赤褐色 ②酸化焔、やや硬 ③白色粒子・砂粒を微量含む。	口縁部横撫で。胴部外面箆削り。内面箆撫で。
10	土師器 甕	北東 +10	① 20.5 ①(24.4)	②— ④底部欠損	①にぶい橙色 ②酸化焔、やや軟 ③雲母、砂粒を含む。	口縁部横撫で。胴部内外面とも胴毛調整後撫で調整。
11	土師器 甕	南東 +9	①11.9 ③14.3	②(5.5) ④3/4	①明赤褐色 ②酸化焔、やや硬 ③白色粒子・砂粒を含む。	口縁部横撫で。胴部外面箆削り、内面箆撫で。底部箆削り。
12	土師器 甕	南東 +10	① 19.6 ③(22.0)	②— ④2/3	①橙色 ②酸化焔、やや軟 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。胴部外面箆削り、内面刷毛調整後撫で。
13	土師器 甕	南東 +11	①20.8 ③—	②— ④1/5	①橙色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を微量含む。	口縁部横撫で。胴部外面箆削り、内面箆撫で。

図No	種別 器種	出土位置	量目 ①口径 ②底径 (cm) ③器高 ④残存	①色調 ②構成 ③胎土	成形・調整の特徴
14	土師器 甕	北西 +14	①18.7 ③—	②— ④口縁部3/4	①明褐色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を微量含む。	口縁部横撫で。胴部外面箆削り、内面箆撫で。底部箆削り。
15	土師器 甕	北東 +11	①— ③—	②— ④底部1/5	①にぶい赤褐色 ②酸化焔、やや硬 ③白色粒子・砂粒を微量含む。	胴部外面箆削り、内面箆撫で、底部箆削り。
16	土師器 甕	北東 +18	①(22.0) ③—	②— ④口縁部1/2	①にぶい褐色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を微量含む。	口縁部横撫で。胴部外面箆削り、内面箆撫で。底部箆削り。
23	土師器 坏	覆土	①(14.8) ③ 3.9	②(9.6) ④1/5	①にぶい褐色 ②酸化焔、やや硬 ③白色粒子・砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部外面指押さえ。内面撫で。
24	須恵器 坏	覆土	①(13.6) ③—	②— ④1/4	①灰色 ②還元焔、やや硬 ③白色粒子・砂粒を含む。	ロクロ調整。
25	須恵器 高台付坏	覆土	①— ③—	②6.6 ④1/4	①灰黄色 ②還元焔、やや軟 ③白色粒子・砂粒を含む。	ロクロ調整。底部糸で調整。付高台。
26	須恵器 高台付坏	覆土	①— ③—	②(7.8) ④1/5	①灰色 ②還元焔、やや軟 ③白色粒子・砂粒を含む。	ロクロ調整。底部糸で調整。付高台。

図No	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
17	砥石	北東+17	(16.5)	(9.2)	(4.6)	780	一部欠損	砂岩	上面に2条の溝があるが表面は粗い。
18	打製石斧	かまど外	9.2	4.9	1.4	70	完形	輝緑岩	短冊形。片面に自然面を残す。
19	砥石	南東+6	8.9	8.1	5.7	460	一部欠損	砂岩	3面使用されており、両側面中央はくびれる。
20	石臼	南東+52	1.4	1.7	0.4	1	先端部欠	黒曜石	無茎。
21	鉄斧	北東+44	9.1	3.9	0.3~1.0	110	完形	肉厚でソケット状の差し込み口をもつ。	
22	紡錘車	北西+11	14.7	4.3	0.2~0.7	15.3	一部欠損	芯棒の基部を欠損する。	

3号住居跡

位置　A50・51－I67～69Gr

平面形態　南北に長い長方形

規模　東西3.4m　南北3.0m

壁高　60cm　やや傾斜している。

面積　9.5m²

主軸方位　N－93°－E

壁溝・柱穴・貯蔵穴　なし

床面　ほぼ平坦であり、地山及び5号住覆土を直接床面としていると思われる。

掘り方　掘り方を床面としていると思われるが、5号住と重複するため、明確には確認できなかった。

遺物出土状況　中央部から南側にかけて土器が多く出土し、カマド右脇には特に集中している。

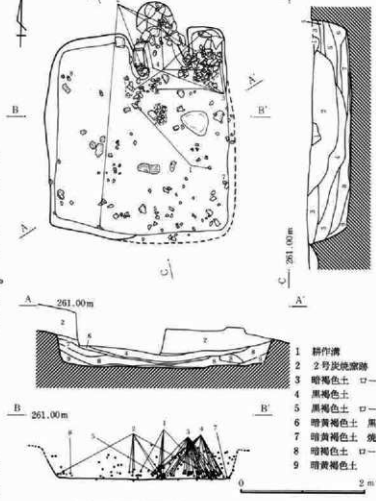
カマド

位置　東壁南より

主軸方位　N－95°－E

規模　全長1.05m　幅1.00m

構築　袖は砂岩・凝灰岩を袖石とし暗褐色土で構築されているが、さらにカマド壁全面にも砂



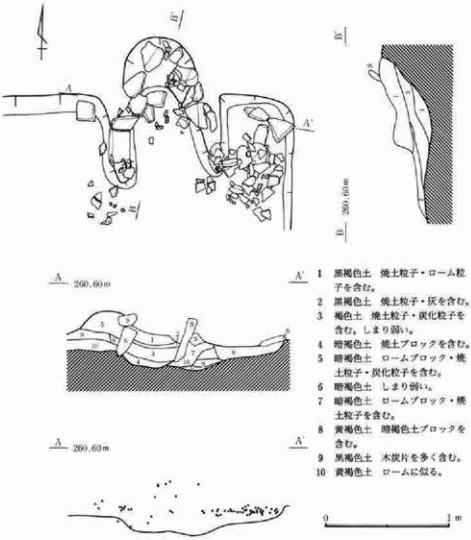
第15図　3号住居跡

岩・凝灰岩を立て並べている。燃焼部は壁のやや内側に位置し、火床面は床面とほぼ同レベルで平坦であるが、奥に向かってやや傾斜している。煙道は、壁から45cm外側で、約40度の角度で立ち上がっている。

遺物出土状況

右袖部及びその右脇に、土師器甕が集中して出土し、また袖、壁面のカマド構築材と同様の砂岩・凝灰岩も右脇から出土している。

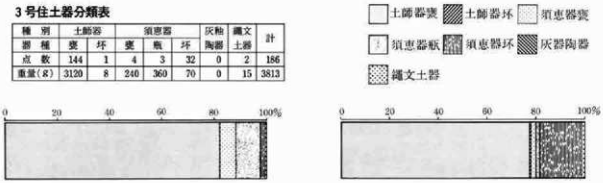
出土遺物　土師器では、甕が144片と多く、坏は1片のみである。7の甕の口縁部は「コ」



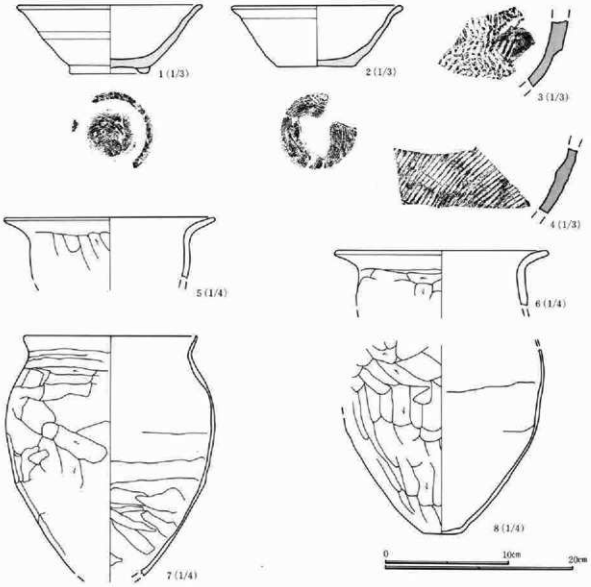
第16図　3号住居跡カマド

3号住土器分類表

種別	土師器		須恵器			灰釉陶器	縄文土器	計
器種	甕	坏	甕	甕	坏			
点数	144	1	4	3	32	0	2	186
重量(g)	3120	8	240	360	70	0	15	3813



第17図　3号住居跡土器分類グラフ



第18図　3号住居跡出土遺物

3号住居跡出土遺物観察表

図No	種別 器種	出土位置	最目 (cm)	①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	須恵器 坏	北東 +1	①14.8 ③5.4	②6.3 ④口縁完形	①にぶい黄橙色 ②還元焔、やや軟 ③雲母・砂粒を含む。	体部内外面ともロクロ調整。底部回転糸切り無調整。付高台。
2	須恵器 坏	カマド +14	①13.7 ③4.8	②6.2 ④口～底2/3	①灰黄褐色 ②還元焔、やや硬 ③白色粒子・砂粒を含む。	体部内外面ともロクロ調整。底部回転糸切り無調整。
3	須恵器 甕	南西 +42	①— ③—	②— ④胴部片	①暗黄色 ②還元焔、硬 ③砂粒を多く含む。	外面平行叩き、内面青海波文当て具。焼成時に小片が剥落。内面に自然釉付着。器厚6～10mm。
4	須恵器 甕	北東 +6	①— ③—	②— ④胴部片	①灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒・小石を含む。	外面格子叩き、内面無で。器厚9～14mm。
5	土師器 甕	南東	①(22.0) ③—	②— ④口縁部片	①にぶい褐色 ②酸化焔、硬 ③雲母・砂粒を含む。	口縁部横撫で。胴部外面荒削り、内面荒撫で。
6	土師器 甕	西 +1	①(22.4) ③—	②— ④口縁部片	①にぶい黄橙色 ②酸化焔、硬 ③砂粒・小石を多く含む。	口縁部横撫で。胴部外面荒削り、内面荒撫で。
7	土師器 甕	南東 +12	①18.2 ③(25.0)	②— ④底部欠損2/3	①にぶい褐色 ②酸化焔、やや硬 ③雲母・砂粒を含む。	口縁部横撫で。胴部外面荒削り、内面荒撫で。
8	土師器 甕	北西 +14	①— ③(20.4)	②3.8 ④1/2	①にぶい褐色 ②酸化焔、やや硬 ③雲母・砂粒を含む。	胴部外面荒削り、内面荒撫で。

の字に近くなっているが、他は「く」の字状の口縁となっている。須恵器の坏は32片と多く、供膳具はすべて須恵器であったものと思われる。瓶・甕類も少量ながら出土している。1・2の坏はいずれも付高台のものと思われるが、1は貼り付け部からきれいに取れている。

4号住居跡

位置　A47～49－I62～65Gr

重複　北壁カマド東側を2号炭焼窯跡およびピットに切られ、中央南側で47号土坑を切っている。

平面形態　トレンチによる削平のため南壁は検出できなかったが、東西に長い長方形になると思われる。

規模　東西8.40m　南北（4.20m）　　**壁高**　90cm　やや傾斜している。

面積　35.0㎡　　**主軸方位**　N－6°－W　　**壁溝**　なし

柱穴　床面に4基、掘り方にはさらに4基のピットがあるが、はっきりと柱穴と断定できるものはない。

№1、2ピットは、位置・深さからその可能性があるが、東側の対応するピットは検出されなかった。

貯蔵穴　中央東よりカマド右側に位置し、東西1.1m南北0.9mの楕円形を呈する。深さは20cmである。カマドに近接しすぎており、深さも余りないため、貯蔵穴にならない可能性もある。またカマド左脇にも浅い掘り込みがあるが、貯蔵穴とは考えられない。

床面　暗褐色土を貼床とし、ほぼ平坦である。南西部に炭化物及び焼土の広がりがある。

掘り方　全体的に南に向かって傾斜しており、中央部に楕円形の浅い掘り込みがある。

遺物出土状況　中央から西よりと、東側に多く土器が出土している。東壁及び西壁付近では、炭化材の出土が見られる。

カマド

位置　北壁中央やや東より　　**主軸方位**　N－5°－W　　**規模**　全長1.40m　幅1.06m

構築　焚き口から燃焼部にかけて、楕円形に床面を5cm程掘りくぼめている。袖は、黄褐色土で構築されていたと思われるが、袖石は検出されなかった。燃焼部は壁よりやや内側に位置し、掘り込み上には焼土が検出されている。煙道部は、壁より120cm外側で立ち上がっている。

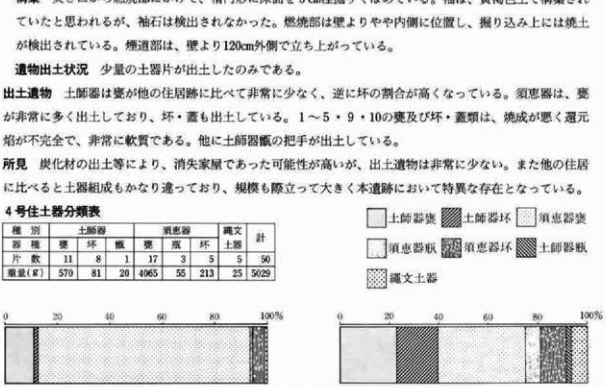
遺物出土状況　少量の土器片が出土したのみである。

出土遺物　土師器は甕が他の住居跡に比べて非常に少なく、逆に坏の割合が高くなっている。須恵器は、甕が非常に多く出土しており、坏・蓋も出土している。1～5・9・10の甕及び坏・蓋類は、焼成が悪く還元焔が不完全で、非常に軟質である。他に土師器甑の把手が出土している。

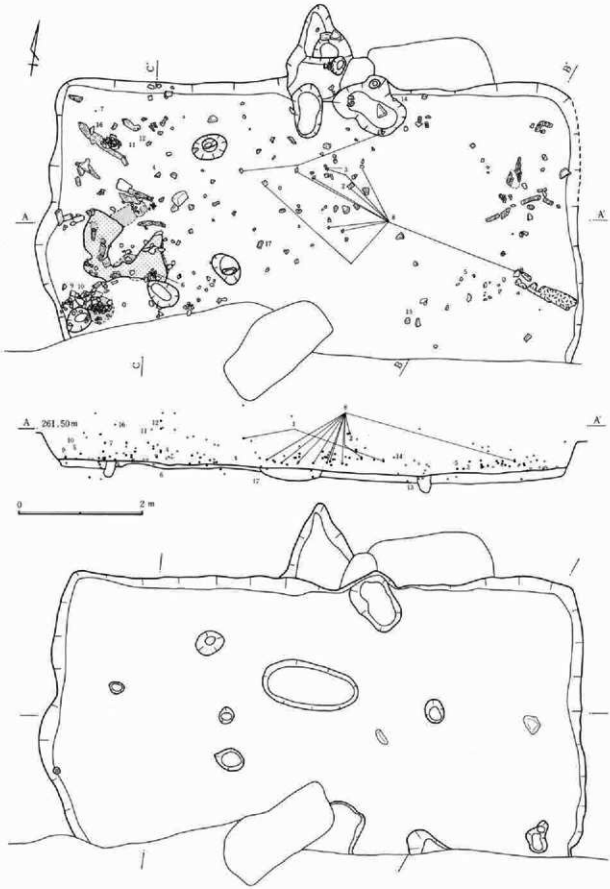
所見　炭化材の出土等により、消失家屋であった可能性が高いが、出土遺物は非常に少ない。また他の住居に比べると土器組成もかなり違っており、規模も際立って大きく本遺跡において特異な存在となっている。

4号住土器分類表

種別	土師器			須恵器			縄文土器	計
器種	甕	坏	甑	甕	瓶	坏		
片数	11	8	1	17	3	5	5	50
重量(g)	570	81	20	4065	55	213	25	5029

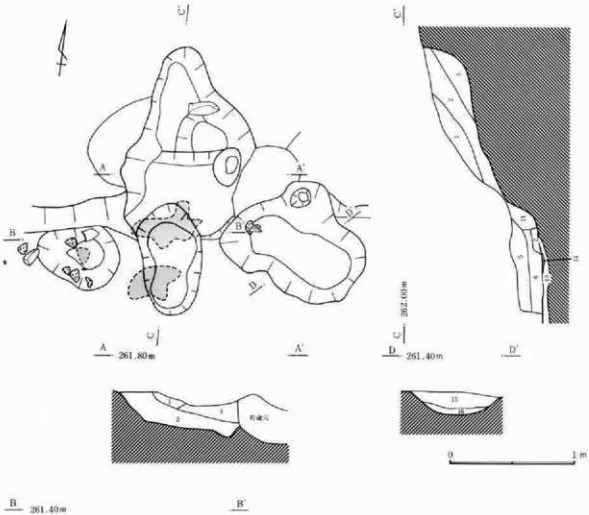


第19図　4号住居跡土器分類グラフ



1　暗褐色土　ロームブロック含む。
2　明褐色土　ロームブロック含む。
3　明褐色土　ロームブロック・炭化粒子を含む。
4　暗褐色土　ロームブロック・木炭片を多く含む。
5　暗褐色土　4層に似るが焼土粒子を多く含む。
6　暗黄褐色土　黒褐色土ブロックを含む。
7　暗褐色土　ロームブロック含む。
8　暗褐色土　ロームブロック・白色粒子を含む。

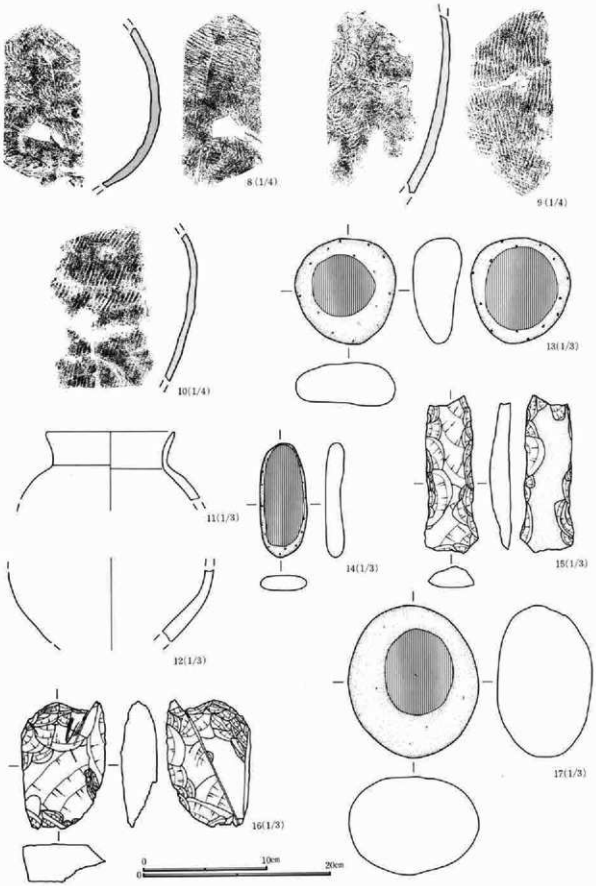
第20図　4号住居跡遺物出土状況



第21図　4号住居跡カマド

1　赤褐色土　焼土層。暗褐色土ブロック含む。　2　暗黄褐色土　暗褐色土ブロックを含む。　3　暗褐色土　ロームブロック含む。　4　暗褐色土　焼土粒子を含む。　5　明褐色土　焼土ブロックを多く含む。　6　暗褐色土　焼土ブロックを多く含む。　7　明褐色土　灰・焼土粒子・炭化粒子を含む。　8　暗黄褐色土　焼土粒子・炭化粒子を含む。　9　暗褐色土　ロームブロックを含む。　10　黄褐色土　焼土ブロックを含む。　11　黄褐色土　焼土ブロックを多く含む。　12　暗褐色土　ロームブロック・焼土粒子を含む。　13　黄褐色土　焼土粒子含む。　14　赤褐色土　焼土層　ロームブロックを含む。　15　暗褐色土　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む。　16　黄褐色土　暗褐色土ブロックを含む。

第22図　4号住居跡出土遺物(1)



第23図　4号住居跡出土遺物(2)

４号住居跡出土遺物観察表

図No	種別 器種	出土位置	量目 (cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	土師器 坏	中央部 +20	①(11.4) ②(7.4) ③ 3.3 ④1/4	①暗赤褐色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒・パミスを含む。	口縁部横撫で。体部～底部外面箆用り。内面撫で。
2	須恵器 坏(蓋？)	東 +10	①(20.2) ③一	②一 ①にぶい黄橙色 ②還元焔？やや軟 ③白色粒子・砂粒を含む。	体部内外面ともロクロ調整か。口縁部反り有。底部（天井部）調整不明。焼成悪くもろい。
3	須恵器 蓋	南東 +6	①一 ③一	②一 ④天井部 ①にぶい赤褐色 ②還元焔？やや軟 ③白色粒子・砂粒を含む。	内外面ともロクロ調整か。外面一部黒変。焼成悪くもろい。
4	須恵器 蓋	西 +10	①(11.1) ③一	②一 ④口～天井部1/5 ①褐色 ②還元焔？やや軟 ③白色粒子を含む。	内外面ともロクロ調整か。口縁部反り有。焼成悪くもろい。
5	須恵器 蓋	南東 +6	①一 ③一	②一 ④天井部 ①褐色 ②還元焔？やや軟 ③白色粒子・パミスを含む。	内外面ともロクロ調整か。焼成悪くもろい。
6	土師器 甑	南西 +8	①一 ③(3.6)	②一 ④把手 ①にぶい黄橙色 ②酸化焔？やや軟 ③白色粒子・砂粒・パミスを含む。	外面は煤付着のため黒変。貼り付け面から剥がれる。
7	須恵器 蓋	北西 +42	①一 ③(1.1)	②一 ④鈕 ①にぶい黄橙色 ②還元焔？やや軟 ③白色粒子を含む。	宝珠状。外面は黒変。貼り付け面から剥がれる。
8	須恵器 甕	中央部 +10	①一 ③一	②一 ④1/5 ①灰白色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面格子叩き、内面青海波文当て具。外面一部黒変。断面は灰褐色を呈す。器厚6～10mm。
9	須恵器？ 甕	南西 +6	①一 ③一	②一 ④胴部破片 ①黄褐色 ②還元焔？やや軟 ③白色粒子・砂粒を含む。	外面平行叩き、内面青海波文当て具。焼成悪くもろい。
10	須恵器？ 甕	南西 +6	①一 ③一	②一 ④胴部破片 ①灰黄褐色 ②還元焔？やや軟 ③白色粒子を含む。	外面平行叩き、内面撫で。外面一部黒変。焼成悪くもろい。
11	土師器？ 甕	南西 +4	①(13.6) ③一	②一 ④口縁部1/3 ①褐色 ②酸化焔？やや軟 ③白色粒子・パミスを含む。	口縁部横撫で。胴部内外面撫で。焼成悪くもろい。
12	土師器？ 甕	南西 +4	①一 ③一	②一 ④胴部破片 ①灰黄褐色 ②酸化焔？やや軟 ③白色粒子・パミスを含む。	内外面とも撫で。11と同一個体の可能性あり。

図No	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
13	磨石	南 −10	8.3	8.0	3.8	318	完形	流紋岩	両面に摩耗痕が認められる。
14	磨石	北 +28	9.0	3.2	1.5	70	完形	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
15	打製石斧	遺構外	12.5	4.3	1.7	92	基部欠損	熱変成岩	片面に大きく自然面を残す。
16	不明	北西+78	10.0	6.7	2.9	230	製作途中	熱変成岩	擦り切り途中の石器、片面に研磨面を残す。
17	磨石	中央+2	12.0	10.3	7.7	1300	完形	石英斑岩	片面に摩耗痕が認められる。

５号住居跡

位置　Ａ50～52－Ｉ67～69Gr　**重複**　１号炭焼窯跡、３号住居跡に切られ、６号住居跡を切っている。

平面形態　東西に長い長方形（南壁西側がやや膨らむが、６号住の覆土を掘り下げた可能性が高い。）

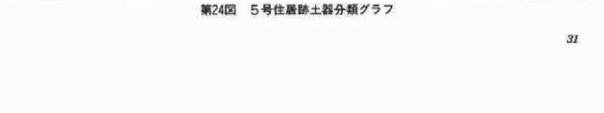
規模　東西4.70m　南北4.00m　**壁高**　56cm　ほぼ垂直である。　**面積**　16.0㎡

主軸方位　Ｎ－86°－Ｅ　**壁溝**　なし　**柱穴**　なし　**貯蔵穴**　なし

掘り方　平坦な掘り方であるが、南西部に土坑状の掘り込みが２ヶ所ある。

５号住居跡土器分類表

種別	土師器		須恵器			灰釉	縄文	計
器種	甕	坏	甕	瓶	坏	陶器	土器	
片数	111	19	11	0	8	0	1	150
重量(g)	2975	225	270	0	190	0	10	3660



第24図　５号住居跡土器分類グラフ

遺物出土状況　中央部に土器が集中しており、また南西部からこも編石が出土している。

カマド

位置　北壁中央部

主軸方位

N－4°－W

規模

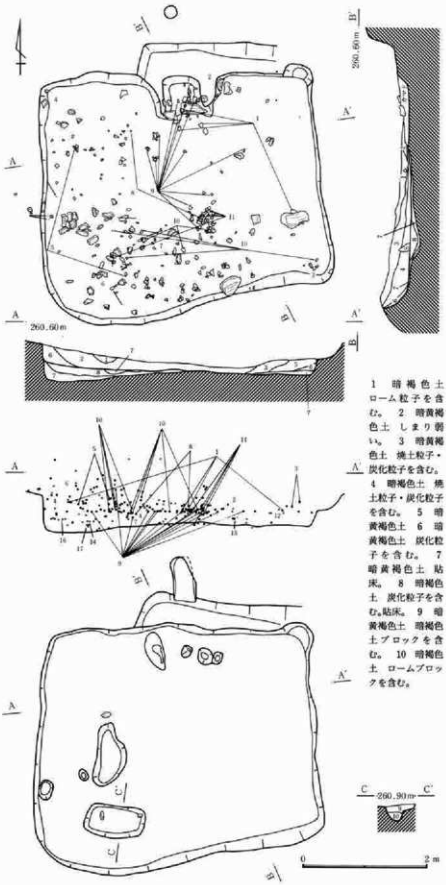
全長1.79m幅1.20m

構築　袖は砂岩を袖石として暗褐色土で構築されている。天井部も砂岩が使われており、前面に割れた状態で出土している。燃焼部は壁の内側に位置し、焚き口はほぼ平坦であるが火床面は床面よりやや低くなっている。

煙道部は、一部3号住に壊されているが、北側では天井部が残っており、煙出し部も検出された。

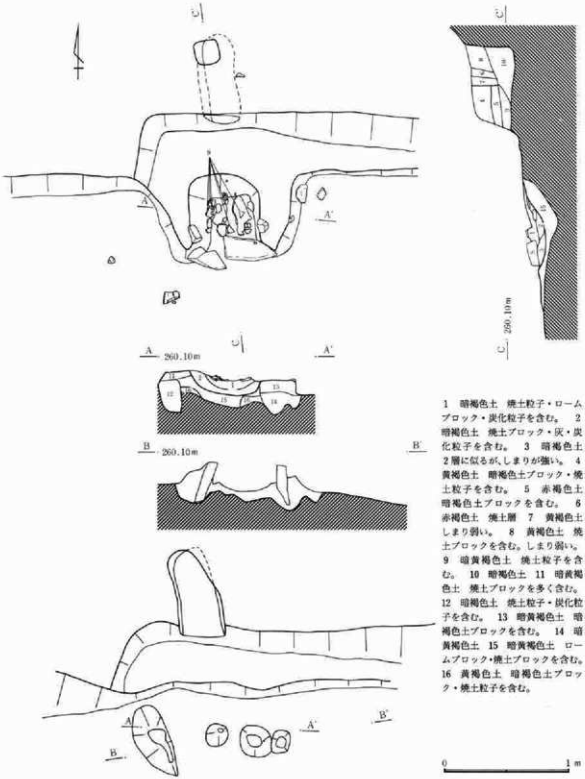
遺物出土状況　燃焼部に比較的多くの土器が見られる。

出土遺物　土師器は、甕が111片と多く、坏も19片と他の住居跡に比べ多くなっている。逆に須恵器は、甕が11片、坏が8片と少なく、供膳具の主流は、土師器がしめている。



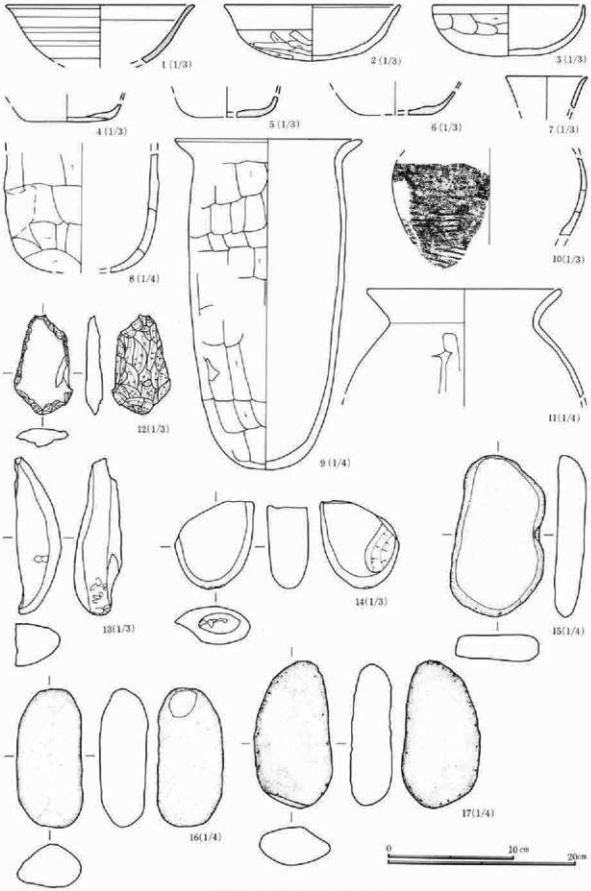
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。　2　暗黄褐色土　しまり弱い。　3　暗黄褐色土　焼土粒子・炭化粒子を含む。　4　暗褐色土　焼土粒子・炭化粒子を含む。　5　暗黄褐色土　6　暗黄褐色土　炭化粒子を含む。　7　暗黄褐色土　貼床。　8　暗褐色土　炭化粒子を含む。貼床。　9　暗黄褐色土　暗褐色土ブロックを含む。　10　暗褐色土　ロームブロックを含む。

第25図　5号住居跡

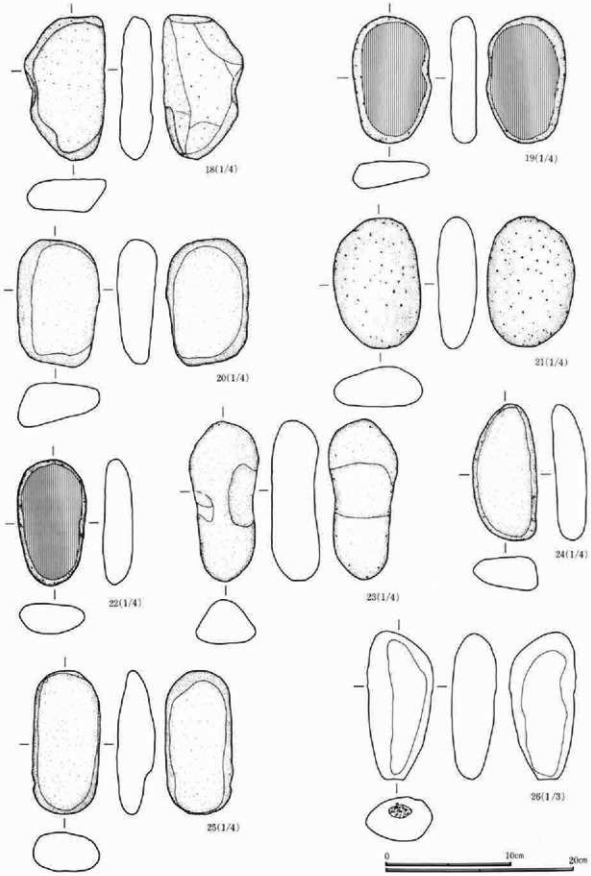


1　暗褐色土　焼土粒子・ロームブロック・炭化粒子を含む。　2　暗褐色土　焼土ブロック・灰・炭化粒子を含む。　3　暗褐色土　2層に似るが、しまりが強い。　4　黄褐色土　暗褐色土ブロック・焼土粒子を含む。　5　赤褐色土　暗褐色土ブロックを含む。　6　赤褐色土　焼土層　7　黄褐色土　しまり弱い。　8　黄褐色土　焼土ブロックを含む。しまり弱い。　9　暗黄褐色土　焼土粒子を含む。　10　暗褐色土　11　暗黄褐色土　焼土ブロックを多く含む。　12　暗褐色土　焼土粒子・炭化粒子を含む。　13　暗黄褐色土　暗褐色土ブロックを含む。　14　暗黄褐色土　15　暗黄褐色土　ロームブロック・焼土ブロックを含む。　16　黄褐色土　暗褐色土ブロック・焼土粒子を含む。

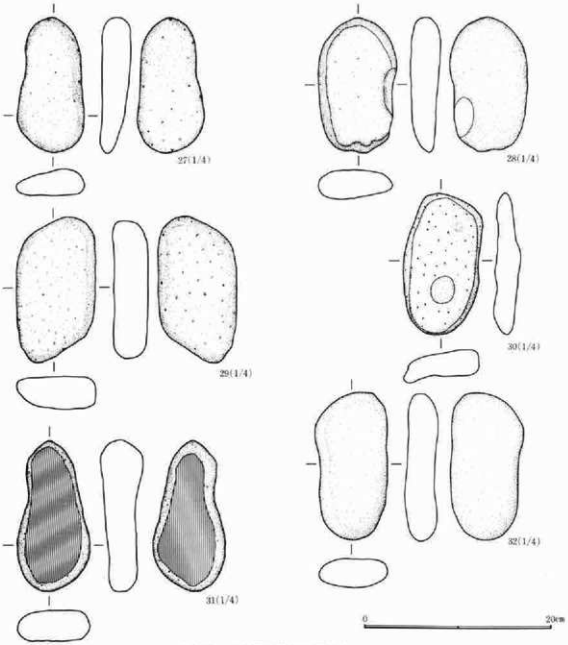
第26図　5号住居跡カマド



第27図　5号住居跡出土遺物(1)



第28図　５号住居跡出土遺物(2)



第29図　5号住居跡出土遺物(3)

5号住居跡出土遺物観察表

図No.	種別 器種	出土位置	量目 (cm)	①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	須恵器 坏	カマド前 +15	①15.0 ③—	②— ④1/3	①浅黄色 ②還元焔、やや軟 ③砂粒を含む。	内外面ともロクロ整形。
2	土師器 坏	北西 +45	①14.0 ③ 4.5	②7.0 ④1/2	①にぶい褐色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部外面撫で。底部外面箆削り。 内面撫で。
3	土師器 坏	南東 +29	①12.0 ③ 4.0	②6.2 ④1/4	①橙色 ②酸化焔、やや軟 ③白色粒子・砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部～底部外面調整不明。内面 撫で。
4	須恵器 ?	北西 +55	①— ③—	②(6.5) ④底部1/3	①灰黄色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	底部外面調整不明、自然釉付着。 内面撫でか。
5	須恵器 ?	カマド右脇 +25	①— ③—	②— ④底部1/3	①暗灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	底部外面調整不明、自然釉付着。 内面撫でか。
6	須恵器 ?	南西 +45	①— ③—	②— ④底部1/3	①赤灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	体部～底部外面調整不明、自然釉付着。 内面撫でか。

図No.	種別 器種	出土位置	量目 (cm)	①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②軟成 ③胎土	成形・調整の特徴
7	須恵器 ?	北西 +19	① (6.4) ③—	②— ④口縁部1/5	①暗灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	口縁部～体部調整不明、自然釉付着。 内面撫でか。
8	土師器 甕	北西 +17	①— ③(12.4)	②— ④胴部1/3	①にぶい褐色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を多量に含む。	胴部外面荒削り、内面荒撫で。
9	土師器 甕	カマド内 +14	①(19.6) ③34.9	②25.0 ④1/3	①にぶい黄橙色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。胴部外面荒削り、内面荒撫で。
10	須恵器 甕	南西 +14	①— ③(8.0)	②— ④胴部	①灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を多量に含む。	胴部外面平行叩き、内面撫で。
11	土師器 甕	南東 +15	①(20.4) ③(11.1)	②— ④口縁部1/5	①にぶい黄橙色 ②酸化焔、やや硬 ③大粒の砂粒を多量に含む。	口縁部横撫で。胴部外面荒削り、内面荒撫で。

図No.	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
12	打製石斧	南西+24	7.9	4.6	1.4	55	完形	熱変成岩	撥形。片面に大きく自然面を残す。
13	敲打石	南西+14	(12.5)	(3.9)	(3.4)	125	半部欠損	熱変成岩	端部に敲打痕有り。
14	敲打石	南西+16	(6.9)	(6.3)	(3.2)	130	上半部欠	熱変成岩	端部に敲打痕有り。
15	こも編石	北東+5	17.0	10.0	3.1	900	完形	安山岩	側面片側にくびれ有り。
16	こも編石	南東+20	14.6	7.1	5.1	755	完形	安山岩	側面ややくびれ擦痕有り。
17	こも編石	南西+17	15.6	8.1	4.4	720	完形	安山岩	側面ややくびれる。
18	こも編石	南西+10	15.2	8.6	3.6	700	完形	安山岩	側面片側にくびれ有り。
19	磨石	南西+15	13.4	8.4	2.8	531	完形	石英安山岩	両面に摩耗痕有り、磨石をこも編石に転用か。
20	こも編石	南西+16	13.4	8.7	4.6	730	完形	石英安山岩	側面片側にくびれ有り。
21	こも編石	南西+18	13.8	9.2	4.2	789	完形	安山岩	側面に微かに擦痕有り。
22	磨石	南西+8	13.3	7.3	3.2	490	完形	安山岩	片面に摩耗痕有り。磨石をこも編石に転用か。
23	こも編石	南西+16	16.9	7.2	5.0	800	完形	石英安山岩	中央部が全面くびれ、側面には擦痕有り。
24	こも編石	南西+2	14.4	6.8	3.6	625	完形	安山岩	側面片側に擦痕有り。
25	こも編石	南西+19	15.1	7.2	4.1	704	完形	輝緑岩	側面両側に摩耗痕有り。
26	敲石	南西+4	15.7	6.9	4.6	615	完形	凝灰岩	端部に敲打痕有り。敲打石の転用か。
27	こも編石	南西+16	14.3	7.1	3.0	400	完形	流紋岩	側面片側にくびれ、片側に摩耗痕有り。
28	こも編石	南西+19	14.2	8.3	3.2	800	一部欠損	流紋岩	側面片側にくびれ、擦痕有り。
29	こも編石	南西+2	15.4	8.3	3.6	730	完形	流紋岩	側面片側に摩耗痕有り。
30	くぼみ石?	北西+27	15.0	8.4	3.5	510	完形	石英安山岩	浅い孔が有り、くぼみ石をこも編石に転用か。
31	こも編石	南西+19	15.9	7.2	4.6	645	完形	流紋岩	側面片側にくびれ、片側に摩耗痕有り。
32	こも編石	南西+21	15.6	7.7	3.4	575	完形	輝緑岩	側面両側にくびれ有り。

１号炭焼窯跡

位置　Ａ49～51－Ｉ68・69Gr　**重複**　北壁を耕作溝に切られ、３・５・６号住居跡を切っている。

平面形態　隅丸長方形　**規模**　東西1.6m　南北4.0m　**主軸方位**　Ｎ－28°－Ｗ　**深さ**　50cm

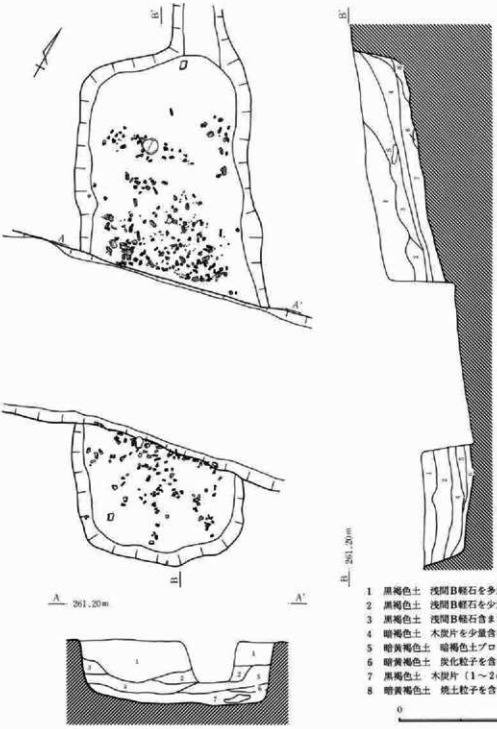
概要　中央部を東西トレンチにより壊されているが、底面はほぼ平坦で、北に向かって約10°の角度で緩やかに立ち上がっている。底面の南北のレベル差は50cmである。北壁は約70°で立ち上がっており、壁面はよく焼けている。東西の壁は比較的垂直に近い。上部を削平されているため、焚き口、煙道等は検出されなかった。

遺物出土状況　全面に炭化材の破片が出土している他、土器片、自然石等が数点出土している。

所見　耕作等により上部を削平されているため、天井部は残っていないが、南に焚き口、北に煙道があったものと思われる。覆土には、浅間Ｂ軽石を含む黒褐色土が２号炭焼窯跡や１号住居跡と同様に含まれるため、ほぼ同時期のものと思われる。

２号炭焼窯跡

位置　Ａ47～49－Ｉ62・63Gr　**重複**　４号住居跡を切っている。　**平面形態**　長方形



第30図　1号炭焼窯跡

規模　東西2.0m　南北4.2m　　**主軸方位**　N－13°－W　　**深さ**　74cm

概要　4号住居跡と重複しているため、南東部の壁はほとんど削平してしまい検出できなかった。底面は北に向かい約5°で緩やかに立ち上がり、北壁は約50°で立ち上がっている。底面のレベル差は30cmである。炭化材はほとんど検出されていないが、南側に炭化物を多量に含む土と焼土が検出されている。

所見　大きな炭化材は出土していないが、覆土には多量に炭化物及び焼土を含んでおり、形状も1・3号炭

焼窯跡と同様であるため、炭焼窯跡であることはまちがいないであろう。天井部は残っていなく覆土もかなり削平してしまっているが、上層には1号炭焼窯跡同様浅間B軽石を含む黒褐色土があったため、1号住居跡、1号炭焼窯跡とほぼ同時期のものであると思われる。

3号炭焼窯跡

位置　A43・44－I59Gr

重複　耕作溝に南側を切られている。

平面形態　（長方形）

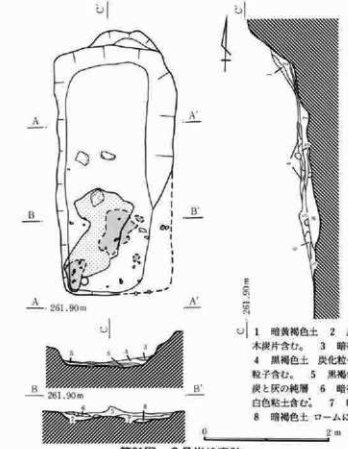
規模　東西1.74m　南北（2.24）m

主軸方位　N－S　　**深さ**　26cm

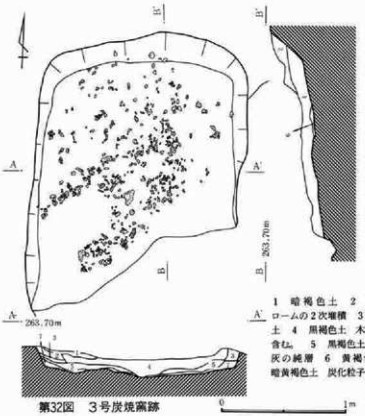
概要　底面はほぼ平坦で北に向かって約10°で上がっており、北壁は約45°で立ち上がっている。底面のレベル差は残存部だけで15cmである。南側を耕作溝に切られ、上部も削平されており、天井部、焚き口、煙道部等は検出されなかった。

遺物出土状況　炭化材の破片が全面から出土し、土器片、石器片が数点出土している。

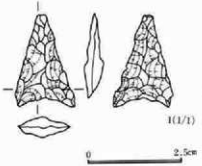
所見　削平により北半部しか残っていないが、形状を見ると1号炭焼窯跡とほぼ同様になると思われる。覆土に浅間B軽石を含まないため、1・2号炭焼窯跡とは時期がずれる可能性がある。



第31図　2号炭焼窯跡



第32図　3号炭焼窯跡



第33図　3号炭焼窯跡出土遺物

2号炭焼窯跡出土遺物観察表

図№	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
1	石錘		2.5	1.5	0.5	1.2	先端部欠	黒曜石	凹基無茎。

第3節　縄文時代

6号住居跡

位置　A51・52－Ⅰ68・69Gr　**重複**　3・5号住居跡に切られる。　**平面形態**　南北に長い長方形

規模　東西2.96m　南北3.26m　**壁高**　88cm　立ち上がりはほぼ垂直である。　**面積**　8.5m²

主軸方位　N－2°－W　**壁溝**　なし　**柱穴**　なし　**貯蔵穴**　なし

床面　暗黄褐色土で貼床とし、中央から北側の炉周辺が強く踏み固められている。

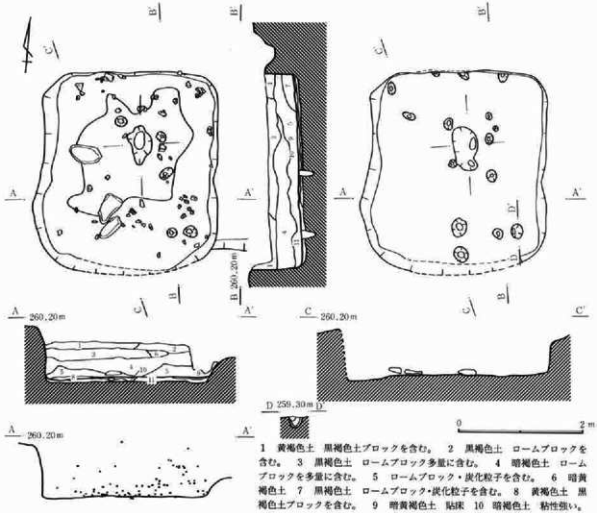
掘り方　平坦な掘り方であるが、ピットが15基掘られている。

遺物出土状況　量は少ないが、中央北よりに多く出土している。

炉

位置　中央北より　**主軸方位**　N－4°－W　**平面形態**　不正楕円形　**規模**　東西38cm　南北61cm

深さ　15cm　**備考**　覆土に少量焼土を含む程度で、はっきりした火床面は検出されなかった。



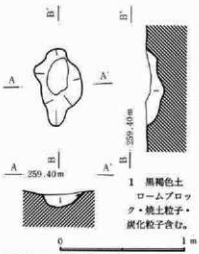
1　黄褐色土　黒褐色土ブロックを含む。　2　黒褐色土　ロームブロックを含む。　3　黒褐色土　ロームブロック多量に含む。　4　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。　5　ロームブロック・炭化粒子を含む。　6　暗黄褐色土　7　黒褐色土　ロームブロック・炭化粒子を含む。　8　黄褐色土　黒褐色土ブロックを含む。　9　暗黄褐色土　貼床　10　暗褐色土　粘性強い。　貼床　11　暗褐色土　しまり弱い。

第34図　6号住居跡

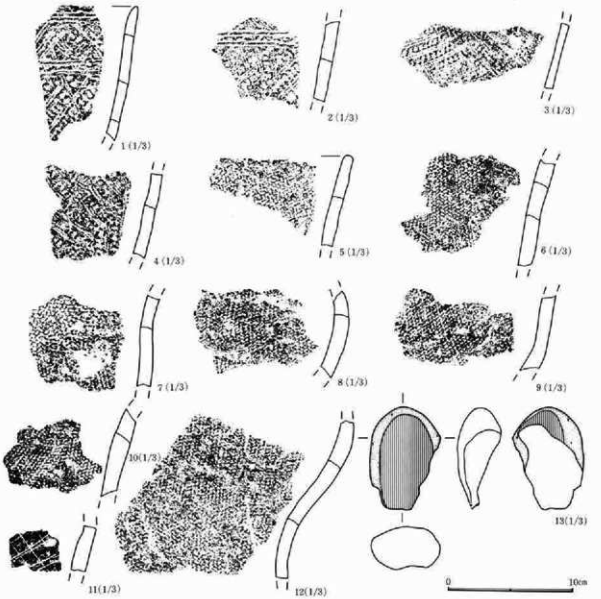
出土遺物　遺物量は少なく、土器片が24点、石器は磨石が2点、くぼみ石・砥石・石皿が各1点、剝片その他が28点、計33点出土している。

使用石材　石器使用石材としては、熱変成岩が14点で最も多く、砂岩が8点、硬砂岩が1点、安山岩が6点、黒曜石・流紋岩・粘板岩・点紋緑泥片岩が各1点となっている。他の縄文の住居跡も同様であるが、結晶片岩系の石が少ないのが特徴である。

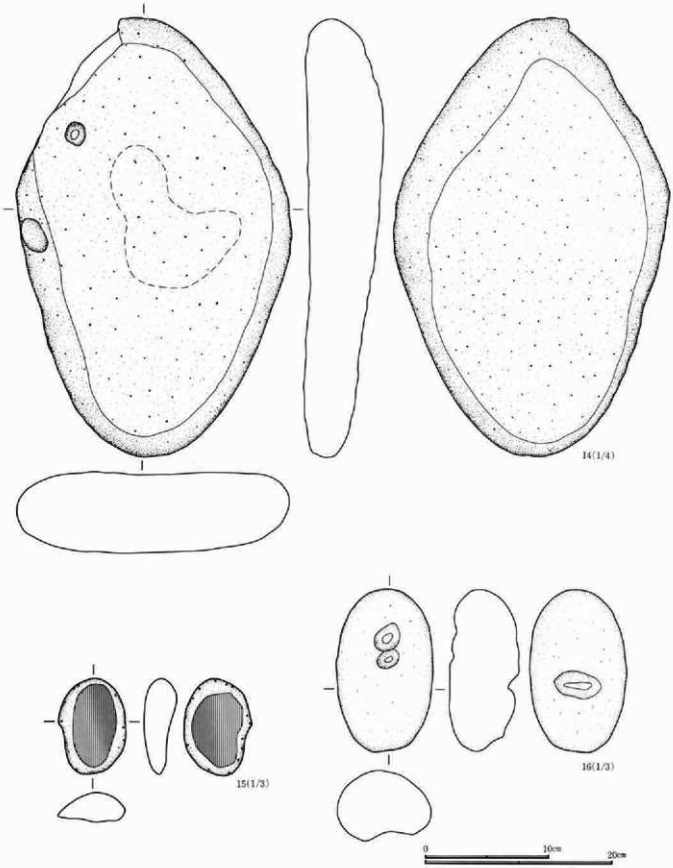
所見　出土遺物より縄文前期関山期の住居跡と思われるが、1軒のみ単独で検出された。5号住居跡に切られているが、遺構の残りは比較的良く、壁高も88cmある。



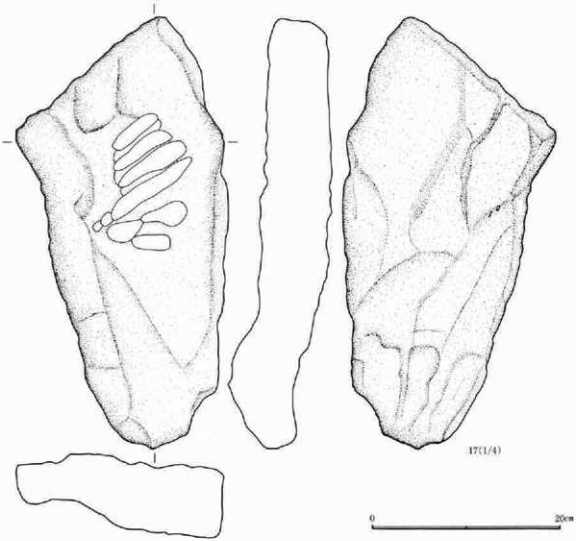
第35図　6号住居跡炉



第36図　6号住居跡出土遺物(1)



第37図　6号住居跡出土遺物(2)



第38図　6号住居跡出土遺物(3)

6号住居跡出土遺物観察表

図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	口縁部片	北東 +15	①内面・黄褐色　外面・褐色 ②良　③繊維・細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。	口唇部と胴部に半截竹管による2条の平行沈線を巡らせ、区画内に平行沈線による菱形の文様を描く。 胴部は直前段合撚L $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right\}$ $\left\{\begin{matrix}RRL\\L\end{matrix}\right\}$。
2	胴部片	北西 +15	①内外面は褐色 ②良　③繊維・細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚9～10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。	頸部に半截竹管による平行沈線を2本巡らす。 胴部には直前段合撚L $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right\}$ $\left\{\begin{matrix}RRL\\L\end{matrix}\right\}$。
3	胴部片	北西 +14	①内面・褐色　外面・明赤褐色 ②良　③繊維・細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～7mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。	直前段合撚L $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right\}$ $\left\{\begin{matrix}RRL\\L\end{matrix}\right\}$ と直前段合撚R $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right\}$ $\left\{\begin{matrix}RRL\\L\end{matrix}\right\}$ で菱形の文様の構成。 内面に煤が付着している。
4	胴部片	北西 +9	①内面・褐色　外面・明褐色 ②良　③繊維・細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚9～10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。	直前段合撚L $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right\}$ $\left\{\begin{matrix}RRL\\L\end{matrix}\right\}$。
5	口縁部片	北西 +48	①内面・橙色　外面・明黄褐色 ②良　③繊維・細粒の砂を混入	深鉢形土器の波状口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。	組紐。
6	胴部片	北東 +28	①内面・橙色　外面・明黄褐色 ②良　③繊維・細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚10～12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。	組紐。

図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
7	頸部片	北東 +34	①内面・褐色 外面・明褐色 ②やや良 ③繊維・細粒の砂を混入	変形土器の頸部片。器厚10～11mm。内面は横方向の粗い調整が行われている。	組紐。 縄文無文。胴体はR｛｝L。
8	胴部片	北東 +25	①内外面はにぶい橙色 ②良 ③繊維・細粒の砂を混入	変形土器の胴部片。器厚10～12mm。内面は縦方向の調整が行われている。	組紐。 内面に繊維痕が認められる。
9	胴部片	北東 +16	①内面・黄橙色 外面・褐色 ②良 ③繊維・細粒の砂を混入	変形土器の胴部片。器厚10～12mm。内面は横方向の調整が行われている。	組紐。
10	胴部片	北東 +20	①内面・橙色 外面・明褐色 ②良 ③繊維・細粒の砂を混入	鉢形土器の胴部片。器厚11～14mm。内面は横方向の調整が行われている。	組紐。 内面に繊維痕が認められる。
11	胴部片	北西 +2	①内面・黄橙色 外面・にぶい黄褐色 ②良 ③繊維・細粒の砂を混入	鉢形土器の胴部片。器厚9～12mm。内面は横方向の調整が行われている。	格子目状の沈線が施されている。
12	口縁～頸部片	北西 +4	①内面・橙色 外面・褐色 ②良 ③繊維・細粒の砂を混入	変形土器の口縁部片。器厚9～13mm。内面は荒れている。	組紐。 外面に煤が付着している。

図No.	器種	出土位置	量 全長	量 幅	量 厚さ	量 重量	残存状況	石材	特徴
13	磨石	北西＋9	(18.1)	(5.7)	(3.5)	145	下半部欠	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
14	石皿	北西＋3	46.4	29.8	8.7	16400	一部欠損	安山岩	磨面に赤色顔料付着。
15	磨石	南西＋5	7.6	5.4	2.5	135	完形	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
16	くぼみ石	南西＋4	12.9	7.7	5.7	710	完形	安山岩	両面で3孔有り。
17	砥石	南西＋5	45.3	22.6	11.1	7700	完形	砂岩	片面に4条の研ぎ溝がある。

2号住居跡

位置

A46～48－I 92・93Gr

重複　7号住居跡を切っている。

平面形態　楕円形

規模　東西3.28m
南北3.80m

主軸方位　N－13°－E

壁高　50cm
やや傾斜している。

面積　10.0m²

壁溝　なし

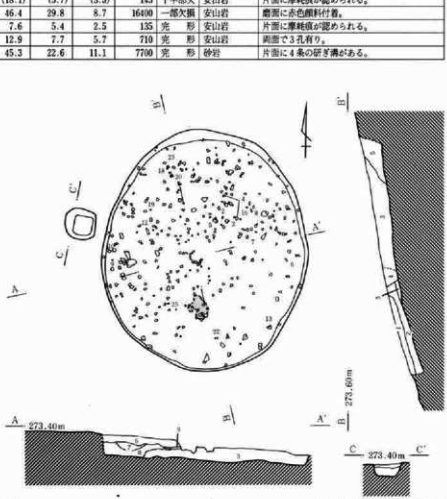
柱穴　なし

貯蔵穴　なし

床面　炉体土器の出土した面を床面としたが、覆土との区別がつきにくく確実にはとらえられなかった。

掘り方　不明

遺物出土状況　縄文土器の破片および石器・剥片等が全面から出土している。



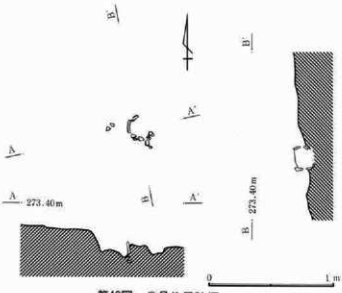
1　明褐色土　褐色パミスを含む。　2　明褐色土　褐色パミスを含む。しまり弱い。　3　明褐色土　4　明褐色土褐色パミス・炭化粒子を含む。　5　黄褐色土　褐色パミスを含む。　6　明褐色土　炭化粒子を含む。　7　明褐色土　8　暗褐色土　炭化粒子を含む。　9　暗褐色土　炭化粒子を多く含む。

第39図　2号住居跡

炉　住居中央部から炉体土器と思われる深鉢が出土したが、焼土・灰等は検出されなかった。

出土遺物　縄文土器片が252点、石器は、打製石斧、磨製石斧が各1点、スクレイパーが2点、石匙が1点、石鏃が3点、磨石が4点、くぼみ石が3点、丸石が1点、その他剝片等が84点、計100点出土している。

使用石材　石器使用石材としては、熱変成岩が最も多く43点、砂岩が14点、硬砂岩が2点、黒曜石が10点、安山岩が9点、輝緑岩・石英斑岩が各2点、閃緑岩・石英閃緑岩・蛇紋岩・珪石・点紋緑泥片岩が各1点、不明が13点である。



第40図　2号住居跡炉

7号住居跡

位置

A 46～48－Ⅰ91～93 Gr

重複　2号住に切られる。

平面形態　不正形（北部は方形で南部は円形）

規模　東西4.20m
　　南北4.10m

主軸方位　N－56°－E

壁高　64cm　やや傾斜しているが垂直に近い。

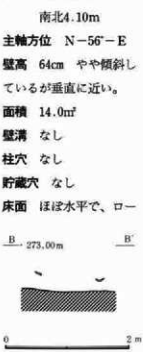
面積　14.0㎡

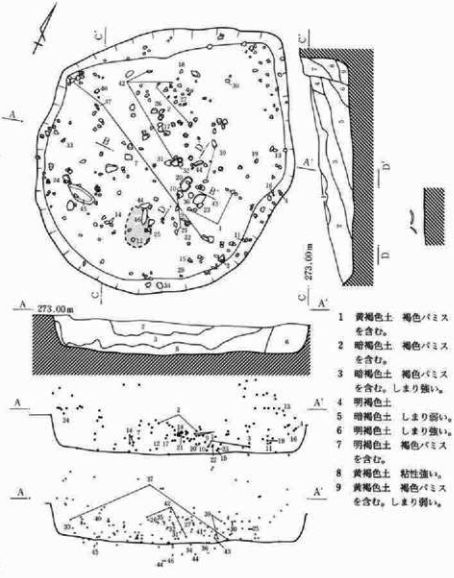
壁溝　なし

柱穴　なし

貯蔵穴　なし

床面　ほぼ水平で、ロー





第41図　7号住居跡

ムを床面としているが、全体的に軟弱である。

掘り方　床面を直接掘り方としている。

遺物出土状況　土器片および石器・剝片等が全面から出土している。

炉　検出されなかった。

出土遺物　縄文土器片が177点、石器は、打製石斧が1点、スクレイパーが3点、石鏃が2点、磨石が6点、くぼみ石が4点、敲打石が1点、多孔石が2点、石皿が1点、台石が1点、その他剝片等が124点、計145点出土している。

使用石材　石器使用石材としては、熱変成岩が62点、砂岩が24点、硬砂岩が1点、黒曜石が17点、安山岩が14点、流紋岩が4点、輝緑岩・珪石が各2点、閃緑岩・チャート・頁岩・石英斑岩・絹雲母石墨片岩が各1点、不明が14点である。

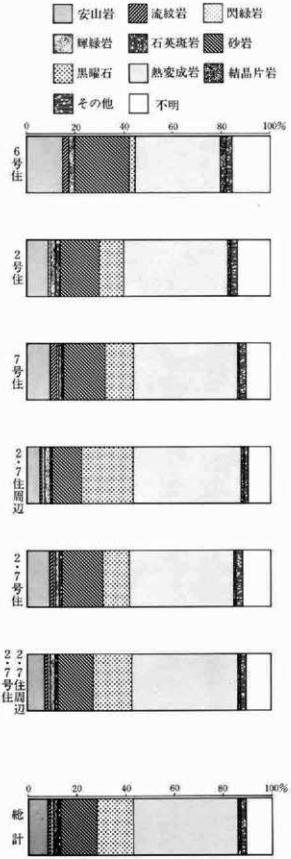
2・7号住居跡周辺

2・7号住居跡の周辺は、当然遺構外ではあるが、多くの土器、石器類の散布が認められた。

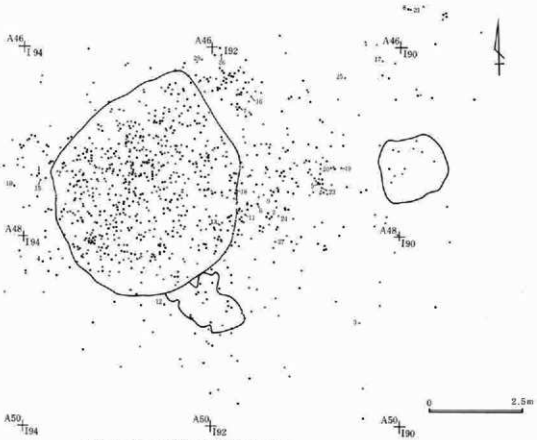
出土遺物　縄文土器が148点、石器は、打製石斧が3点、スクレイパーが2点、石匙が1点、石鏃が1点、くぼみ石が1点、台石が1点、その他剝片等が232点、計241点出土している。

使用石材　石器使用石材は、熱変成岩が107点、黒曜石が51点、砂岩が27点、硬砂岩が2点、安山岩が13点、輝緑岩が6点、閃緑岩が3点、流紋岩・石英斑岩・絹雲母石墨片岩が各2点、石英安山岩・花崗斑岩・玢岩・石英粗面岩・緑泥片岩が各1点、不明が21点である。

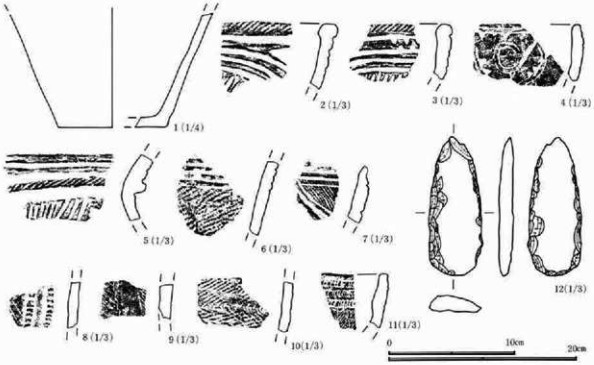
所見　2・7号住居跡は、上層から炉体土器と思われる深鉢が出土したため、その面を床とする1軒の住居が存在しさらにその下のローム面を床とするもう1軒の古い住居があるとしたが、壁・床ともはっきり確認できず、柱穴も検出されなかったため、7号住居跡1軒だけであった可能性もある。また7号住居跡も、床面・壁等は比較的はっきりしていたが、炉・柱穴は検出されなかったため、住居跡かどうか疑問が残る。



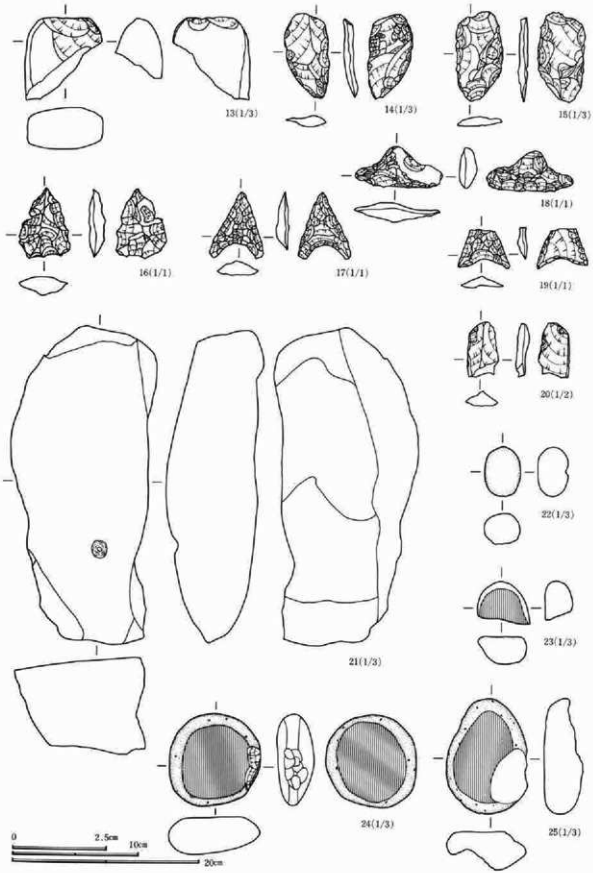
第42図　縄文住居跡出土石器石材分類グラフ



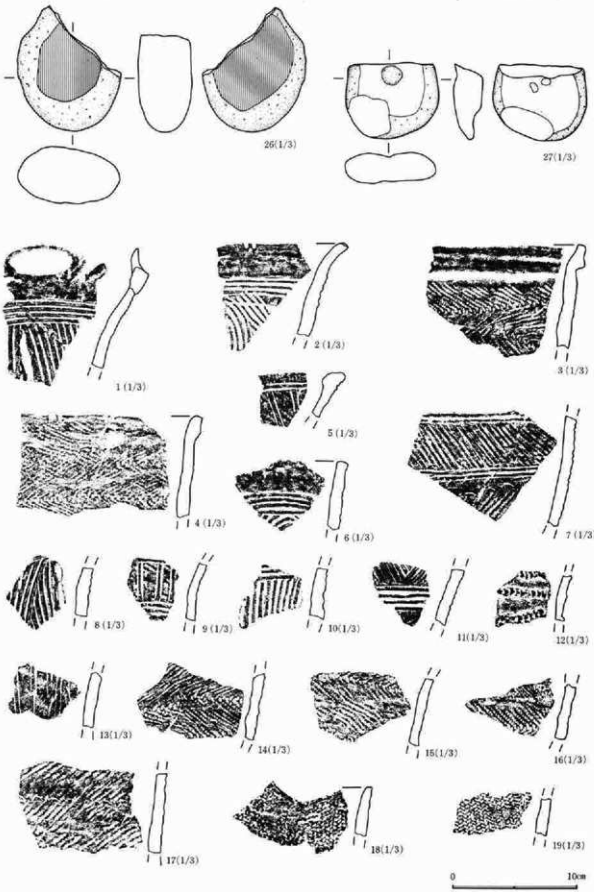
第43図　2・7号住周辺遺物出土状況



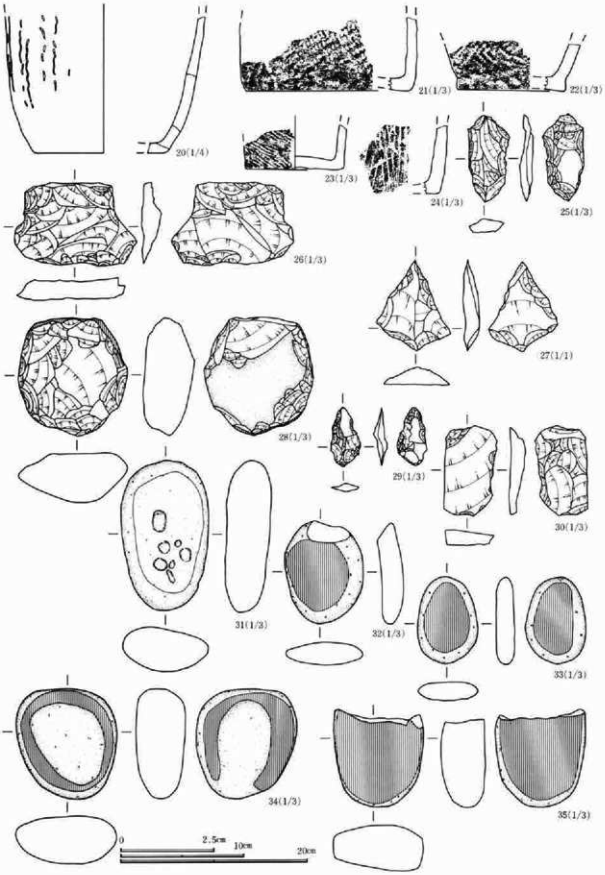
第44図　2号住居跡出土遺物(1)



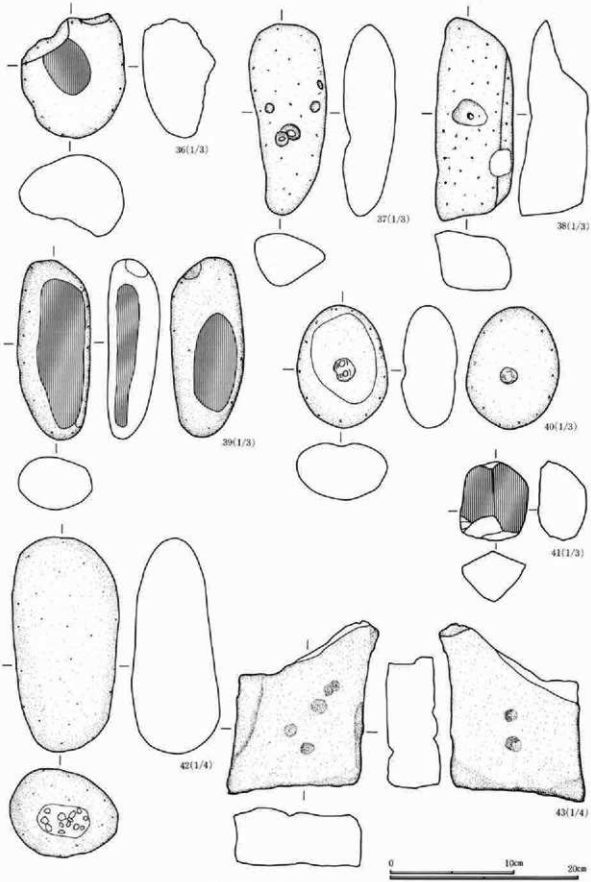
第45図　２号住居跡出土遺物(2)



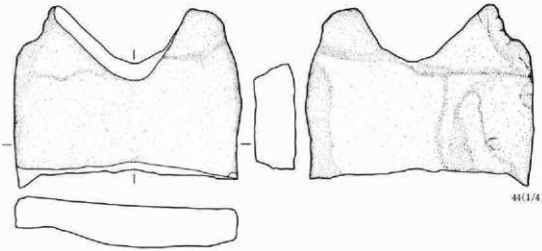
第46図　2号住出土遺物(3)・7号住出土遺物(1)

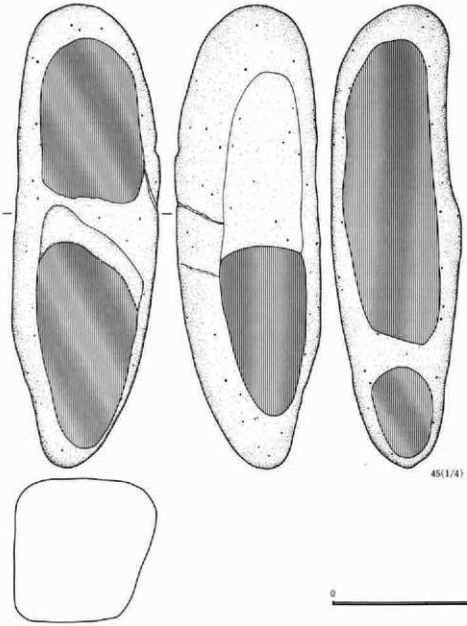


第47図　7号住居跡出土遺物(2)

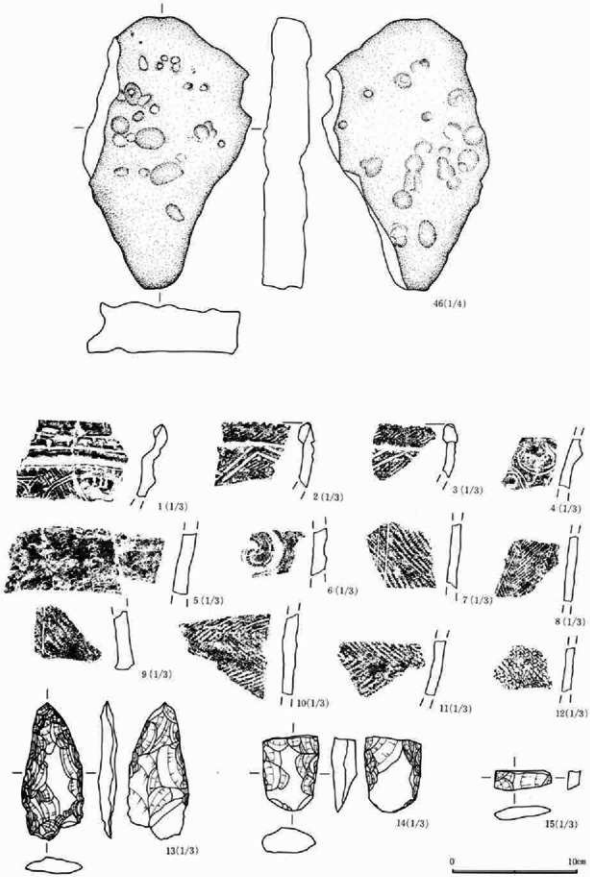


第48図　7号住跡出土遺物(3)

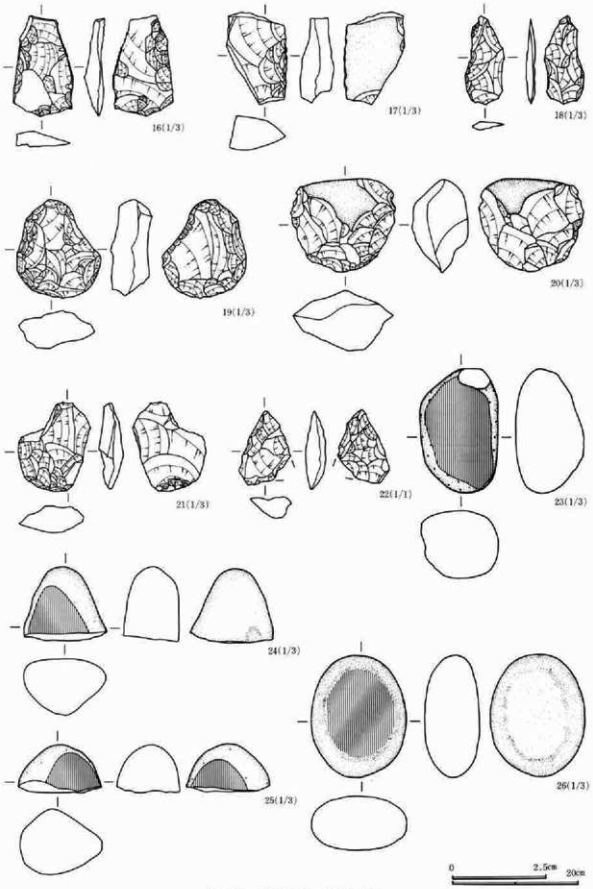




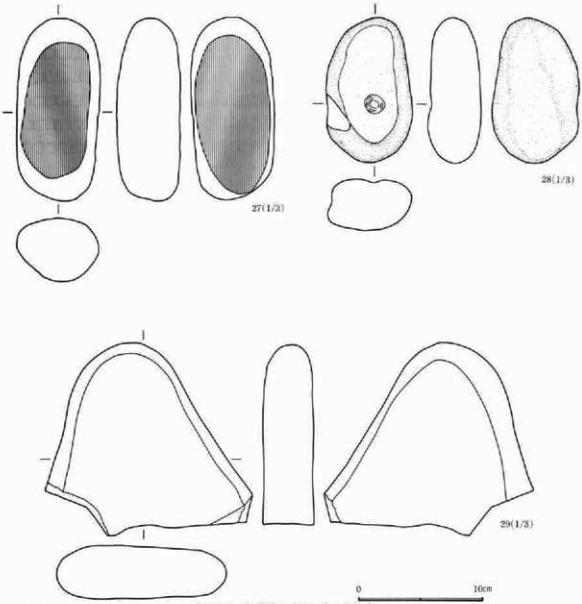
第49図　7号住居跡出土遺物(4)



第50図　7号住居跡出土遺物(5)・2号住周辺出土遺物(1)



第51図　2号住周辺出土遺物(2)



第52図　２号住居周辺出土遺物(3)

２号住居跡出土遺物観察表

図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	底部	中央部 +26	①内外面は明褐色 ②やや良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の底部片。底径11.5cm。内面は横方向の粗い調整が行われている。	炉体土器。胴部を意図的欠損、外面は荒れ、内面に煤が付着している。
2	口縁部片	北東 +９	①内面・にぶい橙色 外面・にぶい褐色 ②良 ③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の口縁部片。裏面に段を形成。器厚８～14mm。内面は丁寧な調整。	口唇部にＬ（$\frac{R}{R}$）。以下、沈線による文様と三角形印刻文が施されている。
3	口縁部片	北東 +21	①内面・にぶい褐色 外面・明褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。裏面に段を形成。器厚８～12mm。内面は丁寧な調整。	口唇部にＬ（$\frac{R}{R}$）。以下、沈線による文様と刺突が施されている。
4	口縁部片	北東 +４	①内外面はにぶい黄橙色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚７～９mm。内面は横方向の調整が行われている。	口唇部に半截竹管による平行沈線を一条。以下、円形等の文様、三角形印刻文。
5	胴部片	北東 +19	①内面・にぶい褐色 外面・にぶい赤褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚８～17mm。内面は横方向の調整が行われている。	沈線による横位、斜位の文様。隆帯上にはＬ（$\frac{R}{R}$）横位施文。
6	胴部片	南東 +12	①内外面はにぶい赤褐色 ②良 ③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚８～10mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	半截竹管による平行沈線を数条巡らせ、以下縄文。原体はＬ（$\frac{R}{R}$）。煤付着。
7	口縁部片	北東 +２	①内面・明赤褐色 外面・赤褐色 ②良 ③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚８～11mm。内面は横方向の調整が行われている。	半截竹管による平行沈線と縄文施文。原体はＲ（$\frac{L}{L}$）横位施文。

図No	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
8	胴部片	北東+15	①内外面は明赤褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	結節浮線文。地文は、平縄竹管状工具による浅い斜位の沈線。
9	胴部片	南西+38	①内面・赤褐色　外面・にぶい褐色 ②良　③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚9～10mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	結節を有するR（$\frac{L}{R}$）の原体を縦位に施文している。
10	胴部片	北西+2	①内外面は赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～8mm。内面は横方向の調整が行われている。	縄文施文。原体はL（$\frac{R}{L}$）。内面に煤が付着している。
11	口縁部片	北西+26	①内面・にぶい黄橙色　外面・にぶい褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚8～10mm。内面は横方向の調整が行われている。	口唇部に刻目。口縁部に平縄竹管による連続爪形文3条。以下細沈線による文様。

図No	器種	出土位置	量				目	携存状況	石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量				
12	打製石斧	北西+40	11.0	4.3	1.3	87	完形	欠損	輝緑岩	優形。片面に大きく自然面を残す。
13	磨製石斧	南東+2	(6.5)	(6.1)	3.8	169	刃部欠損	石英安山岩	全面に研磨が施されるが、器面は粗い。
14	打製石斧	A47－190	6.7	3.7	1.2	29	完形	黒曜石	
15	打製石斧	覆土	7.2	3.8	0.8	25	刃部一部欠	輝緑岩	短冊形。
16	石鏃	北東+11	1.8	1.5	0.5	1	完形	黒曜石	平基無茎。
17	石鏃	覆土	1.8	1.5	0.4	0.4	完形	黒曜石	凹基無茎。
18	石匙	西北+18	2.15	4.6	1.0	6.2	完形	黒曜石	横長で、刃部は下になる。
19	石鏃	西北+15	(1.0)	(1.15)	(0.35)	(0.3)	先端部欠	黒曜石	凹基無茎。
20	?	北西+28	2.8	1.6	0.7	3.2	完形	黒曜石	
21	多孔石	A47－190	(25.2)	(11.6)	(7.6)	3400	両端部欠	輝緑岩	くぼみは径13mm、深さ5mm。
22	丸石	南東－7	5.9	2.9	2.5	35	完形	珪石	
23	磨石	北西+36	(3.2)	(4.2)	(2.2)	36	下半部欠	閃緑岩	片面に摩耗痕有り。
24	磨石	A47－190	7.3	7.2	3.0	245	完形	安山岩	両面に摩耗痕、側面に敲打痕有り。
25	磨石	南西+2	9.0	6.4	3.0	175	一部欠損	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
26	磨石	A48－193	(9.9)	(8.3)	(4.5)	420	上半部欠	花崗斑岩	両面に摩耗痕有り。
27	くぼみ石	南西+4	(5.9)	7.3	2.3	145	上半部欠	石英安山岩	くぼみは径16mm、深さ3mm。両面に摩耗痕有り。

7号住居跡出土遺物観察表

図No	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	口縁部片	南東+9	①内外面はにぶい黄橙色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の外反する口縁部片。器厚7～11mm。内面は横方向のミガキが行われている。	口縁部は直交する棒状の短隆帯と耳状の突起を貼付。平縄竹管で半隆起線の文様を描き彫り込みを入れる。
2	口縁部片	北東+35	①内面・にぶい黄橙色　外面・にぶい赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～11mm。内面は横方向の調整が行われている。	口唇部に棒状工具による2本の刻み。胴部は平縄竹管による半隆起線の文様を描く。
3	口縁部片	南東+15	①内面・にぶい赤褐色　外面・にぶい褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。口縁部に段を有する。器厚8～12mm。内面は横調整。	縄文施文。原体はR（$\frac{L}{L}$）とL（$\frac{R}{R}$）の結束第1種。土器面は柔軟。
4	口縁部片	北東+34	①内面・にぶい褐色　外面・にぶい赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。口唇部に段を形成。器厚8～11mm。内面は粗い調整。	縄文施文。原体はR（$\frac{L}{L}$）とL（$\frac{R}{R}$）の結束第1種。
5	口縁部片	南西+26	①内面・黄褐色　外面・にぶい褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚6～12mm。内面は荒れている。	口唇部と口縁部に平縄竹管状工具による沈線。地文にR（$\frac{L}{L}$）施文。
6	口縁部片	南西+18	①内外面はにぶい褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚8～10mm。内面は横方向のミガキが行われている。	口唇部に隆帯がはがれた痕跡。胴部は平縄竹管による半隆起線文。
7	胴部片	南西+26	①内面・黄褐色　外面・灰黄褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～9mm。内面は荒れている。	平縄竹管状工具による横位・斜位の集合沈線が施されている。L（$\frac{R}{R}$）施文。
8	胴部片	南東+14	①内面・にぶい褐色　外面・にぶい黄橙色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。内面は横方向のミガキが行われている。	平縄竹管による半隆起線文。
9	胴部片	南東+18	①内外面はにぶい黄橙色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～7mm。内面は粗い調整が行われている。	平縄竹管状工具による横位・縦位の沈線が施されている。地文にR（$\frac{L}{L}$）施文。
10	胴部片	南東+15	①内外面はにぶい黄橙色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。内面は粗い調整が行われている。	平縄竹管状工具による半隆起線文。
11	胴部片	南東+15	①内面・黄褐色　外面・灰黄褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。内面は横方向の調整が行われている。	半隆起線で文様を描き、下にR（$\frac{L}{L}$）施文。
12	胴部片	南東+10	①内面・にぶい褐色　外面・にぶい赤褐色 ②良　③細粒・雲母を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚5～8mm。内面は横方向のミガキが行われている。	無文地に結節浮線文を施す。
13	胴部片	北東+65	①内面・にぶい褐色　外面　にぶい赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～9mm。内面は粗い調整が行われている。	斜位の沈線が施されている。
14	胴部片	南西+17	①内面・にぶい褐色　外面・にぶい黄褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～9mm。内面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR（$\frac{L}{L}$）とL（$\frac{R}{R}$）の結束第1種。
15	胴部片	南東+5	①内面・赤褐色　外面・にぶい赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～8mm。内面は横方向の調整が行われている。	縄文施文。原体はR（$\frac{L}{L}$）とL（$\frac{R}{R}$）の結束第1種。

図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
16	胴部片	北東 +29	①内面・にぶい褐色 外面・にぶい赤褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～8mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR｛$\frac{L}{R}$｝とL｛$\frac{L}{R}$｝の結束第1種。
17	胴部片	北西 +26	①内面・にぶい橙色 外面・にぶい黄褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL｛$\frac{R}{R}$｝で1段の縄の結節が施される。
18	口縁部片	北西 +31	①内外面は橙色 ②やや良 ③細粒の砂と繊維を混入	深鉢形土器の波状口縁部片。器厚5～9mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	組紐。関山式。
19	胴部片	北東 +20	①内面・明黄褐色 外面・にぶい黄褐色 ②良 ③細粒の砂と繊維を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～9mm。内面は横方向のミガキが行われている。	組紐。関山式。
20	胴部～底部	南東 +14	①内外面は暗褐色 ②やや良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部から底部1/2。底径13.6cm。内面は横方向の調整が行われている。	結節縄文の縦位回転施文。内面に炭化物が付着している。
21	底部片	南東 +28	①内面・にぶい黄橙色 外面・にぶい黄褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の底部片。底径6.5cm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL｛$\frac{R}{R}$｝横転がし。内面に煤が付着している。
22	底部片	南東 +14	①内外面は赤黄橙色 ②やや良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の底部片。底径8.5cm。内面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR｛$\frac{L}{L}$｝。
23	底部	南東 +6	①内外面は赤褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の底部片。底径3.7cm。内面は丁寧な調整が行われている。	張りだし底。縄文施文。原体はR｛$\frac{L}{L}$｝。内面に煤が付着している。
24	底部片	南西 +49	①内外面はにぶい黄橙色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の底部片。器厚8～11mm。内面は丁寧な調整が行われている。	半截竹管による半隆起線文。

図No.	器種	出土位置	土器				残存状況	石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量			
25	打製石斧?	北東+28	6.8	3.2	1.1	25	完形	熱変成岩	
26	打製石斧	北西+33	(6.6)	9.7	1.8	138	基部欠損	頁岩	分銅形もしくは撥形。
27	石錘	北西+38	2.4	1.9	0.5	1.6	完形		凸基無茎。
28	?	南東+12	9.4	8.7	4.1	430	完形	熱変成岩	紐辺部に使用痕が認められる。
29	?	南東+9	46	2.3	1.0	5.5	完形	熱変成岩	
30	スクレイパー	北東+27	7.1	(4.2)	1.2	50	一部欠損	熱変成岩	側面に自然面を残す。
31	くぼみ石	南東+20	12.0	7.0	3.5	430	完形	安山岩	くぼみ5箇有り、平均で径12×10mm深さ1.5mm。
32	磨石	南東+19	(8.1)	6.2	2.1	120	一部欠損	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
33	磨石	南西+11	6.9	4.8	1.5	75	完形	流紋岩	両面に摩耗痕が認められる。
34	磨石	南東－2	8.7	8.0	3.9	448	完形	安山岩	両面縁辺部に摩耗痕が認められる。
35	磨石	北西+36	(7.7)	7.2	3.6	275	上半部欠	安山岩	両面に摩耗痕が認められる。
36	磨石	南東底面	(9.9)	(8.3)	(6.4)	535	上半部欠	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
37	くぼみ石	南東+4	15.1	6.2	4.2	396	完形	石英斑岩	くぼみは5箇有り、平均で径10×8mm深さ2mm。
38	くぼみ石	A47－I 93	(16.0)	6.2	5.4	768	一部欠損	安山岩	片面に1個のくぼみ、径25×20mm深さ3mm。
39	磨石	北東+30	18.9	7.7	5.5	1550	完形	石英安山岩	両面、側面片側に摩耗痕が認められる。
40	くぼみ石	北西+42	9.7	7.2	4.4	400	完形	石英安山岩	くぼみは3箇有り、平均で径8×7mm深さ2mm。
41	磨石	北西+30	(6.2)	5.3	4.0	200	一部欠損	チャート	片面に摩耗痕が認められる。
42	敲打石	南東+10	22.6	11.3	9.4	3600	完形	石英安山岩	端部に敲打痕が認められる。
43	多孔石	南東+9	(18.4)	15.7	6.1	2250	一部欠損	砂岩	くぼみは7箇有り、平均で径16×12mm深さ6mm。
44	石皿	南東－25	(19.1)	24.2	5.4	2690	隅角部欠	砂岩	磨面は平坦である。
45	台石	南西－7	48.9	15.5	15.1	1750	完形	安山岩	3面に摩耗痕が認められる。
46	多孔石	南東－26	28.7	16.8	5.3	3000	一部欠損	砂岩	くぼみは45箇有り、平均で径18×13mm深さ5mm。

2・7号住居跡周辺出土遺物観察表

図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	口縁部片	A47－I 93	①内面・褐色 外面・暗褐色 ②良 ③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の口縁部片。裏面に段を形成。器厚6～11mm。内面は丁寧な調整。	地文は縄文施文。原体はR｛$\frac{L}{L}$｝。半截竹管による沈線、交互刺突が施される。
2	口縁部片	A47－I 91	①内面・褐色 外面・暗褐色 ②良 ③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の口縁部片。裏面に段を形成。器厚7～11mm。内面は丁寧な調整。	口唇部に刻目。以下、棒状工具による沈線と刺突で文様が描かれる。地文は縄文L｛$\frac{R}{R}$｝。
3	口縁部片	A46－I 92			
4	胴部片	A46－I 93	①内面・にぶい黄橙色 外面・にぶい赤褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～11mm。内面は粗い調整が行われている。	半截竹管による沈線が描かれている。
5	胴部片	A47－I 90	①内面・にぶい赤褐色 外面・明赤褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚10～11mm。内面は横方向の丁寧な調整が行われている。	半截竹管による縦位の刺突が施されている。
6	胴部片	A46－I 91	①内面・にぶい橙色 外面・にぶい黄橙色 ②良 ③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～11mm。内面は横方向の調整が行われている。	無地に結節浮線文。彫り込みを入れる。
7	胴部片	A46－I 91	①内面・にぶい黄橙色 外面・にぶい赤褐色 ②良 ③細粒の砂と金雲母を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～7mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR｛$\frac{L}{L}$｝横位。棒状工具による沈線を乗下。

図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
8	胴部片	A45－I 89	①内面・にぶい赤褐色　外面・明赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。内面は横方向の調整が行われている。	縄文。原体はR（$\frac{1}{2}$とL（$\frac{R}{L}$の結束第1種。棒状工具の沈線。
9	底部片	A47－I 91	①内外面は明黄褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の底部片。器厚10～15mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL（$\frac{R}{L}$。棒状工具による沈線を垂下。
10	胴部片	A47－I 91	①内面・にぶい赤褐色　外面・暗赤褐色 ②やや良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～11mm。内面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はL（$\frac{R}{L}$とR（$\frac{1}{2}$の結束第1種。
11	胴部片	A47－I 91	①内外面はにぶい黄橙色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～8mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR（$\frac{1}{2}$とL（$\frac{R}{L}$の結束第1種。
12	胴部片	A48－I 92	①内面・橙色　外面・にぶい橙色 ②良　③細粒の砂と繊維を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～7mm。内面は縦方向のミガキが行われている。	組紐。開山式。

図No.	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
13	打製石斧	A47－I 91	10.8	4.9	1.5	82	刃部欠損	熱変成岩	撥形。
14	打製石斧	A47－I 91	5.9	4.5	2.0	70	基部欠損	熱変成岩	短冠形か。使用による刃部の摩耗著しい。
15	打製石斧	A47－I 93	1.5	4.5	1.0	9	両端部欠	熱変成岩	中央部のみ残る。
16	スクレイパー	A46－I 91	8.0	4.8	1.7	60	完　形	チャート	片面に一部自然面を残す。
17	スクレイパー	A47－I 89	7.3	4.9	2.8	117	両端部欠	熱変成岩	片面に自然面を残す。
18	石匙	A47－I 91	7.0	3.2	0.7	15	完　形	熱変成岩	縦長で短冠状を呈し刃部は側縁に有る。
19	?	A47－I 90	7.9	6.6	3.3	176	完　形	熱変成岩	
20	?	A47－I 90	7.4	8.4	4.8	298	完　形	流紋岩	側面に自然面を残す。
21	打製石斧	A45－I 89	12.1	5.8	2.2	72	一部欠損	熱変成岩	
22	石錘	覆土	2.1	1.1	0.5	1.3	基部欠損	黒曜石	凹基無茎。先端一部欠。
23	磨石	A47－I 90	9.4	6.3	5.4	507	ほぼ完形	安山岩	片面に摩耗痕有り。
24	磨石	A47－I 91	(5.9)	(6.6)	(4.4)	191	下半部欠	砂岩	片面に摩耗痕が認められる。
25	磨石	A46－I 90	(3.8)	(6.6)	(5.2)	135	下半部欠	石英斑岩	両面に摩耗痕有り。
26	磨石	A46－I 91	14.8	7.6	4.4	460	完　形	砂岩	両面に摩耗痕が認められる。
27	磨石	A48－I 91	14.4	6.8	5.1	740	完　形	輝緑岩	両面に摩耗痕有り。
28	くぼみ石	覆土	11.4	6.9	4.2	460	完　形	流紋岩	くぼみは径1.4～1.6mm深さ1mm。片面に摩耗痕有り。
29	台石	A46－I 92	15.2	20.3	4.2	1600	下半部欠	閃緑岩	

17A号土坑

位置　A47・48－I 92・93Gr　**重複**　2・7号住居跡に切られる。　**平面形態**　楕円形

規模　東西2.08m　南北1.73m（上端）　東西2.55m　南北1.73m（下端）　**深さ**　134cm

主軸方位　N－90°－E

備考　17B号土坑とともに、7号住居跡の床下から検出された。西側は壁が大きく内側に傾斜し、袋状になっているが、崩壊した部分もあると思われる。その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦であるが、東に向かってやや傾斜している。覆土の上層、底面より80cm程上の所の、中央部に焼土が2カ所、その周辺に硬化面が3カ所（一部は17B号土坑にかかる）検出されているが、性格は不明である。

出土遺物　縄文土器片が47点（1～3他）、石器は、打製石斧が1点（4）、スクレイパーが1点（5）、磨石が3点（6・7・9）、丸石が1点（11）、剝片等が49点出土している。

所見　上層に焼土・硬化面が検出されているためここに1面あった可能性がある。また、硬化面が17B号土坑までが続いているため、17B号土坑と同時に存在したと考えられる。出土遺物から、時期は前期末～中期初頭と思われる。

17B号土坑

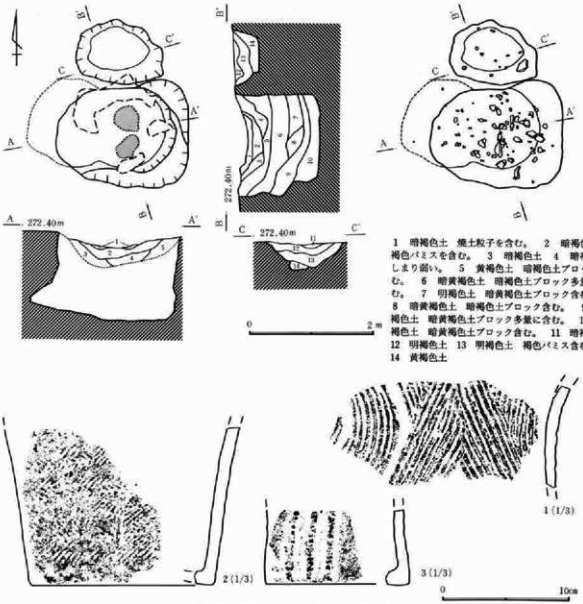
位置　A47－I92Gr　**重複**　2・7号住居跡に切られる。　**平面形態**　楕円形

規模　東西1.40m　南北1.02m　**深さ**　45cm　**主軸方位**　N－90°－E

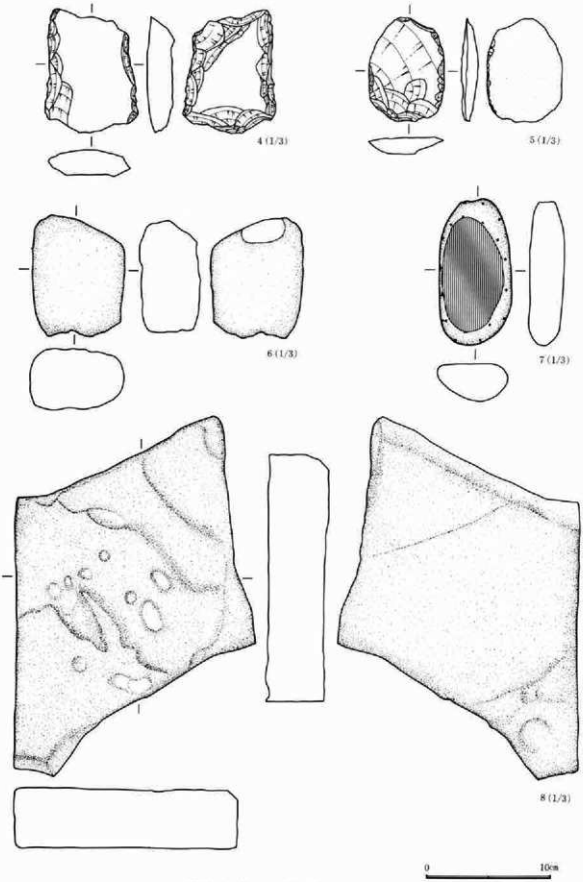
備考　17A号土坑と近接する。底面は、東西方向は中央がややくぼんでいるが、南北方向は平坦である。立ち上がりは緩やかであるが、北壁はやや急である。南壁の一部に、17A号土坑から続く硬化面が検出されている。

出土遺物　縄文土器片が4点、磨石（？）が1点（10）、多孔石が1点（8）、剝片等が7点出土している。

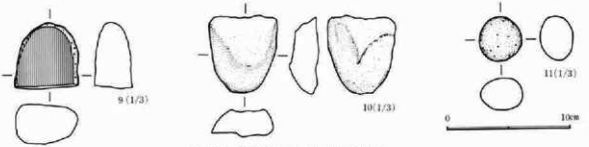
所見　17A号土坑から硬化面が続いているため、同時に存在した可能性が高い。出土遺物は少ないが、時期は17A号土坑同様、前期末～中期初頭と思われる。A・B両土坑とも7号住居跡の床下から検出されており、出土遺物をみても17A土坑と同様であることから7号住居跡の床下土坑とも考えられるが、規模、深さとも床下土坑とするには大きすぎると思われる。



第53図　17A・B号土坑および出土遺物(1)



第54図　17A・B号土坑出土遺物(2)



第55図　７号住居内土坑出土遺物(3)

17Ａ・Ｂ号土坑出土遺物観察表

図No	部位	出土位置	①色調 ②地成 ③粘土	成形・器面調整の特徴	文様
1	胴部片	南東 A	①内外面は明褐色 ②やや良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚７～10mm。内面は荒れている。	半截竹管による半隆起線文。掘り込みを入れる。
2	胴部～底部片	北東 A	①内面・明褐色 外面・にぶい黄褐色 ②やや良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部～底部。底径14.2cm。内面は横方向の調整が行われている。	縄文施文。原体はＲ（$\frac{L}{R}$）とＬ（$\frac{R}{L}$）の結束第１種。
3	底部片	南西 A	①内面・明赤褐色 外面・にぶい黄褐色 ②良 ③細粒の砂と雲母を混入	深鉢形土器の底部片。底径10.4cm。内面は丁寧な調整が行われている。	地文に半截竹管状工具による浅い斜位の沈線。結節浮線文を施す。

図No	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
4	打製石斧	A南東	9.9	7.4	2.2	225	両端部欠	輝緑岩	片面に大きく自然面を残す。
5	スクレイパー	A南西	8.2	6.1	1.4	87	完形	熱変成岩	片面にほとんど自然面を残す。
6	磨石	A南東	(9.6)	7.5	4.9	340	一部欠損	焼岩	器面が剥落し摩耗痕は不明だが両面か。
7	磨石	A北東	11.5	5.9	3.0	329	完形	流紋岩	片面に摩耗痕が認められる。
8	多孔石	B南東	28.6	19.2	5.0	3700	一部欠損	砂岩	くぼみは４個有り、平均径10×10mm深さ3mm。
9	磨石	A南東	5.2	5.1	3.2	142	下半部欠	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
10	？	B南西	6.2	5.4	2.4	85	上半部欠	砂岩	磨石の欠損品か。
11	丸石	A南西	3.5	3.4	2.6	32	完形	安山岩	球がややつぶれた形状。

27号土坑

位置　Ａ49－Ｉ98・99Gr

重複　なし　　**平面形態**　楕円形

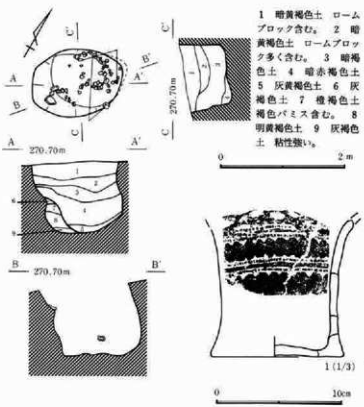
規模　東西1.58m　南北1.08m

深さ　106cm　　**主軸方位**　Ｎ－54°－Ｅ

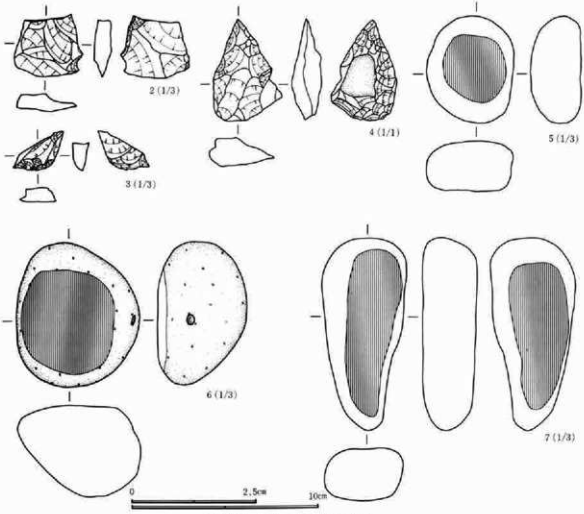
備考　底面は平坦で南に向かってわずかに傾斜している。立ち上がりは西壁は傾斜しているが、東壁はオーバーハングして袋状になっており、南北壁はほぼ直立している。遺物が多く、中央やや東よりの底面より約20cm上から１の深鉢が出土している。

出土遺物　縄文土器片が17点（１他）、石器は打製石斧が２点（２・３）、石鏃が１点（４）、磨石が３点（５・６・７）、剝片等が25点出土している。

所見　出土遺物から、時期は中期五領ヶ台式期と思われる。



第56図　27号土坑および出土遺物(1)



第57図　27号土坑出土遺物(2)

27号土坑出土遺物観察表

図№	部位	出土位置	①色調　②焼成　③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	底部	覆土	①内外面はにぶい黄橙色 ②やや良　③細粒の砂と雲母を混入	深鉢形土器の底部。底径10.5cm、残存高10.8cm、器厚6～7mm。内面は縦方向の調整が行われている。	張りだし底を呈する。平織竹管状による沈線内に連続爪形文。沈線に沿って三角印刻文を施す。

図№	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
2	打製石斧	覆土	(4.9)	5.4	1.4	39	基部欠損	輝緑岩	撥形か。
3	打製石斧	覆土	(3.1)	4.1	1.3	12	基部欠損	熱変成岩	刃部のみ。
4	石鏃	覆土	1.6	2.7	0.7	2.7	基部欠損	黒曜石	平基無茎。
5	磨石	覆土	8.5	7.0	4.0	370	完形	角閃岩	片面に摩耗痕が認められる。
6	磨石	覆土	11.4	9.8	7.2	1150	完形	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。側面にくぼみ有り。
7	磨石	覆土	15.2	6.7	4.3	717	完形	閃緑岩	両面に摩耗痕が認められる。

32号土坑

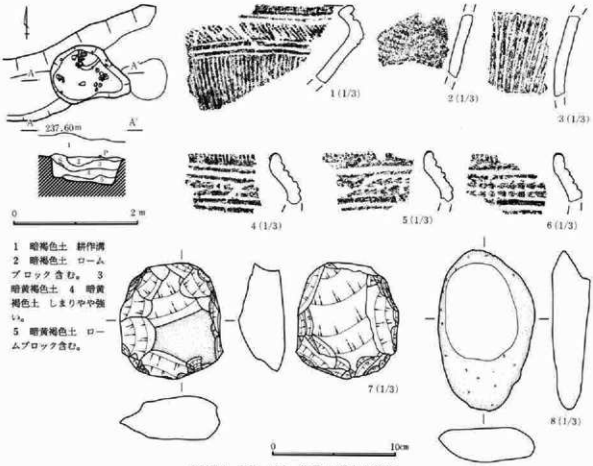
位置　A45－I91Gr　**重複**　上部を耕作溝に切られる。　**平面形態**　不正円形

規模　東西1.28m　南北0.90m　**深さ**　42cm　**主軸方位**　N－90°－E

備考　底面は平坦で立ち上がりは急であり、北部に36×32cm深さ10cmのピットがある。

出土遺物　縄文土器片が14点（1～6他）、石器は打製石斧が1点（7）、敲打石が1点（8）、剝片等が12点出土している。

所見　出土遺物から、時期は前期末～中期初頭と思われる。



1　暗褐色土　耕作溝
2　暗褐色土　ロームブロック含む。　3　暗黄褐色土　4　暗黄褐色土　しまりやや強い。
5　暗黄褐色土　ロームブロック含む。

第58図　32号土坑・32号土坑出土遺物

32号土坑出土遺物観察表

図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	口縁部片	覆土	①内面・明黄褐色　外面・にぶい黄褐色 ②良　③細粒の砂を混入	口縁部はくの字状に内傾する。器厚9～12mm。内面は横方向の調整。	口唇部に爪形文。以下平縄竹管による集合沈線文。
2	胴部片	覆土	①内面・にぶい褐色　外面・褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR（$\frac{1}{2}$横転がし。
3	胴部片	覆土	①内面・褐色　外面・にぶい赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～9mm。内面は横方向の調整が行われている。	平縄竹管による縦位の平行沈線が巡されている。
4 5 6	口縁部片	覆土	①内外面は赤褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚9～11mm。内面は横方向の調整が行われている。	口唇部に爪形文。口縁部には平縄竹管による横位の平行沈線と爪形文。

図No.	器種	出土位置	量目 全長	量目 幅	量目 厚さ	量目 重量	残存状況	石材	特徴
7	打製石斧	(不明)	9.2	8.3	3.8	340	完形	輝緑岩	片面に自然面を残す。
8	敲打石	覆土	12.7	7.6	3.0	340	完形	安山岩	端部に敲打痕が認められる。

46号土坑

位置　A48－I91・92Gr

重複　7号住居跡と重複（新旧不明）

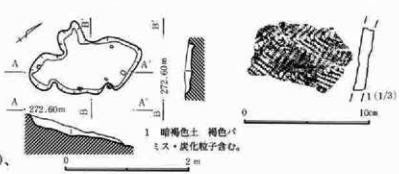
平面形態　不正形　　**深さ**　25cm

規模　東西1.85m　南北1.20m

主軸方位　N－25°－E

備考　底面は北に向かい傾斜する。

出土遺物　縄文土器片が3点（1他）、剥片等が8点出土している。



1　暗褐色土　褐色パミス・炭化粒子含む。

第59図　46号土坑および出土遺物

46号土坑出土遺物観察表

図版	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	胴部片	覆土	①内面・にぶい黄橙色 外面・灰黄褐色 ②良 ③中粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR｛$\frac{L}{L}$｝と L｛$\frac{RR}{LL}$｝で結束第1種。

第4節　その他の遺構

18号土坑

位置　A59－Ⅰ76Gr　**重複**　なし　**平面形態**　楕円形　**規模**　東西1.00m　南北0.80m

深さ　30cm　**主軸方位**　N－S　**備考**　東側は削平されて残存状態は悪い。立ち上がりは緩やかである。

23号土坑

位置　A53・54－Ⅰ75・76Gr　**重複**　一部耕作溝に切られる。　**平面形態**　胴の張った長方形

規模　東西2.60m　南北2.00m　**深さ**　30cm　**主軸方位**　N－62°－E

備考　底面はほぼ平坦で、南に向かいやや傾斜している。南部に東西90cm南北40cm、深さ10cmのピットあり。

出土遺物　土器は、須恵器甕片が1点、石器は、磨石が1点、剝片等が10点、計11点出土している。

24号土坑

位置　A47－Ⅰ97Gr　**重複**　なし　**平面形態**　楕円形　**規模**　東西1.60m　南北0.90m

深さ　16cm　**主軸方位**　N－20°－E　**備考**　断面は浅い皿状を呈している。

25号土坑

位置　A48－Ⅰ98Gr　**重複**　なし　**平面形態**　胴の張った台形　**規模**　東西0.66m　南北0.56m

深さ　14cm　**主軸方位**　N－26°－E　**備考**　立ち上がりは、西壁が傾斜し東壁は垂直に近い。

26号土坑

位置　A48－Ⅰ98・99Gr　**重複**　なし　**平面形態**　隅丸方形　**規模**　東西1.04m　南北0.90m

深さ　26cm　**主軸方位**　N－28°－W　**備考**　底面は、中央がやや高く南東に向かって傾斜している。

出土遺物　石匙が1点、剝片が1点、計2点出土している。

28号土坑

位置　A49－Ⅰ97Gr　**重複**　なし　**平面形態**　隅丸長方形　**規模**　東西0.88m　南北0.56m　**深さ**28cm

主軸方位　N－89°－E　**備考**　底面は南に向かい傾斜する。　**出土遺物**　縄文土器片が1点出土する。

29号土坑

位置　A52・53－Ⅰ95・96Gr　**重複**　なし　**平面形態**　楕円形　**規模**　東西0.96m　南北0.72m

深さ　36cm　**主軸方位**　N－73°－E　**備考**　立ち上がりは急で底面に40×25cm深さ16cmのピットあり。

30号土坑

位置　A53－Ⅰ93・94Gr　**重複**　なし　**平面形態**　不正円形　**規模**　東西2.44m　南北1.70m

深さ　38cm　**主軸方位**　N－80°－E　**備考**　底面に110×70cm深さ20cmのピットあり。

出土遺物　縄文土器片が2点、石器は、打製石斧・磨石が各1点、剝片等が13点、計15点出土している。

31号土坑

位置　A51-Ⅰ97Gr　**重複**　なし　**平面形態**　胴の張った長方形　**規模**　東西1.00m南北0.64m　**深さ**　36cm

主軸方位　N－10°－W　**備考**　底面は平坦で、立ち上がりは急である。　**出土遺物**　剝片が1点出土。

34号土坑

位置　A53－Ⅰ93・94Gr　**重複**　なし　**平面形態**　楕円形　**規模**　東西2.58m　南北1.16m

深さ　46cm　**主軸方位**　N－72°－E　**備考**　底面は南に向かって傾斜しており、断面形は浅い皿状をなす。　**出土遺物**　縄文土器片が2点、剥片が1点出土している。

36号土坑

位置　A55～57－I72～75Gr　**重複**　43号土坑と重複する。　**平面形態**　不正形　**規模**　東西5.00m　南北9.00m　**深さ**　134cm　**主軸方位**　N－45°－W　**備考**　谷状の落ち込みで、南東に向かって傾斜する。南東部は谷部に抜け立ち上がらない。土坑として扱ったが、自然の小規模な谷である可能性もある。

出土遺物　土器は、土師器甕片が11点、須恵器坏片が5点、甕片が6点、陶器片が1点、縄文土器片が10点、計33点、石器は、打製石斧が2点、磨石が1点、くぼみ石が2点、多孔石が1点、剥片等が36点、計42点と多数出土しているが、周辺の遺構からの混入品である可能性が高い。

38号土坑

位置　A47～51－I56～59Gr　**重複**　なし　**平面形態**　不正形　**規模**　東西9.70m　南北6.80m　**深さ**　52cm　**主軸方位**　N－42°－W　**備考**　大きな浅い皿状の落ち込み。土坑としたが性格は不明で、底面に土坑状の浅い掘り込み多数あり。　**出土遺物**　土器は、土師器甕片が1点、須恵器甕片が1点、縄文土器片が2点、計4点、石器は、打製石斧が3点、スクレイパーが1点、剥片等が20点、計24点出土した。

39号土坑

位置　A49・50-I79・80Gr　**重複**　なし　**平面形態**　胴の張った長方形　**規模**　東西1.34m　南北3.24m　**深さ**　70cm　**主軸方位**　N－26°－E　**備考**　底面は南東に向かって傾斜し、立ち上がりは垂直に近い。

40号土坑

位置　A52・53－I82Gr　**重複**　なし　**平面形態**　長方形　**規模**　東西0.74m　南北2.92m　**深さ**　32cm　**主軸方位**　N－24°－E　**備考**　底面は水平で、立ち上がりは垂直に近い。

41号土坑

位置　A53・54－I85・86Gr　**重複**　42号土坑を切る。　**平面形態**　隅丸長方形　**規模**　東西0.90m　南北0.44m　**深さ**　48cm　**主軸方位**　N－56°－E　**備考**　底面は水平で、立ち上がりは急である。

42号土坑

位置　A52～54－I85・86Gr　**重複**　41号土坑に切られる。　**平面形態**　不正形　**規模**　東西2.04m　南北5.60m　**深さ**　38cm　**主軸方位**　N－27°－E　**備考**　底面は南東に向かって傾斜している。

44号土坑

位置　A47－I89・90Gr　**重複**　なし　**平面形態**　胴の張った正方形　**規模**　東西1.56m　南北1.38m　**深さ**　27cm　**主軸方位**　N－72°－E　**備考**　底面は平坦で、立ち上がりは急である。

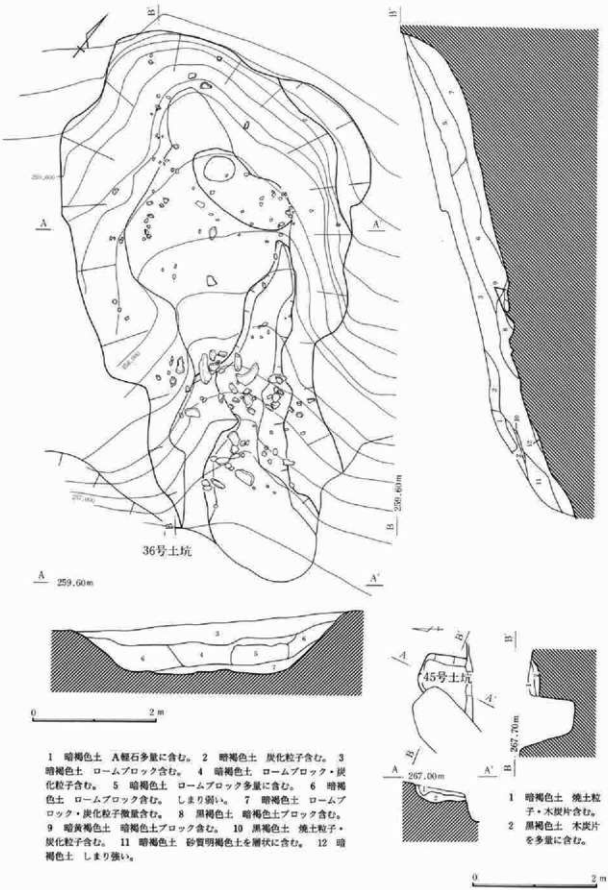
45号土坑

位置　A49－I63Gr　**重複**　トレンチ、近現代の貯蔵穴に切られる。　**平面形態**　長方形か？　**規模**　東西0.90m　南北1.04m　**主軸方位**　N－90°－E　**備考**　立ち上がりは緩やかで、北部に焼土が検出されている。　**出土遺物**　土師器片が1点出土している。

43号土坑

A53～57－I72・73Gr付近から遺物が多数出土したため、土坑として掘り下げたが、はっきりした立ち上がりは確認できなかった。自然の落ち込みに遺物が流れ込んだものの可能性もある。

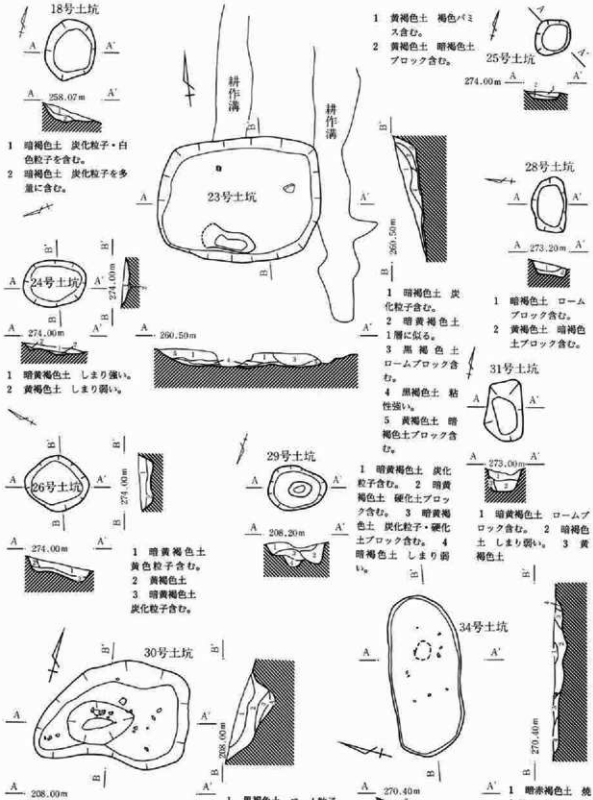
出土遺物　土器は、土師器甕が19点、須恵器坏が8点、須恵器甕が3点、縄文土器が1点、計31点、石器は、スクレイパーが1点（2）、磨石が1点（1）、剥片等が18点、計20点出土している。



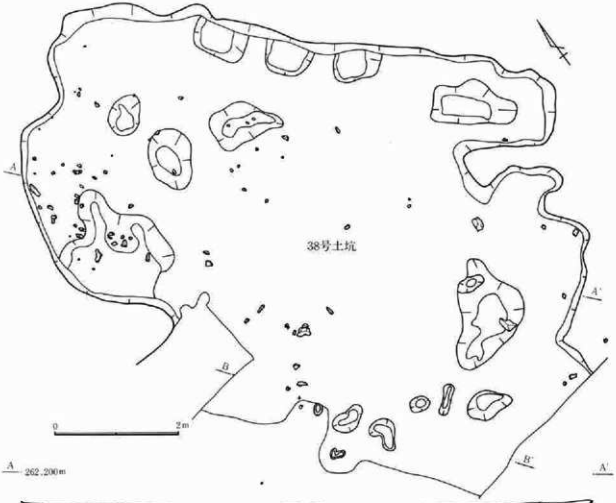
1　暗褐色土　A軽石多量に含む。　2　暗褐色土　炭化粒子含む。　3　暗褐色土　ロームブロック含む。　4　暗褐色土　ロームブロック・炭化粒子含む。　5　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。　6　暗褐色土　ロームブロック含む。　しまり弱い。　7　暗褐色土　ロームブロック・炭化粒子微量含む。　8　黒褐色土　暗褐色土ブロック含む。　9　暗黄褐色土　暗褐色土ブロック含む。　10　黒褐色土　焼土粒子・炭化粒子含む。　11　暗褐色土　砂質明褐色土を層状に含む。　12　暗褐色土　しまり強い。

1　暗褐色土　焼土粒子・木炭片含む。
2　黒褐色土　木炭片を多量に含む。

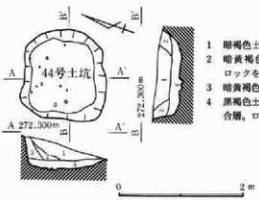
第60図　36・45号土坑



第61図　18・23～26・28～31・34号土坑

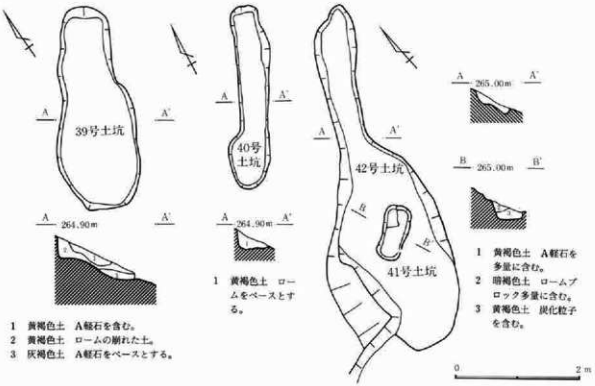


1　黒褐色土　B軽石を多量に含む。
2　暗黄褐色土　暗褐色土ブロックを多量に含む。
3　黒褐色土　焼土粒子・炭化粒子を含む。粘性強い。

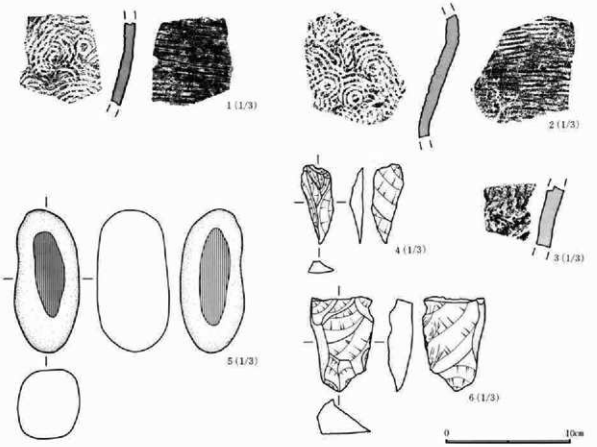


1　暗褐色土　炭化粒子含む。
2　暗黄褐色土　暗褐色土ブロックを含む。
3　暗黄褐色土
4　黒褐色土　木炭片・灰の混合層。ロームブロック含む。

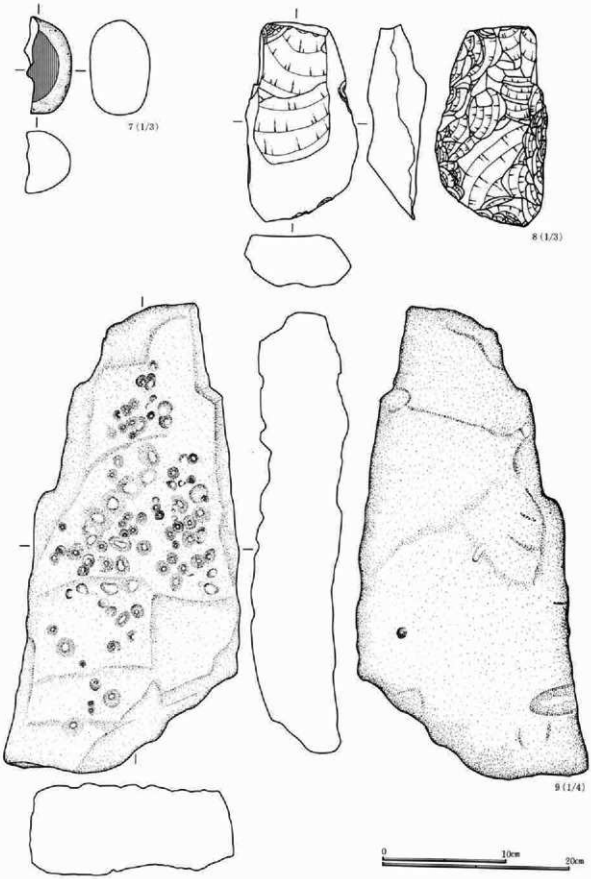
第62図　38・44号土坑



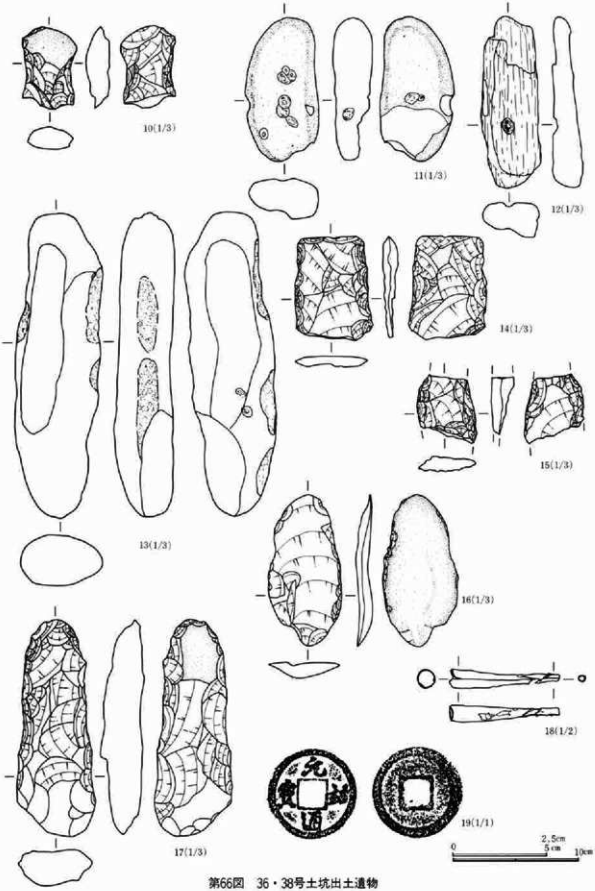
第63図　39～42号土坑



第64図　23・26・30・36・38号土坑出土遺物



第65図　30・36号土坑出土遺物



第66図　36・38号土坑出土遺物

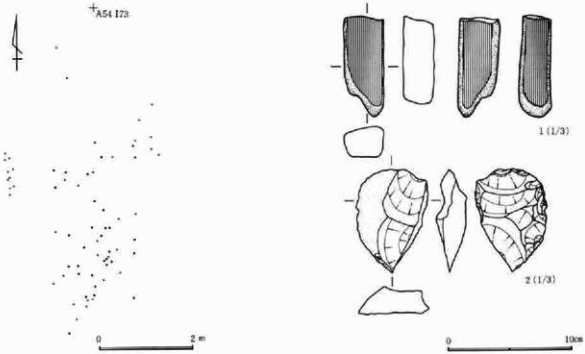
23・26・30・36・38号土坑出土遺物観察表

図№	種別 器種	出土位置	量目 (cm)	①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②純成 ③胎土	成形、調整の特徴
1	須恵器 壺	23号土坑	①— ③—	②— ④胴部片	①暗灰色 ②湿元給、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き。内面青海波文当て具。器厚9～11mm。
2	須恵器 壺	36号土坑	①— ③—	②— ④胴部片	①淡黄色 ②湿元給、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き。内面青海波文当て具。自然釉付着。器厚7～9mm。
3	須恵器 壺	38号土坑	①— ③—	②— ④胴部片	①灰オリーブ色 ②湿元給、硬 ③砂粒を含む。	内外面に自然釉付着。内面は発泡する。いずれも破砕強に付着。器厚10～12mm。

図№	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
4	石鏃	26号土坑	6.3	2.6	1.2	13	完形	熱変成岩	縦長剝片を使用。刃は側縁に有る。
5	磨石	23号土坑	11.4	5.1	5.7	530	完形	砂岩	両面に摩耗痕が認められる。
6	打製石斧	30号土坑	7.5	5.0	2.7	106	一部欠損	熱変成岩	側面に自然面を残す。
7	磨石	30号土坑	(7.7)	(4.8)	(4.9)	160	側半部欠	流紋岩	片面に摩耗痕が認められる。
8	打製石斧？	36号土坑	15.8	9.0	4.7	820	完形	熱変成岩	片面に自然面を残す。
9	多孔石	36号土坑	49.9	24.9	10.3	12700	完形	砂岩	くぼみは92個有り、平均径14×11mm深さ4mm。
10	打製石斧	36号土坑	6.5	4.4	1.9	68	刃部欠損	安山岩	撥形か。片面に自然面を残す。
11	くぼみ石	36号土坑	11.4	6.0	3.2	280	一部欠損	安山岩	
12	くぼみ石	36号土坑	13.6	4.8	2.8	235	完形	石墨片岩	くぼみは1個あり、径13×9mm深さ2mm。
13	(不明)	36号土坑	24.1	6.9	5.0	1300	一部欠損	輝緑岩	両面に摩耗痕が、側面に敲打痕が認められる。
14	打製石斧	38号土坑	(8.2)	6.3	1.2	75	刃部一部欠	熱変成岩	短冊形。
15	打製石斧	38号土坑	(5.5)	4.3	1.8	45	両端部欠	熱変成岩	撥形か。
16	スクレイパー	38号土坑	12.0	5.7	1.2	105	完形	熱変成岩	片面にほとんど自然面を残す。
17	打製石斧	38号土坑	17.2	6.2	3.5	430	完形	熱変成岩	撥形、刃部に摩耗痕有り。

図№	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	特徴
18	煙管吸口	36号土坑	5.9	1.0～0.3	1.0～0.3	3.3	ほぼ完形	

図№	銭貨銘	出土位置	量目 径	孔	重量	材質	特徴
19	元祐通宝	38号土坑	2.4	0.7×0.7	2.3	銅	北宋銭。1093年初鋳。



第67図　43号土坑遺物出土状況および出土遺物

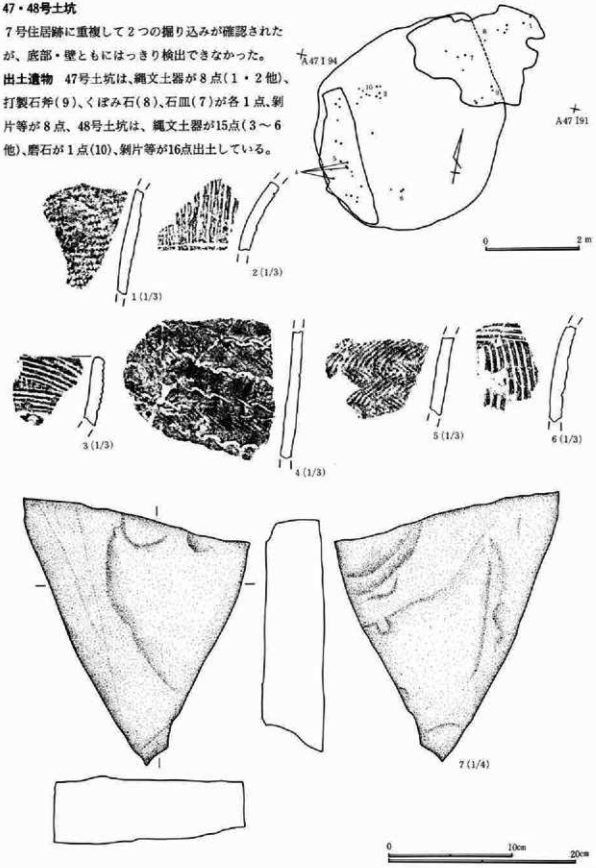
43号土坑出土遺物観察表

図№	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
1	磨石		8.0	3.1	2.4	123	上半部欠	安山岩	3面に摩耗痕が認められる。
2	スクレイパー		8.1	5.8	2.2	119	完形	熱変成岩	片面に自然面を残す。

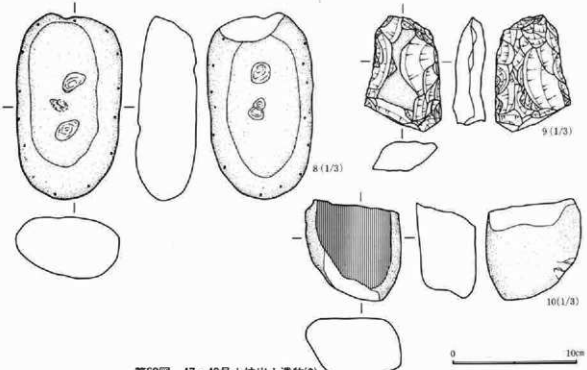
47・48号土坑

７号住居跡に重複して２つの掘り込みが確認されたが、底部・壁ともにはっきり検出できなかった。

出土遺物　47号土坑は、縄文土器が８点（１・２他）、打製石斧（９）、くぼみ石（８）、石皿（７）が各１点、剥片等が８点、48号土坑は、縄文土器が15点（３～６他）、磨石が１点（10）、剥片等が16点出土している。



第68図　47・48号土坑遺物出土状況および出土遺物



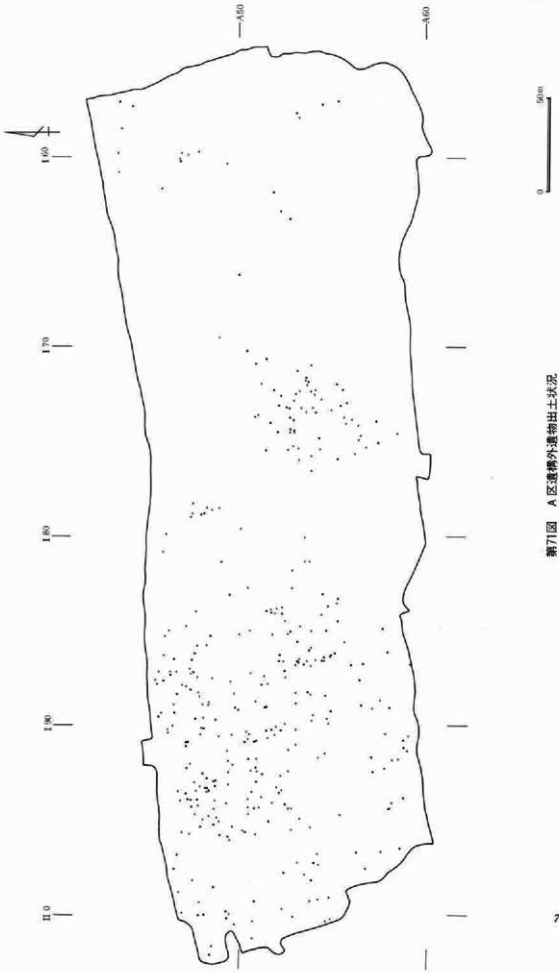
第69図　47・48号土坑出土遺物(2)

47・48号土坑出土遺物観察表

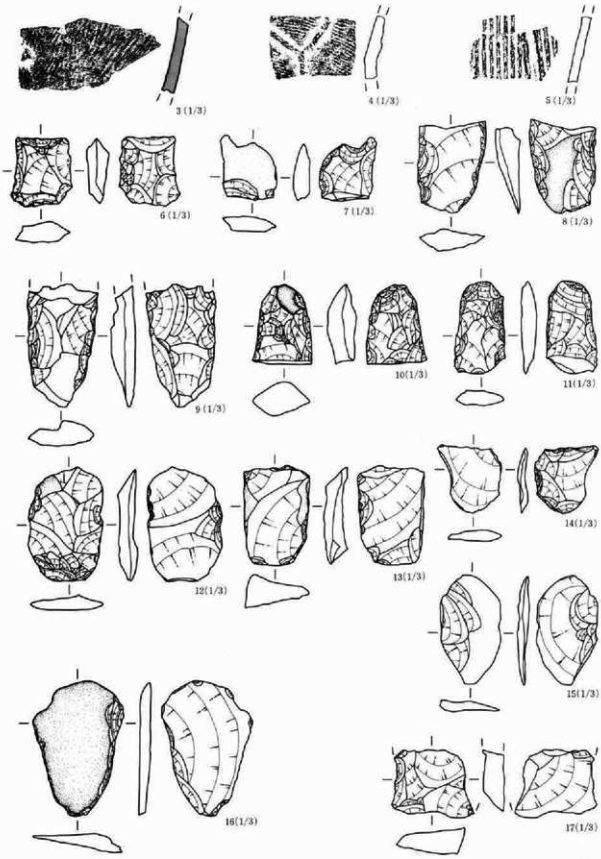
図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	胴部片	47号土坑	①内外面は橙色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(上横転がし。
2	胴部片	47号土坑	①内面・におい褐色 外面・におい赤褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～10mm。内面は丁寧な調整が行われている。	半截竹管による横位・縦位の沈線が施されている。
3	口縁部片	48号土坑	①内外面はにおい褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～9mm。内面は横方向の調整が行われている。	半截竹管による沈線。頸部に刺突をした隆帯。
4	胴部片	48号土坑	①内外面は褐色 ②やや良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～10mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	結束第2種のL(ｹﾞとR(ｼ・R(上とL(ﾊﾞの2つの縄文施文。
5	胴部片	48号土坑	①内面・におい褐色 外面・褐色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(ﾊﾞとR(上の結束第1種。
6	胴部片	48号土坑	①内面・褐色 外面・におい褐色 ②やや良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～11mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	半截竹管による半隆起線文。彫り込みを入れる。

図No.	器種	出土位置	量目 全長	量目 幅	量目 厚さ	量目 重量	残存状況	石材	特徴
7	石皿	47号土坑	(16.3)	(17.9)	(5.0)	2200	部分	砂岩	両面に大小のくぼみが有る。
8	くぼみ石	47号土坑	(14.6)	8.4	4.9	1100	一部欠損	安山岩	くぼみは6個有り、平均径16×11mm深さ1mm。
9	打製石斧	47号土坑	9.1	5.1	2.3	179	刃部欠損	熱変成岩	線形片面に一部自然面を残す。
10	磨石	48号土坑	7.5	7.5	5.5	382	上半部欠	石英安山岩	片面に摩耗痕6箇められる。

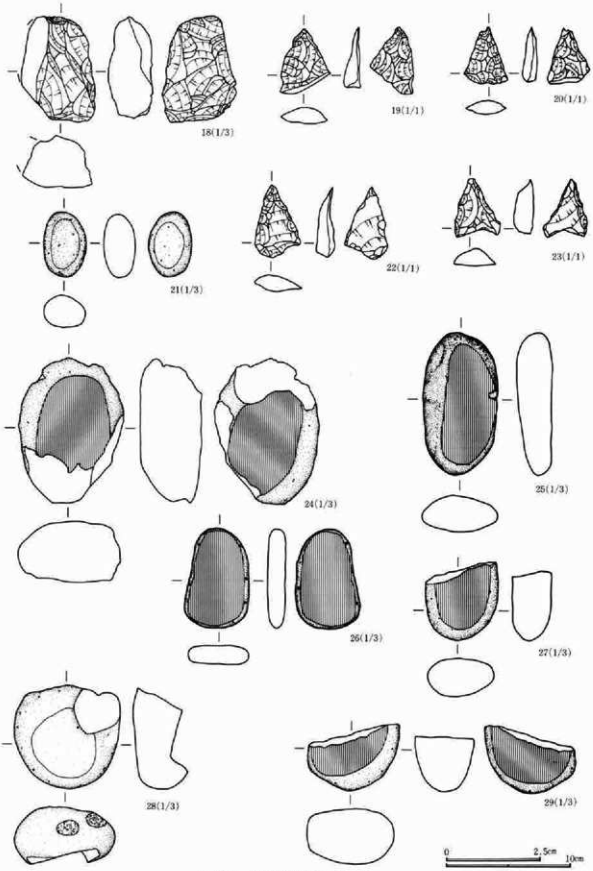
第70図　A区遺構外出土遺物(1)



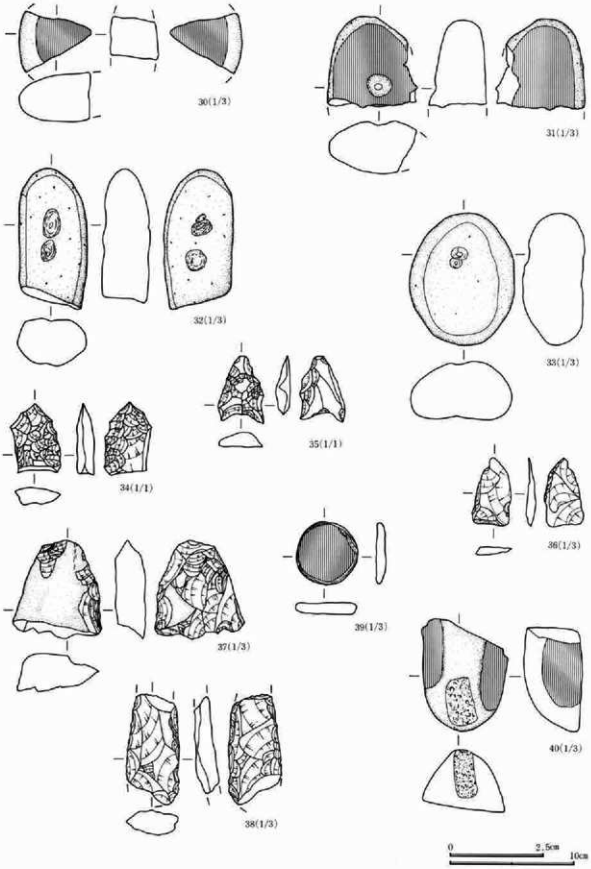
第71図　A区遺構外遺物出土状況



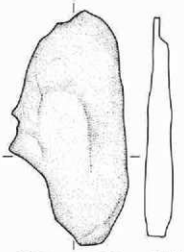
第72図　A区遺構外出土遺物(2)



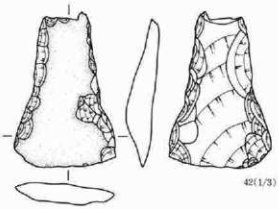
第73図　A区遺構外出土遺物(3)



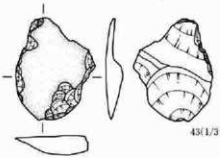
第74図　A区遺構外出土遺物(4)



41(1/3)



42(1/3)



43(1/3)

0　10cm

第75図　A区遺構外出土遺物(5)

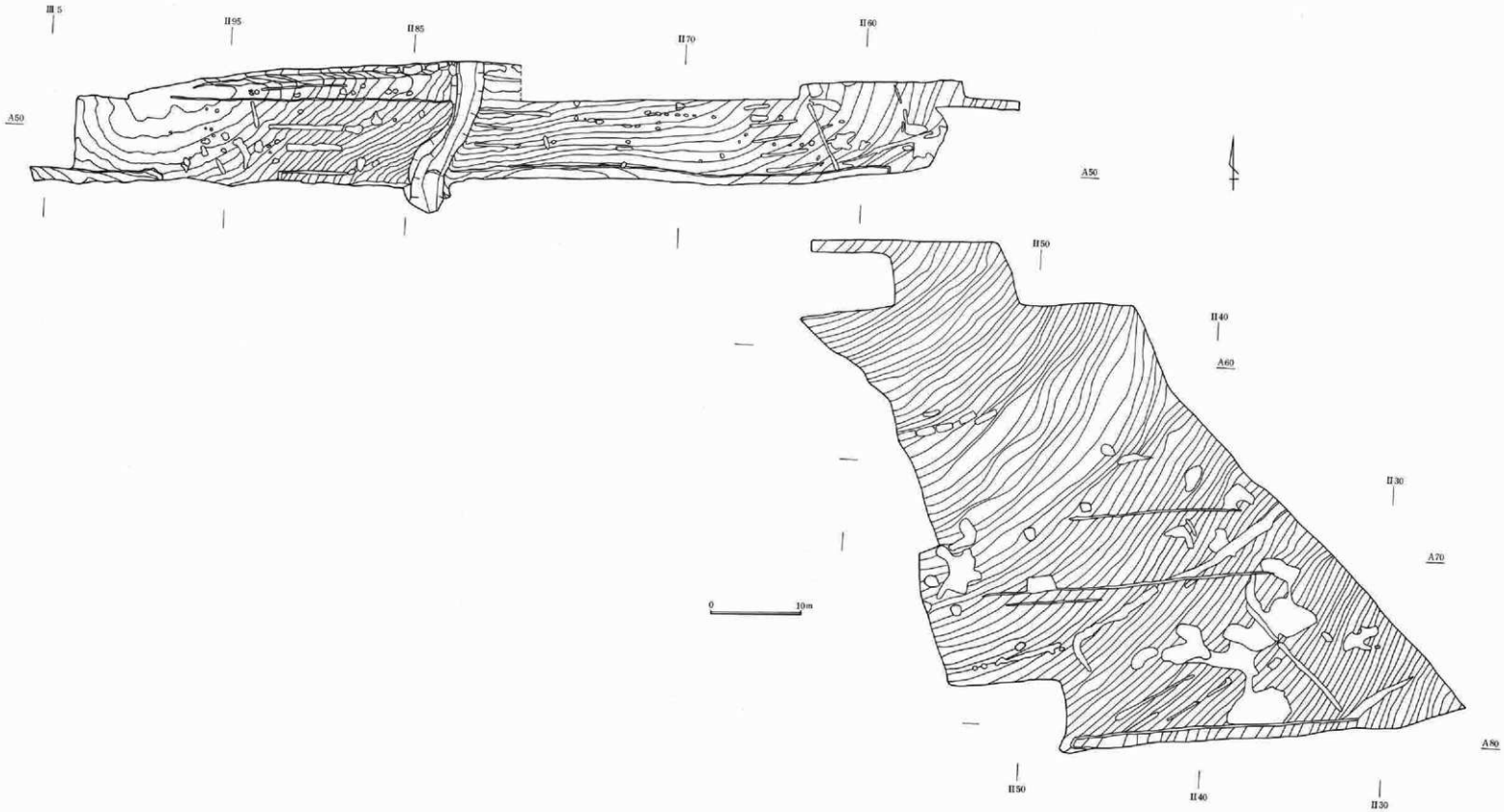
A区出土遺物観察表

図No	種別 器種	出土位置	量目 (cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	須恵器 甕	A53 I 63	①— ②— ③— ④胴部片	①にぶい黄色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き。内面青海波文当て具。自然釉付着。
2	須恵器 甕	A52 I 71	①— ②— ③(7.0) ④胴部片	①赤灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒・白色粒子を含む。	外面平行叩き。内面青海波文当て具。器厚9～11mm。
3	須恵器 甕	A49 II 0	①— ②— ③(6.0) ④—	①明灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を多量に含む。	外面平行叩き。内面当て具。器厚9～10mm

図No	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
4	胴部片	A52 I 90	①内面・にぶい橙色　外面・にぶい褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～11mm。 内面は横方向の調整が行われている。	粘土紐を貼付た後縄文施文。原体は R(上)。
5	胴部片	表採	①内面・明褐色　外面・にぶい褐色 ②良　③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚6～8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。	半截竹管による半隆起線文。彫り込みを入れる。

図No	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
6	打製石斧	A54 I 99	5.1	4.9	1.8	55	両端部欠	熱変成岩	短冊形か。
7	打製石斧	A52 I 84	(5.1)	(4.5)	(1.3)	38	刃部欠損	硬砂岩	片面に自然面を残す。
8	打製石斧	A46 I 91	(7.3)	5.5	2.0	80	上半部欠	硬砂岩	撥形。片面に自然面を残す。
9	打製石斧	A53 I 94	(9.7)	5.6	2.0	115	基部欠損	熱変成岩	短冊形か。刃部に摩耗痕有り。
10	打製石斧	A48 I 94	(6.3)	4.1	2.6	80	刃部欠損	熱変成岩	撥形。片面に自然面を残す。
11	打製石斧	A54 I 73	(7.3)	4.0	1.2	44	刃部欠損	安山岩	撥形。
12	スクレイパー	A56 I 74	9.0	6.0	1.6	90	完形	熱変成岩	片面に一部自然面を残す。
13	スクレイパー?	A52 I 90	7.9	5.3	1.9	130	完形	熱変成岩	側面に自然面を残す。
14	石匙?	A90 I 49	5.4	5.0	0.9	25	完形	熱変成岩	横長剥片を用い、刃部は下に有る。
15	スクレイパー	A49 I 95	8.6	4.8	1.0	49	完形	輝緑岩	片面に自然面を残す。
16	スクレイパー	A53 I 73	10.8	7.2	1.5	91	完形	熱変成岩	片面に大きく自然面を残す。
17	スクレイパー	A49 I 95	(5.4)	6.6	2.1	76	上部欠損	熱変成岩	片面に自然面を残す。
18	?	A51 I 87	8.3	5.9	4.1	240	一部欠損	熱変成岩	
19	石斧	A52 I 93	(1.7)	1.3	0.4	0.7	基部欠損	黒曜石	欠損のため基部は不明。
20	石鏃	A52 I 90	(1.5)	1.1	0.4	0.4	基部欠損	黒曜石	欠損のため基部は不明。

図No.	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
21	丸石	A47Ⅰ92	5.1	3.4	2.5	65	完形	流紋岩	やや細長い形状。
22	石錘	A54Ⅰ76	(1.9)	1.2	0.4	0.6	基部欠損	黒曜石	欠損のため基部は不明。
23	石錘	A59Ⅰ95	1.4	1.2	0.5	0.6	完形	黒曜石	凹基無茎。
24	磨石	A48Ⅰ93	11.45	8.4	5.0	545	一部欠損	安山岩	周囲に摩耗痕が認められる。
25	磨石	A48Ⅰ78	11.3	6.0	3.0	275	完形	硬砂岩	片面に摩耗痕が認められる。
26	磨石	A50Ⅰ90	7.9	5.1	1.5	96	完形	流紋岩	周囲に摩耗痕が認められる。
27	磨石	A47Ⅰ99	(6.1)	5.9	3.2	165	上半部欠	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。
28	敲打石	A59Ⅰ75	(8.2)	8.4	4.5	410	上半部欠	石英安山岩	側面に敲打痕が認められる。
29	磨石	A53Ⅰ75	(5.3)	(7.3)	(4.7)	210	上半部欠	安山岩	周囲に摩耗痕が認められる。
30	磨石	A49Ⅰ92	(4.8)	(5.7)	(3.8)	110	部分	石英斑岩	周囲に摩耗痕が認められる。
31	くぼみ石	A53Ⅰ94	(7.2)	(7.2)	(4.2)	240	下部欠損	安山岩	くぼみは幅20×16mm深さ4mm。周囲に摩耗痕有り。
32	くぼみ石	A54Ⅰ77	(11.2)	5.5	3.7	355	下半部欠	安山岩	くぼみは5個有り、平均径16×13mm深さ2mm。
33	くぼみ石	A48Ⅰ84	10.4	8.3	4.9	650	完形	安山岩	くぼみは2個有り、平均径14×9mm深さ2mm。
34	石錘	A54Ⅰ76	1.9	1.2	0.5	1.2	基部欠損	黒曜石	欠損のため基部は不明。
35	石錘	A53Ⅰ72	1.8	1.3	0.4	0.8	完形	黒曜石	凹基無茎。
36	スクレイパー	A52Ⅰ76	5.4	3.2	0.8	13	完形	熱変成岩	片面に自然面を残す。
37	打製石斧？	1トレンチ	(7.85)	(7.1)	(3.1)	180	刃部欠損	熱変成岩	周囲に大きく自然面を残す。
38	打製石斧	1トレンチ	(8.8)	(4.2)	(2.0)	85	両端部欠損	硬砂岩	撥形。片面に一部自然面を残す。
39	磨石	1トレンチ	4.9	4.8	0.9	263	完形	緑泥片岩	片面に摩耗痕が認められる。円盤状を呈す。
40	磨石	2トレンチ	(8.8)	(6.8)	(4.9)	405	部分	硬砂岩	2面に摩耗痕、端部に敲打痕が認められる。
41	石皿	2トレンチ	18.7	8.4	2.4	430	一部欠損	砂岩	磨面はやや くぼんでいる。
42	打製石斧	7トレンチ	12.4	8.2	2.6	190	基部欠損	安山岩	撥形。片面に大きく自然面を残す。
43	スクレイパー	7トレンチ	8.1	6.3	1.6	83	完形	熱変成岩	片面に大きく自然面を残す。

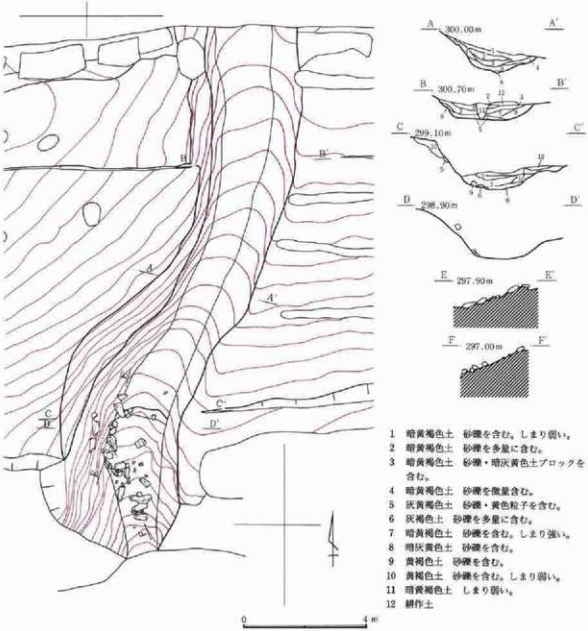


第76図　野上塩之入遺跡Ｂ区全体図

第5節　B区中近世

通称「テシロ」部

B区北西隅は、東西に長い丘陵の頂部となっている。北側および西側は急な斜面となり、東側は1号溝により区画されている。南側は比較的緩やかな斜面となっているが、1つの小平坦面を形成している。ここは地元では「テシロ（手城）」と呼ばれており、「手城」は「出城」に通じると思われるため、中世城郭関係の性格が考えられる。谷を隔てて西に位置する塩之入城は、この「テシロ」部や、城の南西方向にある同様の小平坦面などを含めて、広い意味で1つの城として機能していたとすることができる。しかしながら、ここからは中世の遺構・遺物は検出されなかった。



第77図　1号溝

1号溝

位置　A46～54－II81～85Gr　**重複**　近現代の耕作溝に切られる。　**規模**　確認全長17.2m　幅2.5～4.2m　**深さ**　80～120cm　**走向**　N－14°－E　**備考**　調査区北壁から南に向かい、途中やや西に傾くが、再び南に向き南壁に至っており、東西にのびる丘陵を分断している。調査区内の底面の比高差は5.2mある。底面はやや丸みを帯びるが比較的平坦で、立ち上がりは外反する。南部に礫が集中して検出されている。

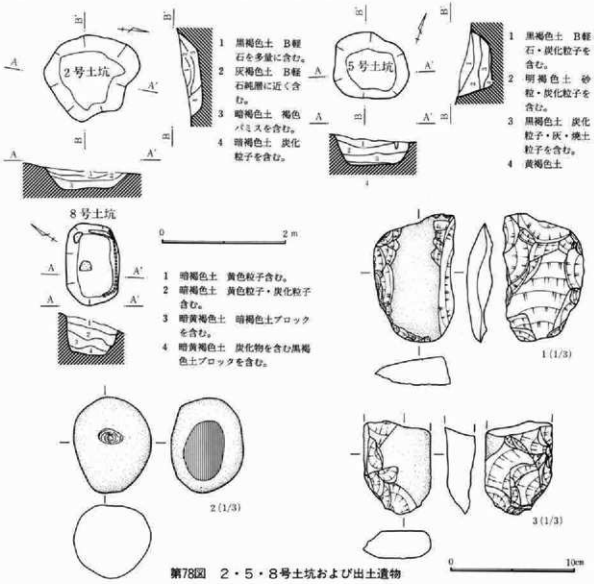
2号土坑

位置　A69－II49・50Gr　**重複**　なし　**平面形態**　不正円形　**規模**　東西1.52m　南北1.40m　**深さ**　44cm　**主軸方位**　N－2°－W　**備考**　底面は平坦で、東に向かいやや傾斜する。立ち上がりはやや傾斜する。

出土遺物　打製石斧が1点（3）、スクレイパーが1点（1）、磨石が1点（2）、剝片等が2点出土している。

5号土坑

位置　A67・68－II46・47Gr　**重複**　なし　**平面形態**　楕円形　**規模**　東西1.20m　南北1.06m　**深さ**　48cm　**主軸方位**　N－79°－E　**備考**　底面は平坦で、立ち上がりはやや急である。



第78図　2・5・8号土坑および出土遺物

2号土坑出土遺物観察表

図No.	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
1	スクレイパー	覆土	10.1	6.5	2.2	180	完形	熱変成岩	片面に大きく自然面を残す。
2	磨石	覆土	7.6	6.1	5.8	350	完形	石英斑岩	片面に摩耗痕が認められる。
3	打製石斧	覆土	7.5	5.4	2.4	132	基部欠損	熱変成岩	両面に自然面を残す。

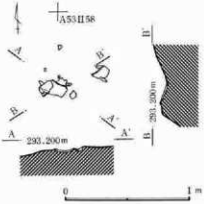
8号土坑

位置 A74-II51Gr　**重複** なし　**平面形態** 隅丸長方形　**規模** 東西1.32m 南北0.86m　**深さ** 64cm

主軸方位 N－55°－E　**備考** 底面は平坦で、立ち上がりは直線的で急である。西壁から南壁にかけて、上端から約40cm下に10cm幅で帯状に焼土が検出され、底面から約5cm上で3カ所から炭化物が検出された。

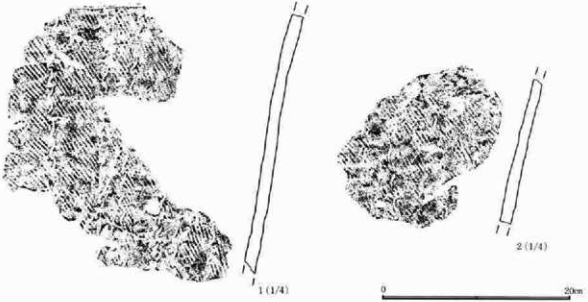
第6節　B区縄文時代

縄文時代の遺構は検出されていないが、A53－II57・58Grからは、縄文土器の比較的大きな破片が検出されており、南東斜面部では全域から縄文土器・石器・剥片等が出土している。



A53－II57・58Gr

縄文時代中期初頭の、深鉢形土器胴部片が出土している。1、2は接合はされていないが、同一個体であると思われる。



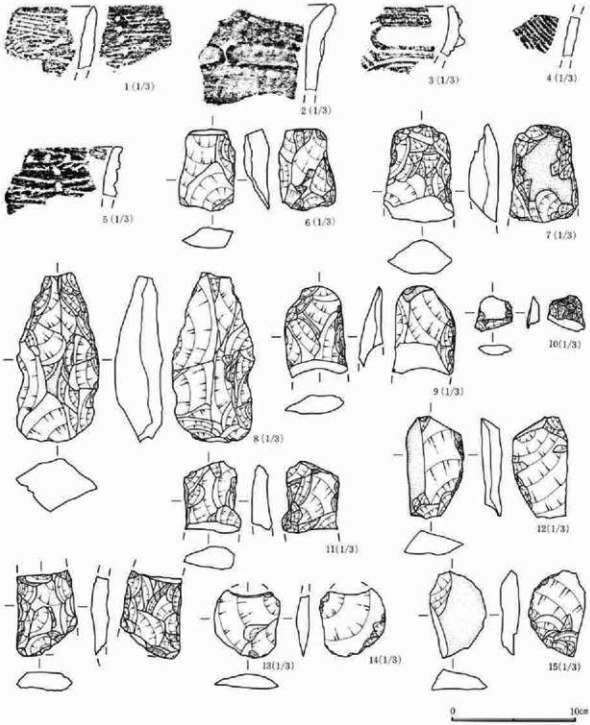
第79図　A54II58グリッド遺物出土状況・出土遺物

B区A54II58グリッド出土遺物観察表

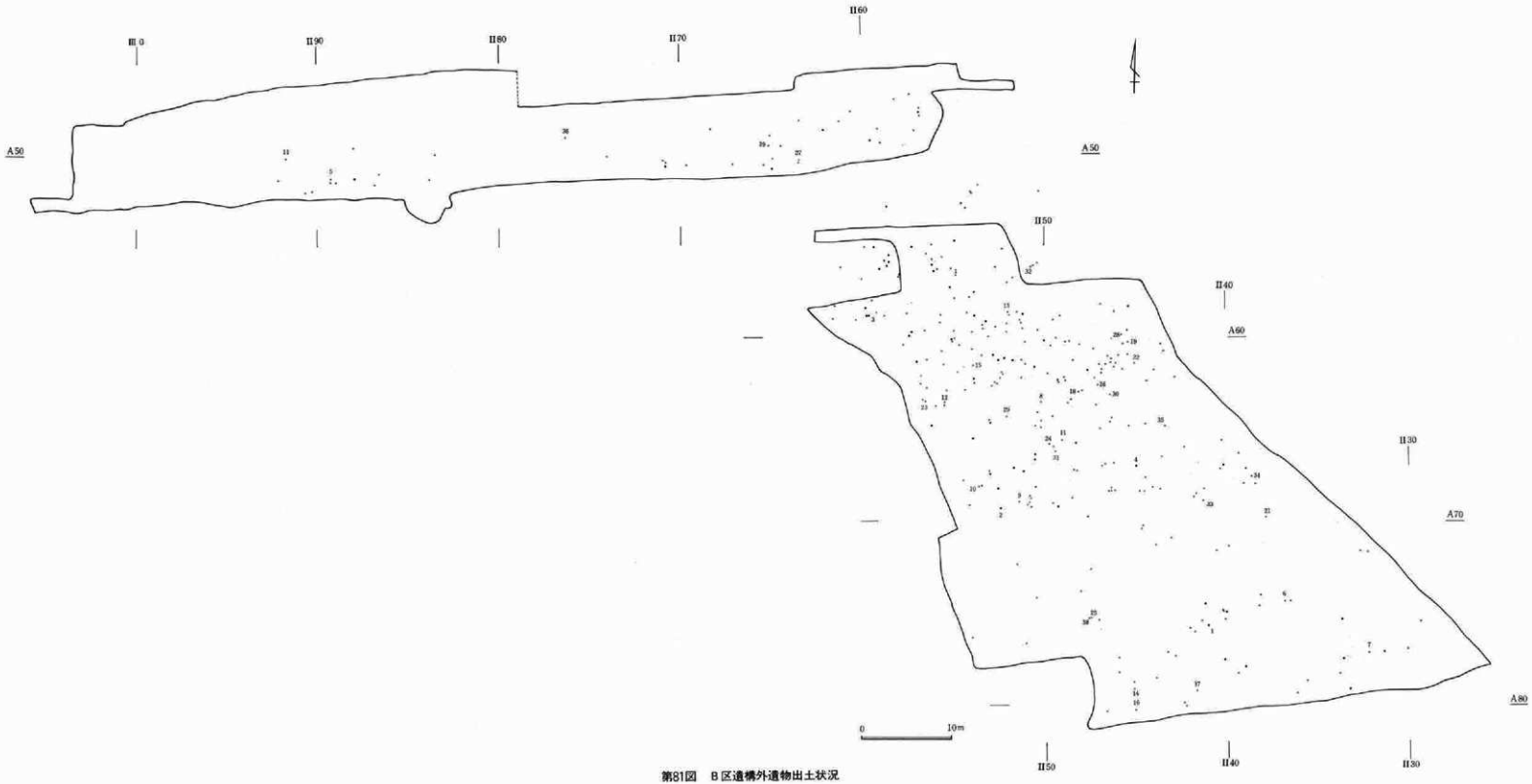
図No.	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	胴部片		①内面・にぶい褐色 外面・赤褐色 ②良 ③中粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。内面は横方向の調整が行われている。	L（$\frac{R}{L}$）の縄文地文の上にR（$\frac{L}{R}$）の結節縄文を縦位に施文。
2	胴部片		①内面・にぶい褐色 外面・赤褐色	1と同一個体	

遺構外出土遺物

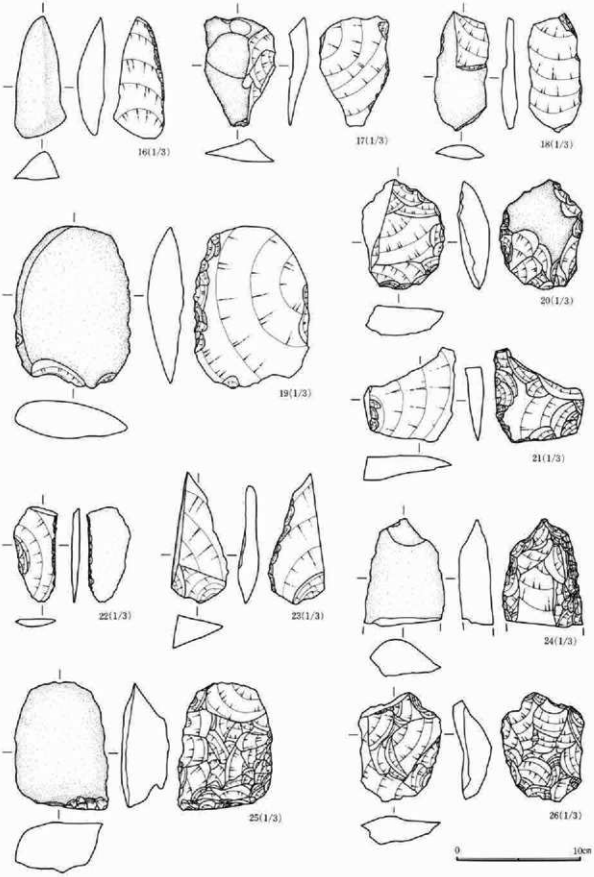
縄文土器が73点（1～5）、石器は、打製石斧が6点（7～11・13）、スクレイパーが21点（6・12・14～29・31・40・41）、石匙が1点（32）、石鏃が2点（33・34）、磨石が5点（35・37・42～44）、黒曜石の原石が1点（36）、コア（？）（30）が1点、剥片等が223点出土し、他に土師器片が4点出土している。1は茅山上層式、2は阿玉台Ⅰa式に、3は中期五領ヶ台式の終末段階に、4は早期稲荷台式期、5は前期花積下層式にそれぞれ比定されよう。



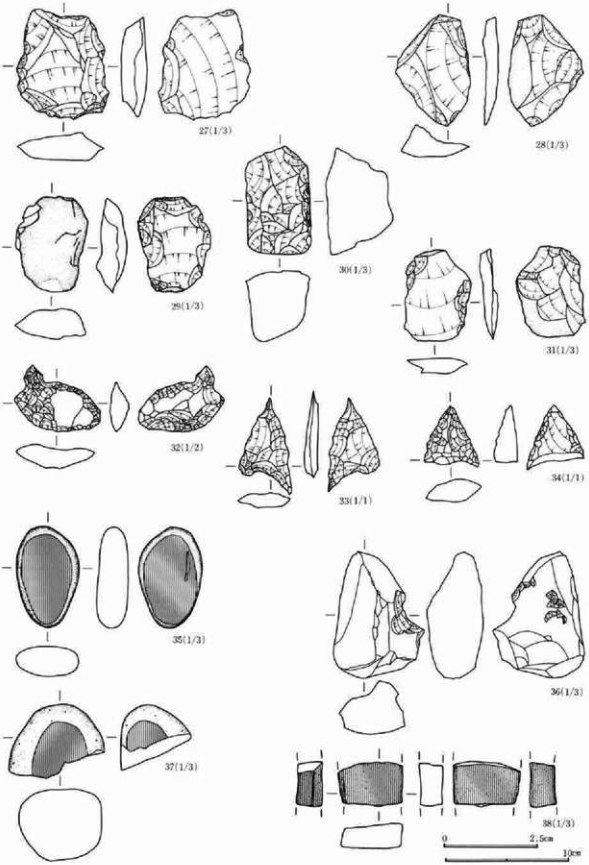
第80図　B区遺構外出土遺物(1)



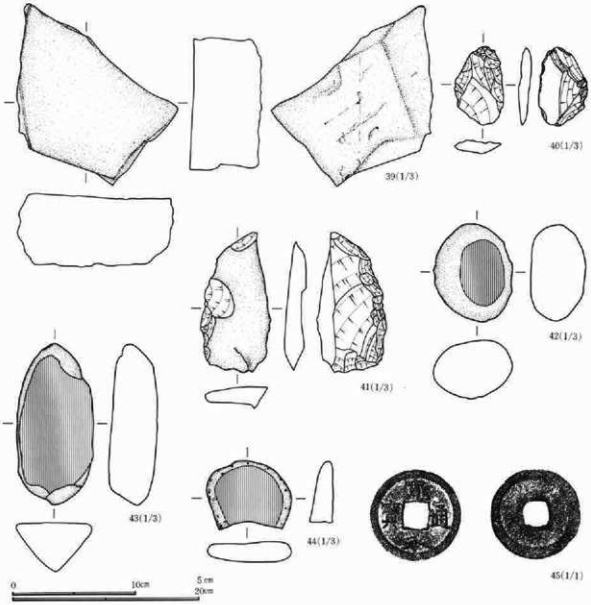
第81図　B区遺構外遺物出土状況



第82図　B区遺構外出土遺物(2)



第83図　B区遺構外出土遺物(3)



第84図　B区遺構外出土遺物(4)

B区遺構外出土遺物観察表

図No	部位	出土位置	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・器面調整の特徴	文様
1	口縁部片	表採	①内外面は赤褐色 ②やや良 ③細粒の砂と繊維を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～11mm。口唇部は先細り。	内外面とも条痕が施されている。外面には竹管による刺突が施されている。
2	口縁部片	A69Ⅱ52	①内面・にぶい黄褐色　外面・にぶい赤褐色 ②良 ③細粒の砂と雲母を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚9～14mm。内面は横方向の調整が行われている。	波状口縁部片。口縁部施文帯の下に斜面三角の文字状隆帯が貼られている。
3	口縁部片	A59Ⅱ60	①内外面はにぶい黄橙色 ②良 ③細粒の砂と雲母を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚5～15mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	口唇部に刻み。口縁部に梅円区画文が施され、結節沈線が施されている。
4	胴部片	A67Ⅱ45	①内外面は灰黄色 ②良 ③細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7～8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	撚あL施文。
5	口縁部片	A51Ⅱ89	①内面・にぶい黄橙色　外面・褐灰色 ②やや良 ③細粒の砂と繊維を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚8～12mm。内面は粗い調整。繊維痕が顕著。	口唇部は平坦。

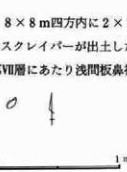
図No	器種	出土位置	量				残存状況	石材	特徴
			目						
			全長	幅	厚さ	重量			
6	スクレイパー	表採	6.5	4.5	1.6	7.3	完形	熱変成岩	端部に自然面を残す。
7	打製石斧	A77Ⅱ32	(7.8)	5.2	2.6	121	刃部欠損	熱変成岩	撥形。片面に自然面を残す。
8	打製石斧	A63Ⅱ50	13.3	6.5	4.2	350	完形	熱変成岩	撥形。片面に一部自然面を残す。

図No.	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
9	打製石斧	A69Ⅱ51	(7.2)	5.2	1.5	67	刃部欠損	熱変成岩	短冊形か。
10	打製石斧	A68Ⅱ54	(2.8)	(3.0)	(0.7)	8.5	刃部欠損	熱変成岩	撥形。片面に自然面を残す。
11	打製石斧	A50Ⅱ92	(5.6)	4.6	1.7	50	刃部欠損	熱変成岩	撥形か。
12	スクレイパー	A63Ⅱ56	8.1	4.5	1.9	65	完　形	熱変成岩	側面に自然面を残す。
13	打製石斧	A59Ⅱ52	(6.9)	4.9	1.4	68	両端部欠	熱変成岩	撥形か。刃部に一部摩耗痕有り。
14	スクレイパー	A71Ⅱ45	5.4	5.3	1.2	31	一部欠損	熱変成岩	
15	スクレイパー?	A61Ⅱ54	6.9	4.5	1.6	55	完　形	熱変成岩?	片面に大きく自然面を残す。
16	スクレイパー	A69Ⅱ45	9.6	4.1	2.2	80	完　形	熱変成岩	片面にほとんど自然面を残す。
17	スクレイパー	A65Ⅱ49	8.7	5.7	1.7	80	完　形	熱変成岩?	片面に自然面を残す。
18	スクレイパー?	A63Ⅱ48	9.4	4.2	1.3	50	一部欠損	熱変成岩	片面に自然面を残す。
19	スクレイパー?	A60Ⅱ45	12.9	9.4	2.9	380	完　形	熱変成岩?	片面に大きく自然面を残す。
20	スクレイパー	A69Ⅱ50	(8.2)	(6.6)	(2.6)	175	一部欠損	熱変成岩	片面に自然面を残す。
21	スクレイパー	A70Ⅱ38	(7.5)	7.3	2.0	80	上半部欠	熱変成岩	自然面を残さず。
22	スクレイパー	A61Ⅱ45	7.5	3.5	0.6	20	完　形	熱変成岩	片面に大きく自然面を残す。
23	スクレイパー	A60Ⅱ49	10.3	4.5	2.6	90	完　形	熱変成岩	側面に自然面を残す。
24	スクレイパー?	A66Ⅱ50	(8.5)	6.4	2.9	190	下部欠損	熱変成岩	片面に大きく自然面を残す。
25	スクレイパー?	A75Ⅱ47	10.1	7.5	3.9	380	完　形	熱変成岩	片面にほとんど自然面を残す。
26	スクレイパー	A62Ⅱ47	8.7	6.6	3.0	145	一部欠損	熱変成岩	自然面を残さず。
27	スクレイパー?	A50Ⅱ63	8.7	7.4	2.3	164	一部欠損	熱変成岩	自然面を残さず。
28	スクレイパー	A60Ⅱ46	8.8	6.0	2.6	100	完　形	熱変成岩	片面に自然面を残す。
29	スクレイパー	A64Ⅱ52	7.5	5.8	2.4	120	完　形	熱変成岩	片面に大きく自然面を残す。
30	(不明)	A63Ⅱ46	8.1	5.3	5.6	335	完　形	熱変成岩	一面のみ加工。片側縁辺部に使用痕有り。
31	スクレイパー	A66Ⅱ49	7.3	5.5	1.4	58	完　形	熱変成岩	片面及び端部に自然面を残す。
32	石　匙	A56Ⅱ51	4.7	3.0	1.0	14	完　形	チャート	横形。
33	石　錐	A69Ⅱ41	2.7	1.4	0.4	0.7	基部欠損	黒曜石	凹基無茎。
34	石　錐	A68Ⅱ40	1.7	1.5	0.6	0.6	基部欠損	黒曜石	欠損のため基部不明。
35	磨　石	A65Ⅱ43	8.0	5.1	2.5	157	完　形	頁岩	両面に摩耗痕が認められる。
36	原　石	A49Ⅱ76	10.1	7.2	4.2	283	完　形	黒曜石	一部に新しい剥離痕が有る。
37	磨　石	A79Ⅱ42	(5.8)	(7.6)	(5.7)	244	下半部欠	石英斑岩	2面に摩耗痕が認められる。
38	砥　石	A75Ⅱ47	(3.5)	5.1	1.9	61	部　分	流紋岩	4面使用されている。
39	石　皿	表採	(14.3)	(12.9)	(5.7)	1100	部　分	砂岩	磨面は片面に有り、わずかにくぼんでいる。
40	スクレイパー	表採	11.0	5.6	1.7	110	一部欠損	熱変成岩	片面に自然面を残す。
41	スクレイパー	表採	6.2	3.8	1.0	23	完　形	熱変成岩	片面に自然面を残す。
42	磨　石	表採	12.8	6.0	3.9	390	完　形	熱変成岩	片面に摩耗痕が認められる。
43	磨　石	表採	7.8	6.3	4.7	285	完　形	頁岩?	片面に摩耗痕が認められる。
44	磨　石	表採	(5.5)	6.8	1.8	88	下部欠損	安山岩	片面に摩耗痕が認められる。

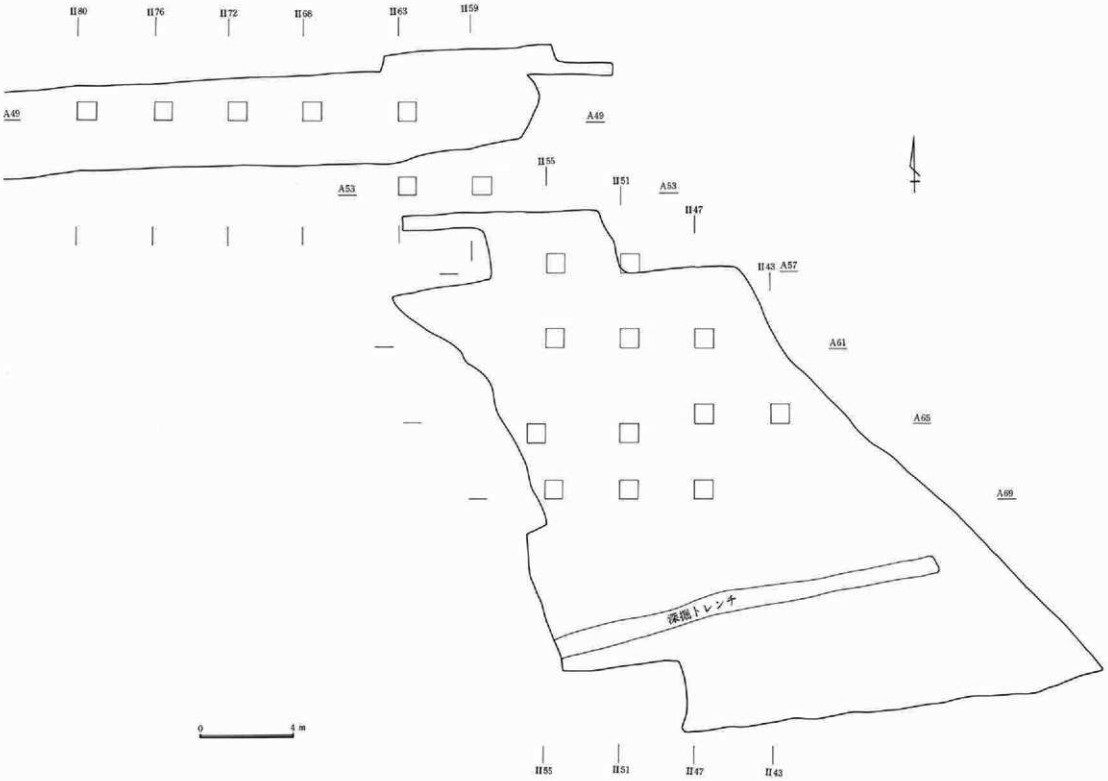
図No.	鉄貨銘	出土位置	量目 径	孔	重量	材質	特徴
45	寛永通宝	表採	2.4	0.6×0.6	2.35	銅	

第7節　B区先土器時代

縄文時代の調査が終了後、B区の東側を中心としたロームの残りの良い部分に、8×8m四方内に2×2mトレンチ1個の割合で試掘したところ、A60－Ⅱ46Grの確認面より1m下からスクレイパーが出土した。出土した層は、砂粒を含む粘性しまりの強いにぶい黄褐色土で、B区基本土層の第Ⅶ層にあたり浅間板鼻褐色軽石層(B.P.)のやや上になっている。このグリッドの上層は、純粋のローム層とは言えず、後世に攪乱されている可能性が高いが、石器出土層までは及んでいないと思われる。石器が出土したため、出土地点の周囲3グリッド四方分拡張し、石器出土面まで一旦掘り下げ、さらに浅間室田軽石層(M.P.)上面まで掘り下げたが、ユニット、礫群等の遺構や石器等の遺物の出土はなかっ



第85図　旧石器出土状況

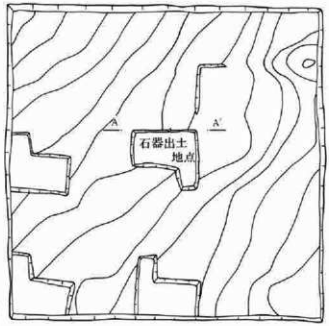


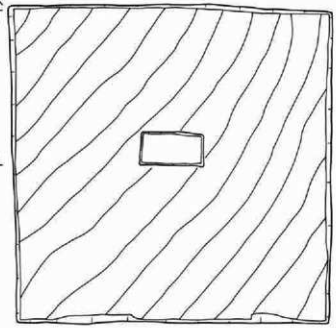
第86図　プレ試掘トレンチ位置図

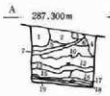
た。また、他グリッドからも遺構・遺物は出土していない。

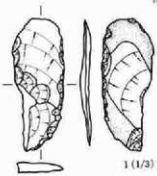
石器は、スクレイパーで、基部を一部欠損するが、それほど大きなものではない。片面に3分の1ほど自然面を残している。使用石材は熱変成岩で、縄文時代の石器の主要な石材と同じである。

1　暗褐色土　ロームブロック含む。しまり弱い。
2　褐色土　暗褐色土ブロック含む。
3　褐色土　しまり強い。
4　明褐色土　黒褐色土ブロックを含む。
5　明褐色土　Y.P.・砂粒を微量含む。
6　褐色土　砂粒を含む。
7　明褐色土　Y.P.・砂粒・炭化粒子を含む。
8　明黄褐色土　Y.P.を含む。しまり弱い。
9　明黄褐色土　Y.P.を多く含む。
10　明褐色土　炭化粒子を多量、Y.P.を微量含む。
11　明黄褐色土　B.P.・砂粒・炭化粒子を含む。
12　にぶい黄褐色土　砂粒を含む。
13　にぶい黄褐色土　B.P.層。
14　明赤褐色土　M.P.層。
15　黄褐色土　M.P.を多く含む。
16　灰色土　砂粒を多量に含む。
17　灰色土　砂粒を含む。粘性強い。
18　黄褐色土　砂粒を多量に含む。粘性強い。
19　暗オリーブ色土　粘性強い。









第88図　A60Ⅱ46グリッド出土旧石器

第87図　旧石器試掘拡張区

A60Ⅱ46グリッド出土遺物観察表

図No.	器種	出土位置	量目				残存状況	石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量			
1	スクレイパー	A60Ⅱ46	10.5	4.2	0.9	43	一部欠損	熱変成岩	片面に自然面を残す。

第Ⅳ章　塩之入城遺跡

第1節　遺跡の概観

塩之入城遺跡は、野上塩之入遺跡B区から谷津を隔てた西側に位置している。調査区の北側および西側は急崖になり、北西隅の平坦面から南東に広がる緩斜面を利用して城郭を築いている。遺構としては、中世城郭跡の他に古墳が1基検出されている。城郭は、北西隅の平坦面を主郭とし、他に曲輪と思われる平坦面が6カ所検出された。主郭部からは、虎口遺構と思われる樹形状の石組や炭化材を出土した土坑が検出されているが、他の曲輪も含めて建物跡は検出されなかった。古墳は山寄せの後期古墳であるが、城郭築造により大きく削平されている。

第2節　中　　近　　世

塩之入城跡

主郭部（曲輪1）と曲輪が6カ所で検出されている（曲輪2～7）。調査区北西部の平坦面が主郭部となっており、曲輪2・3・7は主郭の東に、曲輪4は南に、曲輪5・6はその間に、階段状に続いて位置している。城の東西は、主郭部西端から曲輪7東端までが55mで、調査区東端までが78m、南北は調査区範囲内だけで35mで、更に南へと続いており、70mほどはあると思われる。虎口と推定されるのは主郭南西隅の部分で、石を樹形状に配置し、その下方に階段状に石を組んである。主郭北東部には土坑が検出されている。覆土上層には浅間A軽石を混入するため、近世のものとも考えられるが、狭い丘陵頂部に位置し、覆土の堆積が非常に遅いという点を考慮するならば、城郭に伴う可能性もあると思われる。

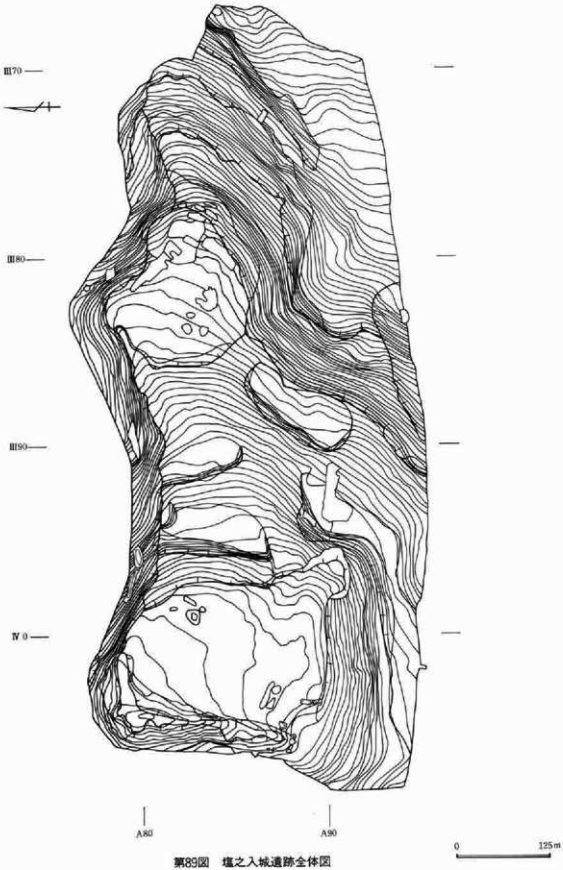
曲輪1

位置　調査区北東部　A78～92－Ⅲ95～Ⅳ6Gr　　**規模**　東西18.5m　南北23.5m（虎口階段部は含まず）

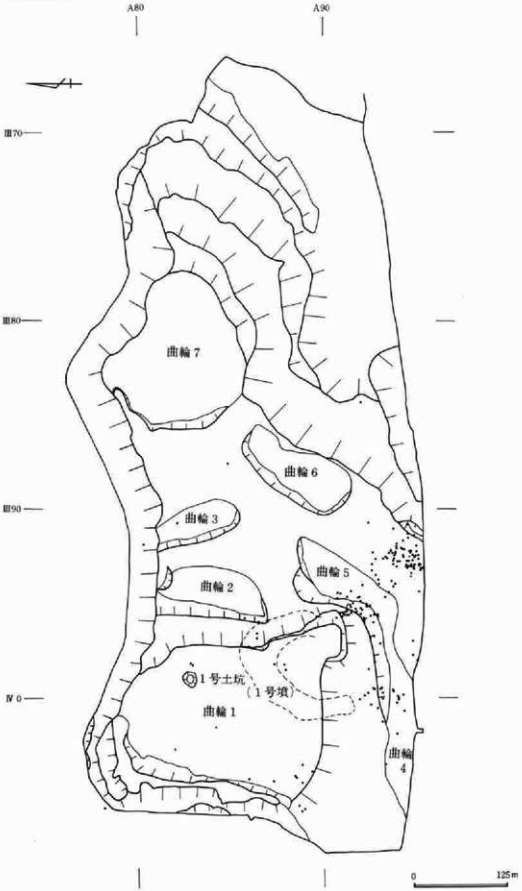
平面形態　くずれた長方形

概要　塩之入城の主郭となる曲輪である。曲輪底面は南西に向かってわずかに傾斜しているが、標高差約1mでほぼ水平な面と言える。北辺部から西辺部の北側にかけて、土塁状の高まりがみられる。地山の岩盤が露呈しており、盛り土をしたものではないが、土塁として機能していた可能性は高い。南西隅には、一部東西・南北に配置した切石が残り、石のない部分も1段下がっていて、樹形状になった部分が検出され、その下方の斜面下には、階段状に石を組んだ痕跡が確認できたため、虎口と考えて間違いないと思われる。南東隅部には1号墳があるが、築城の際に破壊されており、石室の石が一部露呈している。虎口部の石は石室の石を転用していると思われる。北東部には、炭化材が出土した1号土坑がある。建物跡は検出されなかった。

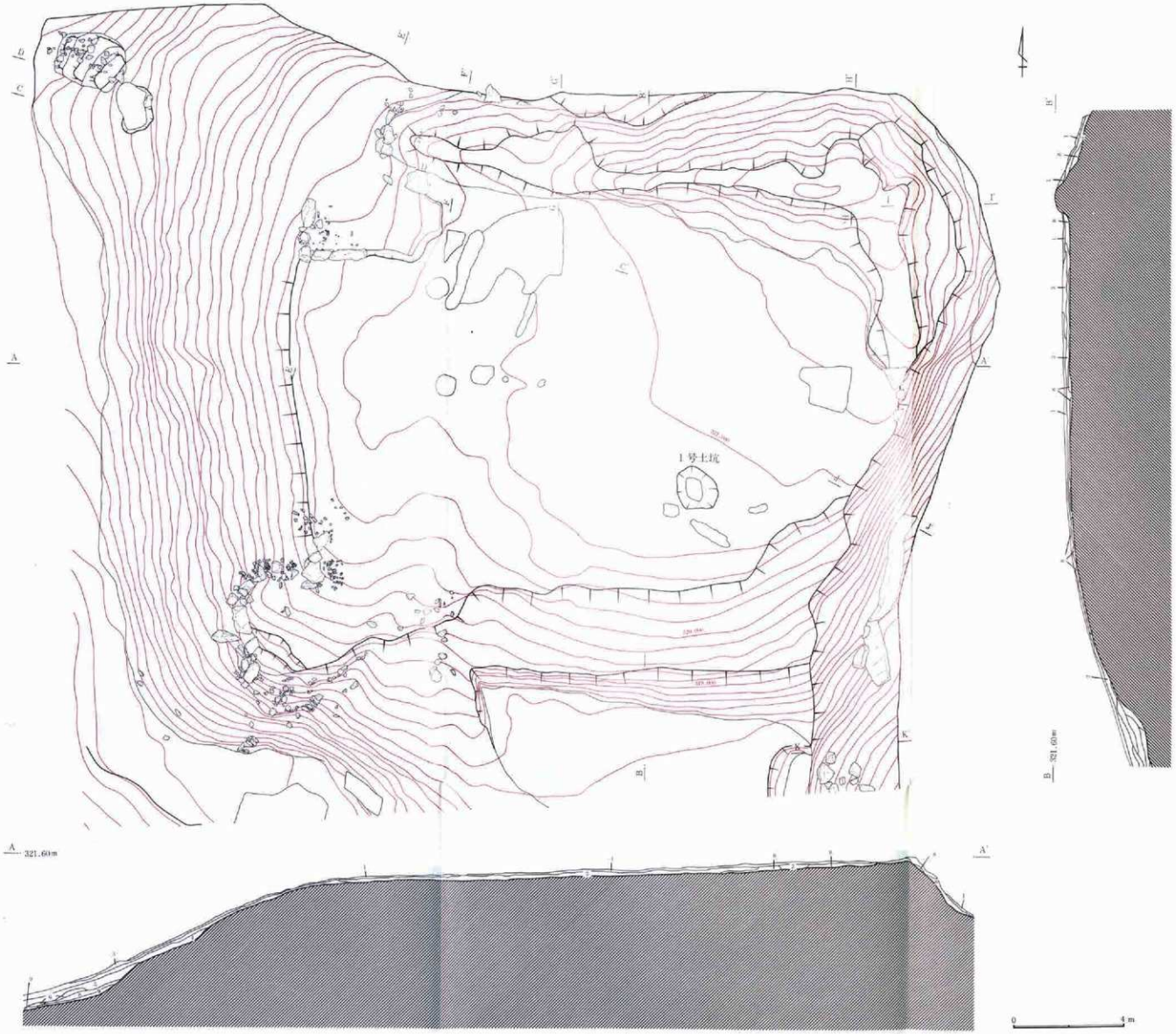
所見　1号土坑は覆土上層に浅間A軽石を含むため、この部分が埋没したのは1783（天明3）年以降である。しかし、覆土中層以下には浅間A軽石を全く含まないため、埋没したのもA軽石降下以前で、しかも丘陵頂部に位置し、埋没の速度が非常に遅い事を考えるならば、城と同時に存在していた可能性もある。覆土中から炭化材が出土しており、ここで火を焚いた痕跡があるため、烽火台としての機能を有していたと考えることができよう。



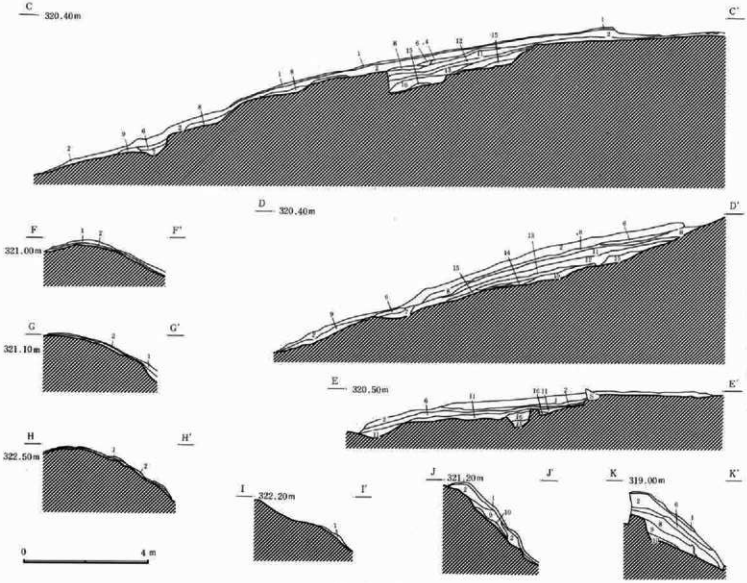
第89図　塩之入城遺跡全体図



第90図　塩之入城曲輪呼称図

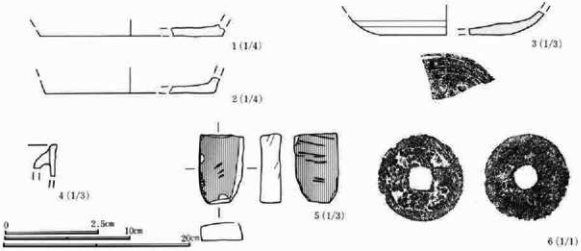


第91図 曲 輪 1



1 黒褐色土　腐葉土。A軽石を含む。
2 褐色土　A軽石を含む。
3 黄褐色土　A軽石・砂礫を含む。
4 褐色土　A軽石を含む。しまり弱い。
5 黄褐色土　砂礫を含む。しまり弱い。
6 暗褐色土　A軽石を多量に含む。
7 褐色土　A軽石を含む。しまり強い。
8 黄褐色土　砂粒を含む。
9 明褐色土　しまり強い。
10 黄褐色土　しまり弱い。
11 暗褐色土　礫岩の風化砂粒を多く含む。
12 暗赤褐色土　二次堆積ロームが赤色化したもの。
13 暗赤褐色土　12層にB.P.を含む。
14 灰黄褐色土　B.P.を含む。粘性強い。
15 灰黄褐色土　B.P.を微量含む。粘性強い。
16 明黄褐色土　ロームをベースとする。

第92図　曲輪1セクション図



第93図　曲輪１出土遺物

曲輪１出土遺物観察表

図No	種別 器種	出土位置	量目 (cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	軟質陶器 土鍋	A87IV 4 A88IV 6	①—　②— ③—　④底部1/6	①にぶい橙色　②酸化焔？やや硬 ③砂粒・パミスを含む。	外面調整不明。内面ロクロ調整。
2	軟質陶器 土鍋	A88IV 4 A88IV 5	①—　②— ③—　④底部1/8	①にぶい橙色　②酸化焔？やや硬 ③砂粒・パミスを含む。	外面調整不明。内面ロクロ調整。
3	須恵器 坏	A89IV 5	①—　②(10.4) ③(1.5)　④底部1/4	①灰白色　②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	ロクロ調整。底部回転糸切り。
4	軟質陶器 内耳鍋	A88IV 6 A82III90	①—　②— ③—　④口縁部	①灰黄灰色　②酸化焔？やや硬 ③砂粒・雲母を含む。	内外面とも擦で。内面に内耳を貼り付けている。

図No	器種	出土位置	数目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
5	砥石	表採	5.5	3.6	1.7	50	完形	流紋岩	4面に使用されており、研き面に一部キズ有り。

図No	銭貨銘	出土位置	量目 径	孔	重量	材質	特徴
6	不明	A89IV 6	2.3	0.6×0.6	1.8	銅	

１号土坑

位置　曲輪１北東部　A82・83－III98・99Gr　**重複**　なし

平面形態　楕円形　**規模**　東西1.56m　南北1.58m

深さ　66cm　**主軸方位**　N－9°－W

備考　底面は平坦で、立ち上がりは傾斜しているが直線的である。中央部から炭化材が出土している。

出土遺物　土師質土器皿片が１点出土している。

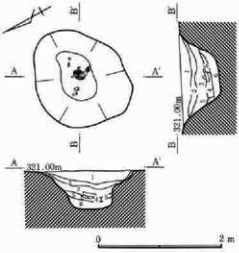
曲輪２

位置　曲輪１東側　A80～86－III93～96Gr

平面形態　長方形で東側は丸みを帯びる。

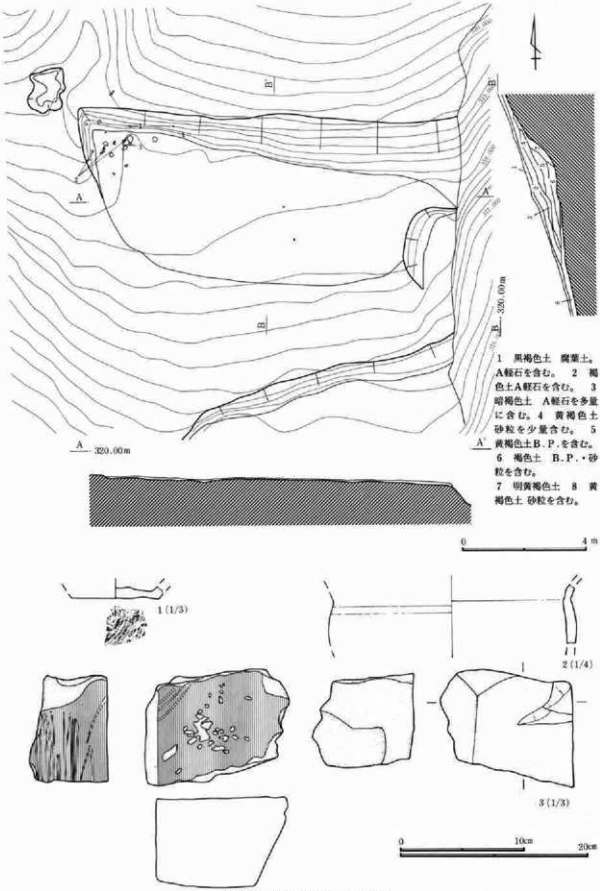
規模　東西6.0m　南北12.0m　**壁高**　100cm

概要　曲輪底面は東に向かってわずかに傾斜しているが（標高差40cm）、ほぼ水平と考えてよいであろう。南西隅は丸みがなくほぼ直角に曲がっており、この付近に遺物が集中する。北東部に径２m程の掘り込みがあるが、性格は不明である。



1　黄褐色土　A軽石を多量に含む。　2　にぶい黄褐色土　A軽石を少量含む。　3　黄褐色土　砂粒を含む。　4　木炭層　5　にぶい黄橙色土　砂粒を多く含む。　6　黄褐色土　砂粒を微量含む。しまり強い。

第94図　１号土坑



第95図　曲輪2および出土遺物

曲輪２出土遺物観察表

図No	種別器種	出土位置	量目(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	土師質土器 坏	A84III96	①— ②(7.0) ③— ④底部1/4	①にぶい橙色 ②酸化焔、硬 ③砂粒を含む。	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。
2	軟質陶器 土鍋	A86III96	①— ②— ③— ④胴部1/5	①灰色 ②還元焔、やや硬 ③砂粒を含む。	ロクロ調整。

図No	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
3	砥石	A86III95	7.8	10.6	7.1	750	1部欠損	砂岩	2面使用されており、研ぎ面にキズ有り。

曲輪３

位置　曲輪２東側

A80～85－III79～92Gr

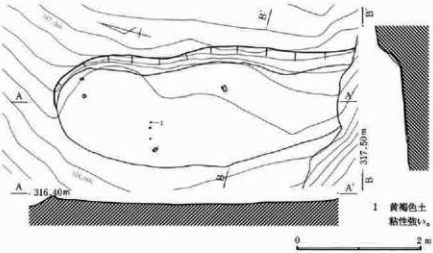
平面形態　長方形で南側は丸みを帯びる。

規模　東西4.8m

南北9.5m

壁高　80cm

概要　曲輪底面は、東に向かってわずかに傾斜している（標高差20cm）が水平に近い。壁は傾斜しているが、直線的に立ち上がっている。遺物は少ないが、１の青磁を含めて、中央やや南よりに集中している。



第96図　曲輪３および出土遺物

曲輪３出土遺物観察表

図No	種別器種	出土位置	量目(cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
1	青磁 皿	A83III91	①(12.8) ②— ③(2.2) ④口縁部片	①オリーブ灰色 ②還元焔、硬 ③夾雑物を含まず。	器厚3.5～5mm。

曲輪１～３出土遺物

曲輪１　土器は、土師質土器片が５点、土師器甕片が７点、土師器坏片が２点、須恵器坏片が２点（３他）、陶器片が１点、軟質陶器（土鍋）片が５点（１・２・４他）、計22点、他に砥石が１点（５）、銅銭（銭貨名不明）が１点（６）出土している。

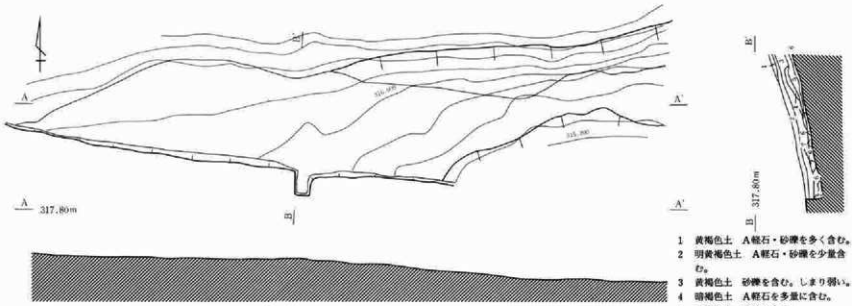
曲輪２　土師質土器片が１点（１）、軟質陶器（土鍋）片が６点（２他）、計７点、他に砥石が１点（３）、出土している。

曲輪３　土師質土器片が３点、土師器甕片が１点、土師器坏片が１点、青磁皿片が１点（１）出土している。

曲輪４・５

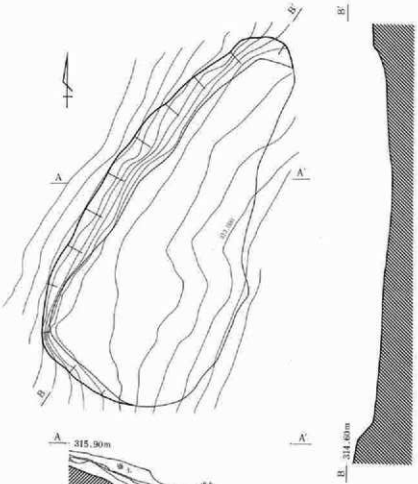
曲輪４と曲輪５は連続した１つの平坦面からなっており、本来は１つの曲輪とすべきであるが、東西に長くしかも途中で折れているため２つの曲輪として扱った。

曲輪４



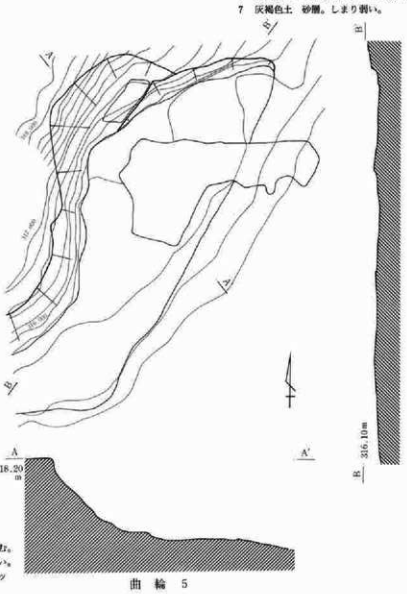
1 黄褐色土　A軽石・砂礫を多く含む。
2 明黄褐色土　A軽石・砂礫を少量含む。
3 黄褐色土　砂礫を含む。しまり弱い。
4 暗褐色土　A軽石を多量に含む。
5 黄褐色土　砂粒を含む。
6 明褐色土　砂粒を含む。しまり弱い。
7 灰褐色土　砂層。しまり弱い。

曲輪 4

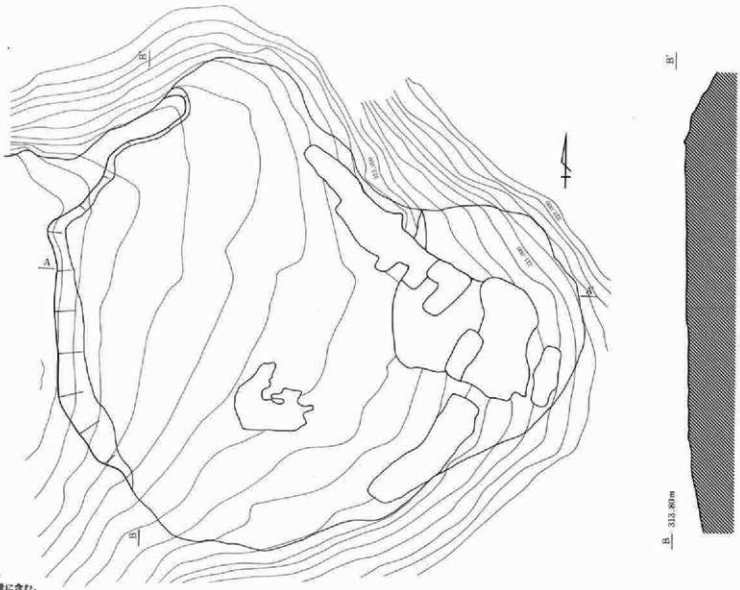


1 暗褐色土　A軽石を含む。
2 黒褐色土　A軽石を含む。
3 黒褐色土　A軽石を多量に含む。
4 明黄褐色土　粘性・しまり強い。
5 黄褐色土　ハードロームブロックを含む。

曲輪 6



曲輪 5



1 褐色土　A軽石を含む。
2 暗褐色土　A軽石を多量に含む。
3 褐色土　A軽石を含む貯蔵穴覆土。
4 黄褐色土　ロームをベースとしB軽石を含む。しまり弱い。
5 暗褐色土　B軽石を含む。しまり弱い。
6 黄褐色土　砂粒を含む。

曲輪 7

0　4m

第97図　曲輪4・5・6・7

位置　曲輪1の南側　A92～94－Ⅲ96～Ⅳ6 Gr　**平面形態**　調査区外へ続くため形態は不明
規模　東西21.0m　南北4.0m（調査区内のみ）
概要　曲輪1の南側に位置するが、曲輪1との標高差は4m以上あり北側は急斜面となっている。南側は調査区外であるがさらに6m程続いていると思われる。東側は曲輪5に続いている。南に向かってやや傾斜しているが、さらに南に続くためかなり水平に近い面になると思われる。

曲輪5

位置　曲輪1の南東　A88～93－Ⅲ91～96Gr　**平面形態**　くずれた三角形
規模　東西5.5m　南北6.3m
概要　西側の曲輪4から続いており、曲輪1の南東隅下で北側に折れているが、この部分を曲輪5とする。曲輪1との標高差は4m以上ある。北西は曲輪1から続く急斜面となっているが、曲輪底面は比較的水平である。

曲輪6

位置　曲輪5東側　A85～92－Ⅲ85～90Gr　**平面形態**　胴の張った隅丸長方形
規模　東西3.2m　南北6.3m　**壁高**　100cm
概要　調査区中央部の、緩斜面から急斜面へ傾斜が変わる地点に位置しており、東側が緩斜面、西側が急斜面となっている。曲輪底面は西に向かって傾斜しており、標高差は50cmとかなり大きい。

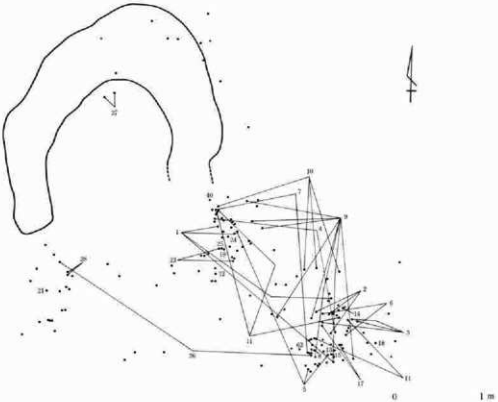
曲輪7

位置　曲輪3東側　A78～86－Ⅲ77～85Gr　**平面形態**　不正円形　**規模**　東西16.5m　南北15.5m
概要　調査区中央西側、調査区内の曲輪中もっとも東に位置する。曲輪底面は東に傾斜しており、標高差は2.5mと非常に大きく、他の曲輪に比べ、水平があまり意識されていない。東部は、近現代の貯蔵穴によりかなり壊されている。曲輪の北側は急斜面になっているが、曲輪底面から1m程下の斜面上から石組が検出された。城に関係する施設の可能性があるが、この地点以外から検出されていないため、性格は不明である。

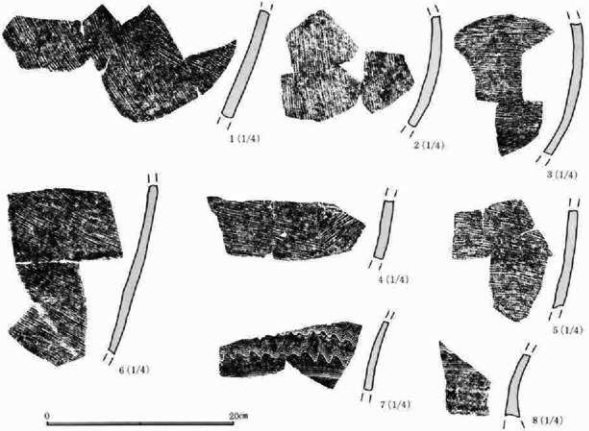
テラス8

曲輪7のさらに東側、調査区の東端部に比較的平坦な面があったため、テラス8としてトレンチ調査を行ったが、曲輪となるような面は検出されなかった。塩之入城の主郭部周辺の曲輪は、曲輪7が最も東に位置しており、それ以東にはないことが判明した。

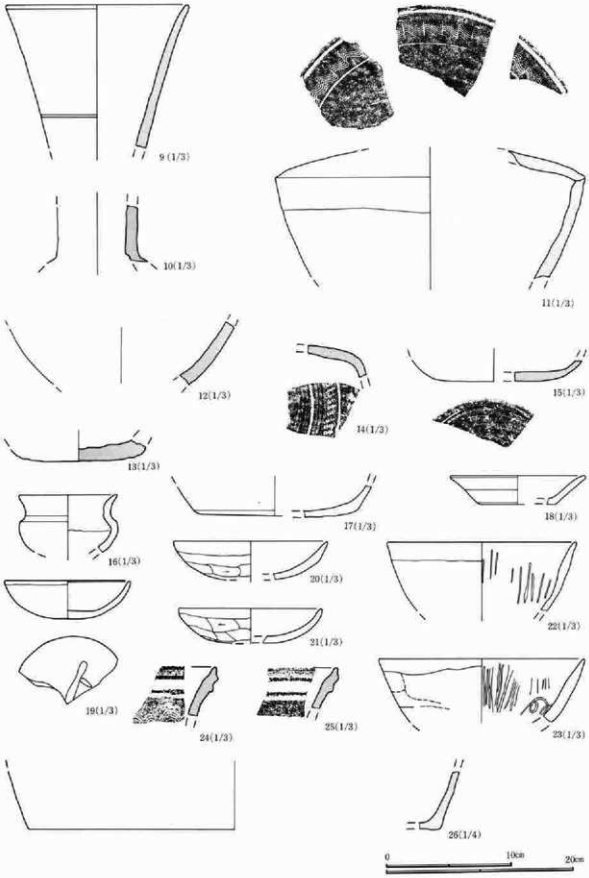
1号墳周辺出土遺物　曲輪4～7からは、遺構に伴う形での遺物の出土はなかった。しかしながら、曲輪4・5周辺の覆土上層からは、1号墳からの流入と思われる遺物が多量に出土している。
土器は土師器甕片が5点、土師器坏片が21点（17・19～23他）、土師器小型壺片が2点（16）、須恵器甕片が57点（1～8・24・25他）須恵器瓶片が23点（9～14他）、須恵器坏片が1点（15）、土師質土器片が7点（18他）、陶器片が3点（27他）、軟質陶器片が8点（26・28他）、磁器片が2点、計129点、他に砥石が2点（31・33）、打製石斧が1点（29）、スクレイパーが1点（30）、石錐（？）が1点（32）、剝片等が6点出土している。



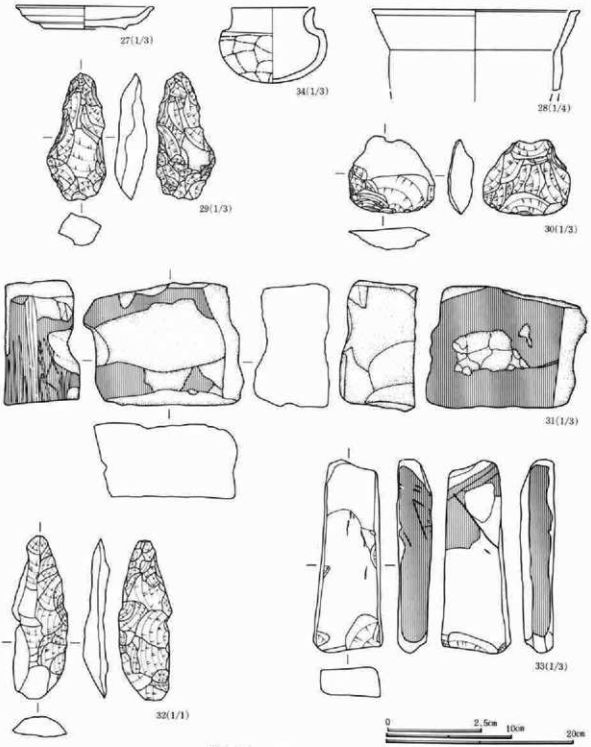
第98図　1号墳周辺遺物出土状況



第99図　1号墳周辺出土遺物(1)



第100図　1号墳周辺出土遺物(2)



第101図　1号墳周辺出土遺物(3)

1号墳周辺出土遺物観察表

図No.	種別 器種	出土位置	量目 (cm)	①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③粘土	成形・調整の特徴
1	須恵器 甕	A92Ⅲ92 他	①— ③(11.8)	②— ④胴部	①暗青灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き、内面篦撫で。器厚13～14mm。
2	須恵器 甕	A93Ⅲ92 A94Ⅲ92	①— ③(11.9)	②— ④胴部	①灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き、自然釉付着。内面篦撫で。器厚9～11mm。
3	須恵器 甕	A93Ⅲ91 A94Ⅲ92	①— ③(13)	②— ④胴部	①灰色 ②還元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き、自然釉付着。内面撫で。3・5と同一個体か。器厚9～11mm。

図No	種別 器種	出土位置	量目 (cm) ①口径 ②底径 ③器高 ④残存	①色調 ②焼成 ③胎土	成形・調整の特徴
4	須恵器 甕	A94III92 A91III95	①— ③(6.2)	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き、内面荒撫で。器厚10mm。
5	須恵器 甕	A94III92 A91III95	①— ③(9.8)	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き、自然釉付着。内面撫で。3・6と同一個体か。器厚9～10mm。
6	須恵器 甕	A93III92 A91III95	①— ③(17.8)	②— ④胴部	①暗青灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面平行叩き、内面荒撫で。1と同一個体か。器厚8～11mm。
7	須恵器 甕	A94III92 A91III95	①— ③(7.2)	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面波状文2段の下に平行沈線文1段。内面撫で、自然釉付着。器厚6～9mm。
8	須恵器 甕	A94III92	①— ③(6.6)	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面波状文の下に平行沈線文1段。内面撫で。7と同一個体か。器厚8～15mm。
9	須恵器 長頸瓶	A93III92 他	①(14.4) ③(11.4)	②— ④口縁部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を少量含む。	内外面ともロクロ調整。10・11と同一個体か。
10	須恵器 長頸瓶	A92III93 他	①— ③(4.5)	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	内外面ともロクロ調整。外面に自然釉付着。9・11と同一個体か。
11	須恵器 長頸瓶	A93III92 他	①— ③(10.2)	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	内外面ともロクロ調整。胴部に波状文。胴部に自然釉付着。
12	須恵器 長頸瓶	A93III93	①— ③(5.8)	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	内外面ともロクロ調整。外面に一部自然釉付着。
13	須恵器 長頸瓶	A94III92	①— ③—	②(9.0) ④底部1/3	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	内外面とも撫で。貼り付高台が剥がれている。
14	須恵器 長頸瓶	A93III92	①— ③—	②— ④胴部	①灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	内外面ともロクロ調整。
15	須恵器 坏	A94III92	①— ③—	②— ④底部1/6	①灰白色 ②遺元焔、やや硬 ③砂粒を含む。	内外面ともロクロ調整。底部回転糸切り。
16	土師器 小形壺	A94III93	①(7.8) ③(4.5)	②— ④口～胴1/3	①にぶい褐色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を少量含む。	口縁部横撫で。体部外面荒削り、内面撫で。
17	土師器 坏	A94III92	①— ③—	②— ④底部1/3	①橙色 ②酸化焔、やや軟 ③砂粒・白色粒子を含む。	摩滅により調整痕不明。外面荒削り、内面撫で か。
18	土師質土器 坏	A94III91	①(10.9) ③2.25	②(6.0) ④1/8	①にぶい黄橙色 ②酸化焔、硬 ③砂粒・雲母を含む。	内外面ともロクロ調整。底部回転糸切り無調整。
19	土師器 坏	A92III95	①(10.0) ③3.0	②(6.0) ④2/3	①にぶい橙色 ②酸化焔、硬 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部外面荒削り、内面撫で。底部に指頭による沈線有り。
20	土師器 坏	A90III95	①(12.4) ③(3.0)	②(7.0) ④1/5	①橙色 ②酸化焔、やや軟 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部～底部外面荒削り、内面撫で。
21	土師器 坏	A93IV 0	①(11.4) ③(2.7)	②(6.5) ④1/5	①橙色 ②酸化焔、やや軟 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部～底部外面荒削り、内面撫で。
22	土師器 坏	A92III95	①(15.0) ③(5.4)	②— ④1/8	①橙色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部外面荒削り後磨き、内面撫で、放射状暗文有り。
23	土師器 坏	A92III95	①(16.6) ③(5.0)	②— ④1/8	①橙色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を含む。	口縁部横撫で。体部外面荒削り、内面撫で。内面上部に放射状暗文、下部に螺旋状暗文。
24	須恵器 甕	A91III95	①— ③(3.9)	②— ④口縁部	①暗青灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	外面に波状文あり。
25	須恵器 甕	A92III95	①— ③—	②— ④口縁部	①暗青灰色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	24と同一個体。
26	軟質陶器 土鍋	A94III92 A92III99	①— ③(6.7)	②(43.6) ④胴～底	①黄灰色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を含む。	内外面とも撫で。外面に煤付着。
27	陶器 鍋	A87III98 A88III98	①(11.0) ③1.8	②6.3 ④2/3	①浅黄色 ②遺元焔、硬 ③砂粒を含む。	ロクロ調整。体部下半荒削り。底部削り出し高台。
28	軟質陶器 土鍋	A92III99	①(12.2) ③—	②— ④口縁部	①灰黄色 ②遺元焔、やや硬 ③砂粒・雲母を含む。	
34	土師器 小形壺	A91III96	①6.8 ③5.9	②4.0 ④3/4	①橙色 ②酸化焔、やや硬 ③砂粒を微量含む。	口縁部横撫で。胴部外面荒削り、内面撫で。底部荒削り。

図No	器種	出土位置	量目 全長	幅	厚さ	重量	残存状況	石材	特徴
29	打製石斧	A94III93	10.1	3.5	2.5	115	完形	熱変成岩	撥形。片面に自然面を残す。
30	スクレイパー	A87III88	6.0	6.8	2.0	80	完形	熱変成岩	片面に自然面を残す。
31	砥石	A81IV 2	9.7	12.8	6.0	850	完形	流紋岩	2面及び端部が一部使用されている。
32	（不明）	表採	4.3	1.5	0.7	3.8	先端部欠	黒曜石	片面に一部自然面を残す。
33	砥石	A87III88	15.3	5.5	2.8	378	完形	流紋岩	3面使用されており、研ぎ面に一部キズ有り。

第3節　古　墳　時　代

1号墳

位置　A86～91－Ⅲ95～Ⅳ1Gr　**重複**　塩之入城築城により墳丘上部および古墳南部を削平される。

規模　周堀外周径東西12.5m　墳丘径8.2m　削平のため南北長は不明

墳丘　築城により削平されほとんど残っていないが、奥壁北側に一部古墳築造時の盛り土（ロームをベースとした暗褐色土および黄褐色土）が残っている。

周堀　築城により南部は削平されており、全周していたか陸橋があったかは不明である。北半分のみ残っているが、西側で上端幅3.0m、下端幅0.6m、深さ130cm、北側で上端幅4.1m、下端幅0.6m、深さ130cm、東側で上端幅2.7m、下端幅0.7m、深さ80cmとなっており、北側で最も広くなっている。東側の周堀外側も削平され、ほとんど残っていない。断面形は上部の広がるU字形を呈するが、北側周堀は、外側の立ち上がりに比べ墳丘側の立ち上がりがかなり急になっている。

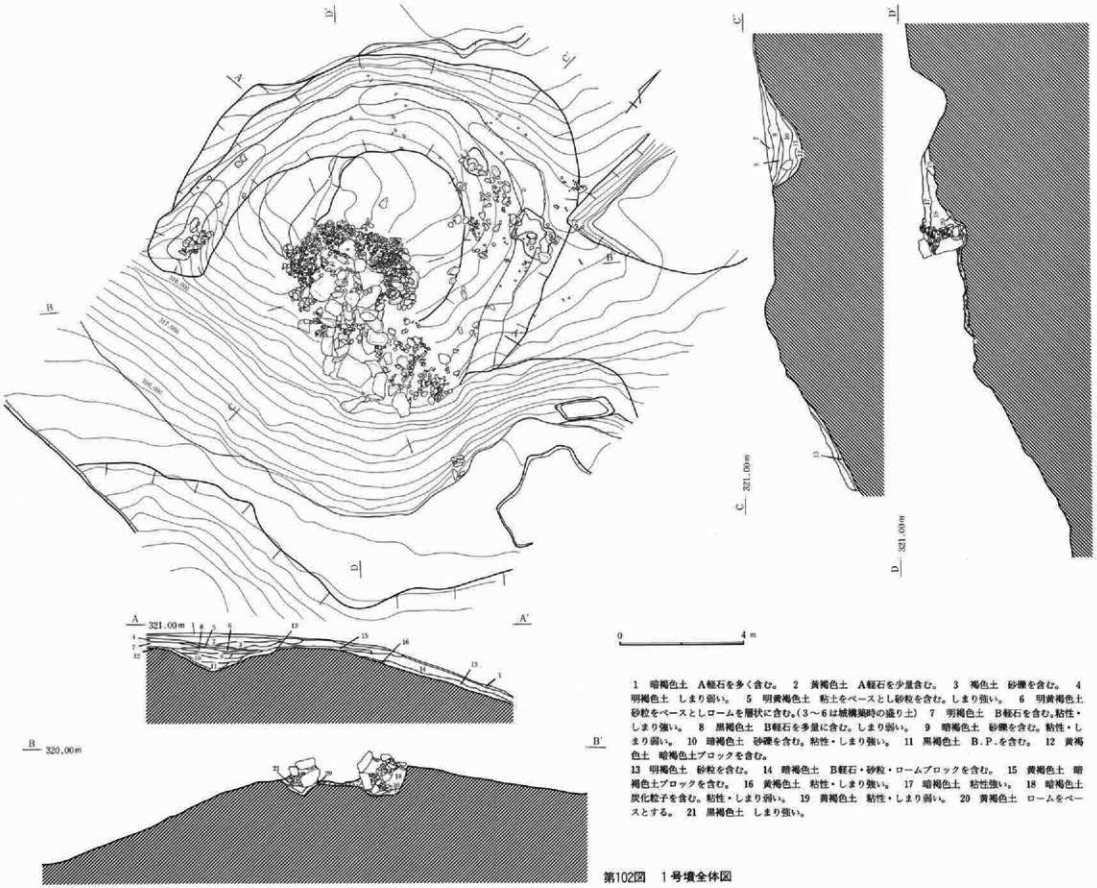
主体部

横穴式石室であるが、前庭部および閉塞部と、羨道部の大半は失われて、玄室のみ残存しているが、天井部、壁上部は削平されている。北側ほど残りが良く、奥壁は115cmあるが、南側は大きく削平されており羨道部は約40cmの基底の石を残すのみである。壊された石材の破片は、石室上部から多量に出土している。羨道部は大部分削平されているが、南側の３石が直線的に並び、玄室壁のラインよりも内側のラインとなるため、羨道左壁の基底の石と考えてよいと思われる。右壁がすべて削平され左壁の一部だけが残ったものであろう。石室の規模は、現存長4.1mで、玄室部の長さは約1.8m、幅は奥壁で1.8m、前部で1.5mであり、羨道部は、現存長2.3mである。主軸方位はN－28°－Wを示す。

玄室　天井部および壁上部は失われているため不明であるが、残存する壁体には大部分地山岩盤の神農原礫岩の割石を使用している。奥壁では、左側に幅60cm長さ90cmの石を縦に立て、右側は幅120cmの石の上に幅70cmと30cmの石を積み、さらにその上に幅70cmの石を横んで、隙間を小礫で埋めている。左壁は、幅120cmと70cmのものを並べ、その上に幅60cm程度のものを積んでいる。その南側は石が抜き取られており、羨道部との境界がはっきりしていない。右壁は下に幅170cm高さ20cmの石を据え、その上にやや小振りのものを積んでいる。さらに南に続く可能性もあるが、削平されてしまい残っていない。天井石は失われているが、奥壁手前に崩落したものが検出されている。壁石と同様に神農原礫岩を使用しているため、天井部も含めて石室の石材はほとんど神農原礫岩の割石を使用していたと考えられる。床面は、小礫を多量に含む暗褐色土を貼って作られており、礫岩の割石がまばらに含まれているが、明確に石を敷いた形跡はなかった。床上面から、鉄鏃が21点出土しているが、玄室北西部、奥壁手前左側に集中している。

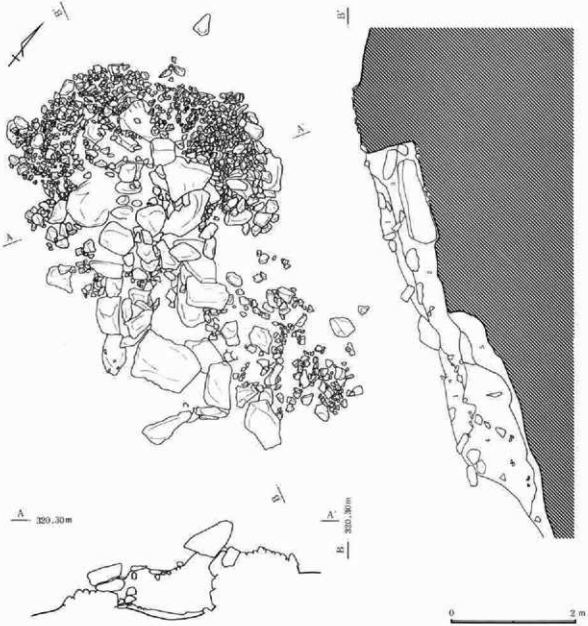
羨道部　左壁の基底の３石だけが残っている。北側にもう１石あった痕跡があるが、ちょうど玄室との境界の部分で、石が抜き取られているため境界がはっきりしていない。玄室の石は１m程度の大型のものが多く、板状で面の平らなものが多いが、羨道部のものは小振り（50cm程度）で不定形のものを使用している。３石は直線的に並ぶが、このラインは玄室左壁のラインに比べやや東に振れている。

裏込め　奥壁から左右の壁にかけて、壁体の裏に径５～10cmの小礫を約１m幅で半円形に詰めているが、左右の壁は奥壁から２mまでで終わっており、玄室手前や羨道部には施されていない。裏込めの下部は10～20cmと、上部よりも大きい石を積んでおり、裏込めをさらに補強する「裏込め被覆」と思われる。奥壁裏のものは、奥壁の基底の石と同程度の高さまでほぼ垂直に積み、その上に５～10cmの裏込め石を、下よりも幅広



1　暗褐色土　A軽石を多く含む。　2　黄褐色土　A軽石を少量含む。　3　褐色土　砂礫を含む。　4　明褐色土　しまり弱い。　5　明黄褐色土　粘土をベースとし砂粒を含む。しまり強い。　6　明黄褐色土　砂粒をベースとしロームを層状に含む。(3～6は城構築時の盛り土)　7　明褐色土　B軽石を含む。粘性・しまり強い。　8　黒褐色土　B軽石を多量に含む。しまり弱い。　9　暗褐色土　砂礫を含む。粘性・しまり弱い。　10　暗褐色土　砂礫を含む。粘性・しまり強い。　11　黒褐色土　B.P.を含む。　12　黄褐色土　暗褐色土ブロックを含む。
13　明褐色土　砂粒を含む。　14　暗褐色土　B軽石・砂粒・ロームブロックを含む。　15　黄褐色土　暗褐色土ブロックを含む。　16　黄褐色土　粘性・しまり強い。　17　暗褐色土　粘性強い。　18　暗褐色土　炭化粒子を含む。粘性・しまり弱い。　19　黄褐色土　粘性・しまり弱い。　20　黄褐色土　ロームをベースとする。　21　黒褐色土　しまり強い。

第102図　1号墳全体図



第103図　1号墳石出土状況

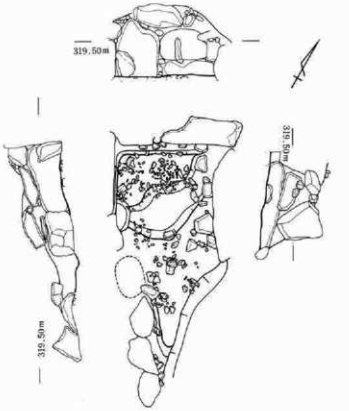
1　黒褐色土　B軽石を含む。　2　黒褐色土　しまり弱い。　3　黄褐色土　ソフトロームの純層に近い土。天井石の被覆用か。
4　暗褐色土　輝岩の破片を含む。しまり弱い。　5　明黄褐色土　ハードロームブロックを含む。

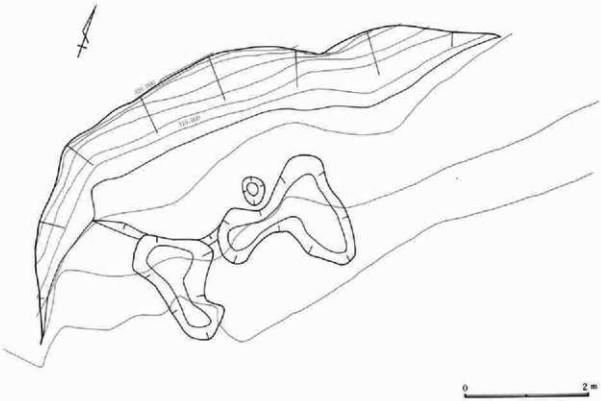
く詰めている。左右壁は裏込め被覆があまりはっきりせず、いくつか大きなものはあるが、奥壁部ほどは明確に積まれた形跡はない。裏込めの裏側はロームをベースとした土を盛っているが、下層には粘性・しまりの弱い土を入れ、その上に粘性の強い土を乗せている。奥壁の裏以外は削平されて残りが悪く、盛り土をしてから裏込めを詰めたか、裏込めを積んでから盛り土をしたかは明確ではない。

掘り方　南東部は削平されていて不明であるが、北西部は奥壁より約1.5m北で一段下がっており、東西は周堀まで達している。さらに奥壁および玄室左右壁の下（裏込めが施されていた部分）が堀くぼめられている。

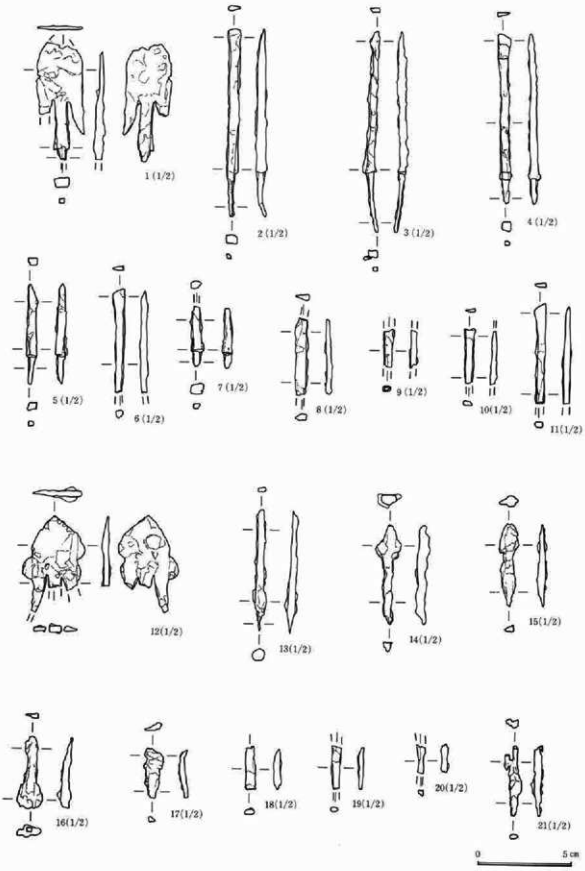
出土遺物　石室床上面から石鏃が21点出土している。

所見　削平により詳細は不明であるが、石室は、少なくとも片側には袖のある横穴式石室で、副葬品は石鏃しか出土していないが、古墳周辺の出土遺物（第99～101図参照）中の、須恵器甕・瓶、土師器坏・小形甕は古墳に伴う遺物と考えられる。





第104図　1号墳石室および石室掘り方



第105図　1号墳出土遺物

1号墳出土遺物観察表

図No.	器種	出土位置	法量 全長	法量 幅	法量 厚さ	法量 重量	残存状況	特徴
1	鉄鏃	北西+15	6.2	2.5	0.1~0.5	6.5	両端部欠	広根両丸造鏑挟三角形式。鏃身部および茎部の両先端を欠損。
2	鉄鏃	北西+20	9.9	0.7	0.1~0.6	5.3	完形	端片刃箭式。
3	鉄鏃	北西+17	10.6	1.0	0.1~0.5	3.6	完形	端片刃箭式。
4	鉄鏃	北西+10	8.9	0.7	0.1~0.7	4.3	完形	端片刃箭式。茎部は短い。
5	鉄鏃	北西+3	5.4	0.6	0.2~0.7	2.0	完形	端片刃箭式。篦被部、茎部とも短い。
6	鉄鏃	北西+24	5.5	0.6	0.2~0.4	2.2	茎部欠損	端片刃箭式。鏃身部～篦被部破片。
7	鉄鏃	北西+25	3.2	0.7	0.2~0.6	1.6	鏃身部欠	篦被部～茎部破片。
8	鉄鏃	北西+20	4.1	0.7	0.1~0.4	1.8	両端部欠	篦被部破片。
9	鉄鏃	北西+10	2.0	0.6	0.3~0.4	0.45	両端部欠	篦被部破片。
10	鉄鏃	北西+15	2.8	0.6	0.1~0.4	0.85	両端部欠	篦被部破片。
11	鉄鏃	北西+10	5.3	0.6	0.1~0.4	1.8	茎部欠損	端片刃箭式。鏃身部～篦被部破片。
12	鉄鏃	石室覆土	5.0	3.3	0.2~0.8	7.1	茎部欠損	広根両丸造鏑挟三角形式。鏃身部破片。
13	鉄鏃	石室覆土	6.4	0.7	0.1~0.6	2.6	鏃身部欠	篦被部～茎部破片。
14	鉄鏃	石室覆土	5.3	1.4	0.2~0.7	3.1	茎部欠損	端刃鑿箭式。
15	鉄鏃	石室覆土	4.3	1.0	0.1~0.6	2.2	茎部欠損	端刃鑿箭式。
16	鉄鏃	石室覆土	3.7	1.3	0.1~0.7	2.6	茎部欠損	端片刃箭式。
17	鉄鏃	石室覆土	2.7	1.1	0.2~0.3	1.2	茎部欠損	端刃鑿箭式。鏃身部が折れ曲がる。
18	鉄鏃	石室覆土	2.3	0.6	0.3~0.5	0.8	両端部欠	篦被部破片。
19	鉄鏃	石室覆土	2.3	0.5	0.2~0.3	0.6	両端部欠	茎部破片。
20	鉄鏃	石室覆土	2.5	0.5	0.2~0.4	0.3	両端部欠	篦被部破片。
21	鉄鏃	石室覆土	3.2	0.9	0.2~0.6	1.6	両端部欠	篦被部破片。

第Ⅴ章　調査の成果と問題点

第1節　縄文時代前期末～中期初頭の遺物・遺構について

今回の調査では、2号住・7号住を中心として僅かではあるが前期末（諸磯c式）～中期初頭（五領ケ台式）の遺物・遺構が検出された。ここでは、事実記載の追加と若干の考察をおこなってみたい。

諸磯c式に比定される土器は、2号住（図44）8・11と17A土坑（図53）3である。このうち2号住8と17A土坑3は結節浮線文が施されるが、地文に間隔のあいた浅い沈線が見られることから、当該期と考えた。

十三菩提式期と考えられる土器は、7号住（図46・47）1・2・6・8・10・11・12・24と2号住周辺（図50）6・17A土坑（図53）1・48土坑（図68）6・A区遺構外（図72）5がある。すべてが破片で全体を把握しずらいが、この中で、十三菩提式の特色とされる縄文を地文にもち結節浮線文を施すものは見受けられない。無文地に結節浮線文を有するものは、46図12と50図6（掘り込みをもつ）がある。これ以外の結節浮線文をもたない1群（図46の1・2・6・8・10・11　図53の1　図68の6　図72の5）は、半截竹管の内面を使った半隆起線で文様を描くことを特色としている。この1群は胴上部に幅広の文様帯をもち、文様帯内の上下を横位の半隆起線で区画し、その中に渦巻文などを配している。文様の中に掘り込みをもつものも多い。口縁部は無文で口唇部には耳状の突起や短隆帯を貼付けたりする（図46の1）。

五領ケ台式土器は2号住（図44）2～7・9・7号住（図46・47）5・7・9・13・20・2号住周辺（図50）1～4・7～9・27土坑（図56）1・32土坑1・4・5・6・A区遺構外（図72）4が出土している。この中で2号住（図44）4と27土坑（図56）1以外は五領ケ台Ⅱ式である。

縄文施文の土器のうち羽状縄文や結節縄文を横位に施す土器群（図46の3・4・14・15・16・17・図47の22・図50の10・11・図53の2・図59の1・図68の4・5）は、土器の器厚が一定しない特徴がみられるが、時間的な位置づけを、五領ケ台Ⅰ式の土器が極めて少ないことから十三菩提式期と考えたい。

遺物の出土状態（図39・41）から2・7号住を見てみると7号住埋没後に2号住がつくられており、さらに、2号住と7号住の遺物が接合関係を持たず、2号住の土器中には、十三菩提式期の土器が見受けられないことから2号住・7号住それぞれが、五領ケ台式・十三菩提式期の遺構である可能性が高いといえよう。しかしながら、7号住中の僅かな五領ケ台式土器の出土状態は十三菩提式期の土器と同様の傾向を示していることを考えると必ずしも確定はできない。

今回の調査では、2・7号住を中心として、十三菩提式期～五領ケ台式期の遺構が検出されたわけだが、ここで、当該期の遺構のありかたについて考えてみたい。現在までに、群馬県内の当該期の遺構・遺物の検出例はけして豊富とはいえない。十三菩提式期では、房谷戸[1]・糸井宮前[2]・見立福井[3]・分郷八幡[4]・勝保沢中ノ山[5]・書上下吉祥寺[6]・内匠諏訪前[7]・神保植松[8]・白倉下原[9]遺跡などで土器が出土しているが、地面を掘りくぼめた遺構が検出されているのは、本遺跡と房谷戸遺跡・内匠諏訪前遺跡ぐらいである。また、本遺跡のような従来では調査をしなかったであろう複せ尾根で遺構が検出されたことは当時の居住のありかたを考えるうえで興味深い。さらに、前段階の諸磯c式期の竪穴住居が県内での検出例が増加している事実とは際だった違いをみせている点も示唆的である。このようなありかたをむしろ積極的に評価するならば、県内では当該期において小規模な集団の移動に富む生活形態が一般的であったと理解すべきではなかろうか。このような考えかたに立脚した時に、この時代が土器型式に広がりをもつ時期であることも考えあわせると、前後の時代・他の地域における居住の形態を検証することにより、県内の様相がより鮮明にされると思われる。(木村)

註

(1)　山口逸弘　1989　『厚谷戸遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下群埋文と略）
(2)　関根慎二　1986　『糸井宮前遺跡Ⅱ』(財)群埋文
(3)　小野和之他　1985　『見立溜井遺跡』　群馬県教育委員会
(4)　柿沼恵介　1986　『分郷八崎遺跡』　群馬県教育委員会
(5)　石坂　茂　『勝保沢中ノ山Ⅰ遺跡』　(財)群埋文
(6)　原　雅信　1988　『書上下吉祥寺遺跡』(財)群埋文
(7)　未報告（1992刊行予定）
(8)　未報告
(9)　未報告

参考文献

今村啓爾　1974　『とけっぱら遺跡』　登計原遺跡調査会
小野俊郎　1986　『真脇遺跡』　能登町教育委員会
小野俊郎　1989　「十三菩提土器様式」『縄文土器大観１」
浜江芳浩・黒尾和久　1987　「縄文時代前期末葉の居住形態〈予察〉」『貝塚39』
土井義夫　1991　「〈研究メモ〉定住・移動と領域論」『貝塚45』
三上徹也　1987　「大洞遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１」(財)長野県埋蔵文化財センター
山口　明　1984　「中部地方における前期末葉土器と鎌屋町式土器」『長野県考古学会誌48』

第２節　奈良・平安時代の遺構について

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡４軒（１・３～５号住居跡）と炭焼窯跡３基（１～３号炭焼窯跡）が検出されている。竪穴住居跡は、出土遺物から、４・５号住居跡が奈良時代、１・３号住居跡が平安時代と考えられる。４・５号住居跡は、４号住居跡の土器組成が一般の住居と異なるためはっきりとは言えないが、いずれも８世紀代でほぼ同時期になると思われる。１・３号住居跡はともに９世紀後半代のものと考えられるが、１号住居跡には覆土に浅間Ｂ軽石を含む黒色土が存在するが、３号住居跡覆土には浅間Ｂ軽石が存在しないため、１号住居跡よりも３号住居跡の方が古くなると思われる。炭焼窯跡は、１・２号窯跡が覆土に浅間Ｂ軽石を含み、３号窯跡は含まないため、３号窯跡が１・２号窯跡に先行するものと思われる。１号住居跡と１・２号炭焼窯跡は覆土に浅間Ｂ軽石を同じ状態で含んでいるため、時期的にもほとんど差がないものと考えられる。地形的に見ると、周辺に同時期の住居跡が存在する可能性は少ないため、１号住居跡は単独で存在した可能性が高く、それに１・２号炭焼窯跡の少なくともどちらか１基は伴っていたものと思われる。３号炭焼窯跡の時期は不明であるが、形態的に１・２号窯跡と大差なく、近接した位置にあるため、１・２号窯跡と大きな時期差はないものと考えられる。このため３号炭焼窯跡は３号住居跡に伴う可能性が最も高いと言える。

竪穴住居跡と炭焼窯跡が併存すると考えられる例は、笠懸稲荷山遺跡でみられる。ここは、８世紀後半と10世紀前半～11世紀初頭の竪穴住居跡が８軒検出されており、これと同時期と考えられる炭焼窯跡が２基重複して検出されている。この遺跡は、生活基盤に乏しい丘陵部に位置し、一時期の住居の数が少なく、近くに炭焼窯跡があることなどから、炭焼きを生業とする集団の集落であったと考えられている。[11]

野上塩之入遺跡は、山地に近い丘陵地にあり、耕地となる場所からはかなり離れているが、農耕を生業とする可能性は否定できない。１・３号住居跡の時期には炭焼窯跡を伴うが、炭焼き専業で生活していた確証はない。炭焼窯も、焼土等が少なく、長期にわたって使用された痕跡はないため、短期間で廃絶されたと考えられる。しかしながら、本格的な炭焼窯で生産しているため、自給のためのものではなく、製品として他に供給していたことは間違いないであろう。この点では、山間地にあっても、社会と隔絶していたわけではなく、社会に組み込まれていた存在であったと言えよう。野上塩之入遺跡の集落は、８世紀代の１時期に２軒の住居が相前後してあるいは同時に営まれ、その後断絶があり、９世紀後半にまた２軒の住居が、炭焼窯を伴う形で相前後して営まれている。しかしながら、いずれも一時期で廃棄され移住しており、きわめて移動性に富んだ居住形態を示していると言えよう。

炭焼窯は特に製鉄との関係が指摘されている。浜川市の金井製鉄遺跡では、炭焼窯跡と製鉄炉が検出されており、製鉄に使用した炭を焼いた窯跡と推定されている。[6]

報告書中では、1）遺跡地は製鉄遺跡の立地上からみて卓越した地形にあること。

2）木炭窯は周辺にある炉跡群に供給された熱源であること。

3）炉跡は県下にみられる既調査遺跡の炉跡と類似した構造をもつものであること。

4）時期的には9世紀後葉のものとして把握されること。

の4点が指摘されている。

太田市の管ノ沢遺跡でも炭焼窯跡1基と製鉄炉3基が検出されており、炉の形態は金井製鉄遺跡と類似しており、炭焼きに使用した原木も同様で、技法も類似しているとされる。[3]

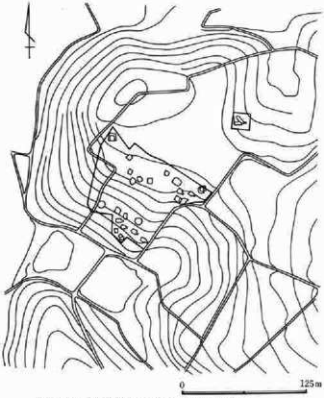
笠懸稲荷山遺跡でも、1号窯の窯底から鉄滓が出土し、12号住からは羽口が出土しているため、炭焼窯は製鉄に関連するものと推定されている。

以上のことから、炭焼きは特に製鉄に必要とされる木炭を焼成したと考えられる。野上塩之入遺跡の炭焼窯跡も周囲から製鉄に関連した遺構・遺物は検出されていないが、製鉄用の木炭を焼成していた可能性が高いと言えよう。

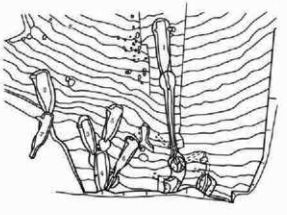
炭焼窯跡は、規模は1号が1.6×4.0m、2号が2.0×4.2m、3号も長さは不明であるが幅が1.7mであるため、3基ともほぼ同規模であったと考えられる。平面形も、すべて隅のやや丸い長方形になっており、形態的にも3基ほぼ同様のものとなっている。時期は、1号住と1・2号炭焼窯跡がほぼ同時期とすると、9世紀後半代と考えられる。

県内の他の遺跡の炭焼窯跡をみると、平面形はほとんどのものが、長方形を基調とし焚口部が細くなる徳利状を呈している。規模は、長さ5.7～12.0mで幅は1.5～2.5mであるが、長さ6m、幅1.7m程度のものが多い。煙道部は外擂山遺跡4号窯は奥壁部にあるが、それ以外は左右の側壁部もしくは両側壁部にある。[4]

野上塩之入遺跡の炭焼窯跡は他の遺跡の炭焼窯跡に比べ、規模はやや小さく、壁の残高が深くても70cm程度と削平が大きいため上部構造は不明であるが、煙道部、焚口部の痕跡は見られないため、構造も異なっていたものと考えられる。また、笠懸稲荷山遺跡のような、焼土が何層も重なっているような状況もなく、奥壁が焼けている程度である。この差は何に起因するのであろうか。外擂山遺跡6号窯が9世紀前半代

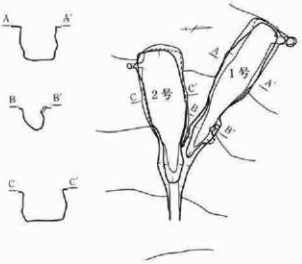


第106図　笠懸村稲荷山遺跡遺構配置図

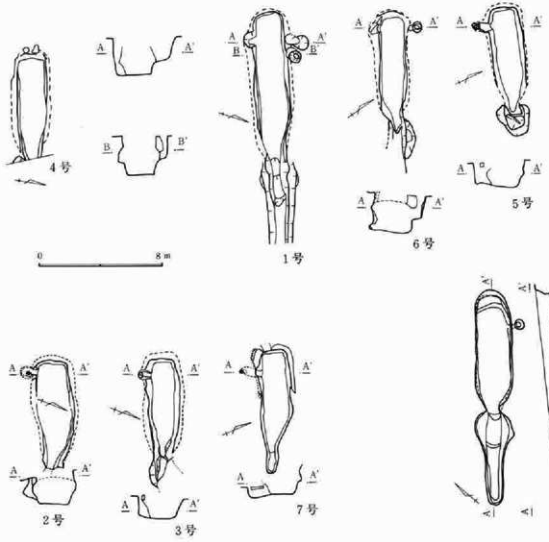


第107図　外擂山遺跡遺構配置図

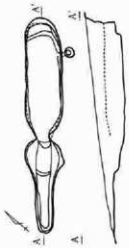
と考えられており、笠懸稲荷山遺跡の炭焼窯跡は、10世紀前半～11世紀初頭と考えられているが、形態的には大差がない。野上塩之入遺跡のものは9世紀後半代と考えられるため、時期差による形態差とは考えられない。おそらく、かなり短期間の使用であったため、焼土もあまり残らず、他への供給量もそれほど多くなかったため、規模も小さく、施設もしっかりしたものの必要がなかったのであろう。このことは、笠懸稲荷山遺跡の炭焼窯と同時期の集落が1世紀ほど存続するのに対し、野上塩之入遺跡の竪穴住居跡が1時期で廃絶されてしまい、短期間で移住していることにも表れていると思われる。



第108図　笠懸村稲荷山遺跡炭焼窯跡



第109図　外搆山遺跡炭焼窯跡



第110図　十三塚遺跡炭焼窯跡

註

(1) 若月省吾　1980　『笠懸稲荷山遺跡』　笠懸村教育委員会　　井上唯雄・若月省吾　1983　「笠懸村の原始古代」『笠懸村誌　別巻』
　若月省吾　1986　「笠懸稲荷山遺跡」『群馬県史　資料編2』
(2) 井上唯雄他　1975　「金井製鉄遺跡発掘調査報告書」　渋川市教育委員会
(3) 飯島武次・穴沢義功　1969　「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺構」『考古学雑誌　55－2』
　飯島武次・穴沢義功　1970　「太田市菅ノ沢製鉄遺構の補足調査と化学的検討」『考古学雑誌　56－3』
　大江正行　1986　「菅ノ沢製鉄遺跡」『群馬県史　資料編2』
(4) 木津博明　1986　「外攝山遺跡」『群馬県史　資料編2』　　新里村教育委員会　1982　『十三塚遺跡』

参考文献

中山吉秀　1976　「離れ国分考」『古代　61号』
土井義夫・渋江芳浩　1987　「平安時代の居住形態」『物質文化　49号』

第3節　塩之入城について

塩之入城については、山崎　一著『群馬県古城墓址の研究　下巻』に記載されているので、まずそれを引用しておく。

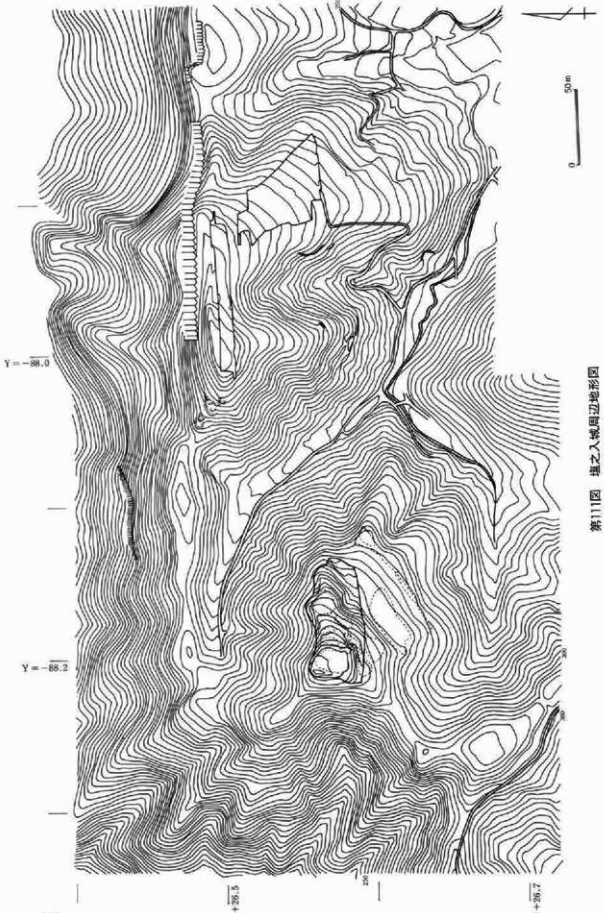
「野上の塩の入に塩の入城址がある。順路は鞘戸から北に入るのであるが、その位置は神農原の南、鏑川の直上、三角点323mの所で、大山城址からは500mの距離にある。

西北端の最高所を本丸とした梯郭式の丘城で、階段状に築かれ、本丸は方30m程あり、西側に土居を構えている。南北120m最大幅70mの小堡で、追手は南面に向う。藤田城の堡塁と考えられる。」

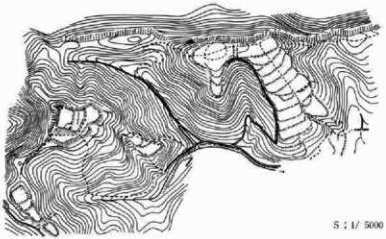
調査の結果、北西部の平坦面を主郭とし、東側に3カ所曲輪が検出されたがその先には曲輪はないものと考えられる。南側は主郭から4m下に曲輪面があって調査区外へ続いており、さらにその南東にも平坦面があり、曲輪が存在する可能性がある。このように曲輪は主郭の東側と南東に広がっているが、東西長は北端部で55m、南北長は最大50～70mになる。主郭部の西辺から北辺の西側にかけて、地山岩盤が露呈した帯状の高まりがあり、盛り土をしたものではないが、土塁として機能していた可能性は高い。虎口は、主郭部南西隅に岩盤の割石を枡形状に組んだ部分で、下方に階段状の遺構も検出されており、大手が南に向いていることがわかる。

上記『古城墓址の研究』においては、城の縄張りは主郭部周辺だけであったが、その後の調査で、谷を隔てて東にある野上塩之入遺跡B区も城の縄張りの範囲に入るように訂正された（第112図）[1]。B区北西部の小平坦面は、「チシロ」と呼ばれていたが、発掘調査により東側に南北に走る溝が検出され、東西に長い丘陵を分断して「チシロ」部分を独立させていることが判明した。しかしながら、城郭に関係すると思われる遺構や遺物は全く検出されていない。溝の東側は、第112図で城郭の範囲とされているが、曲輪と考えられるような平坦面は検出されず、遺物もなかったため、城の縄張りの外になると思われる。また、主郭部の南西部にも「チシロ」部と同様の平坦面がある。ここは発掘調査区外であるため詳細は不明であるが、おそらく「チシロ」部とともに城の一部となり、全体で城として機能していたのであろう。

藤田城とは『群馬県古城墓址の研究　下巻』に「二ッ山、塩ノ入、岩染、浅香入、西平、茶臼山の諸砦によって守られた野上の盆地を藤田城の城域と考うべきではあるまいか。(中略) こうして藤田城は南北朝期における地域城と考えることができる。」とある。地域城とは、地形的に外部と隔離しやすい地域を城内とし、周囲を城砦で固めている自然の城郭ともよべるもので、『群馬県古城墓址の研究　上巻』にも「富岡の野上地区も一つの城域である。二ツ山、岩染、浅香入、野上の四城を周囲に配したこの地区には藤田氏が居城したもので、その文献はわづかに興厳寺に残っている。藤田能登守信吉はここの出身である。藤田岬の城というのはこの城域を指すのかも知れない。」とある。野上川は稲含山に源を発し、野上の日向まで北流しそこで東



第111図　塩之入城周辺地形図



第112図　塩之入城縄張り図(山崎原図)

北東に流れを変え、上高瀬の森でまた北流して鏑川に合流している。北流している間は山地および丘陵地を流れるため両岸の低地部分は非常に狭いが、東北東流する部分で広がり両岸の低地部分が幅350m程となり、約3.5kmに続く。低地の両側は丘陵地および上位段丘になっている。藤田地域城はここを城域とすると考えられ、東端は東北東に流れが変わる部分で、ここに野上の砦がある。西端には茶臼山の砦があり、その間には野上川の右岸に岩染城、浅香入城、左岸に塩之入城、西平城がいずれも丘陵上に存在している。このため、この6城で守られた低地部分が自然の城郭をなしていることは、かなり妥当性のあることで、塩之入城は、その北側の守備を固める重要な役割を果たしていたのであろう。

さて、鏑川の流域に視点を広げてみると、塩之入城の周辺には、第113図に示したように多くの城郭が分布している。このうちの41か所を表に掲げたが、これを立地により分類すると、山城が11、丘城が16、平城が2、崖端城が5、丘山城が2、平丘城が1、平城、丘城、山城を合わせたものが1、傾斜地に立地するものが2となっている。地形を見ると、鏑川の下位段丘面に立地するのは大島下城と星田城だけで、他はすべて鏑川上位段丘面と丘陵地上に立地している。鏑川の北岸と南岸で見ると、南岸の方が急峻な地形であることも影響するためか、南岸に山城が多く、北岸では丘城が多くなっている。

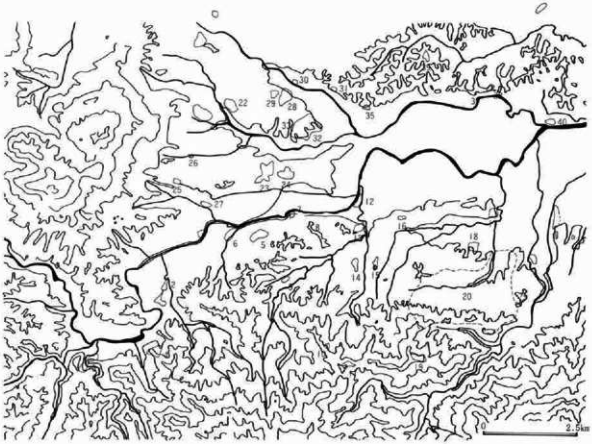
このように、鏑川周辺の城郭は、鏑川の周辺低地を取り囲むようにして、周囲の丘陵上に存在しており、この地域一体を全体で防御していたと考えられるであろう。

註

(1) 第112図は、1964年に調査して作成したものを、1987年8月に訂正し、さらに1988年10月発掘調査により再訂正したものである。

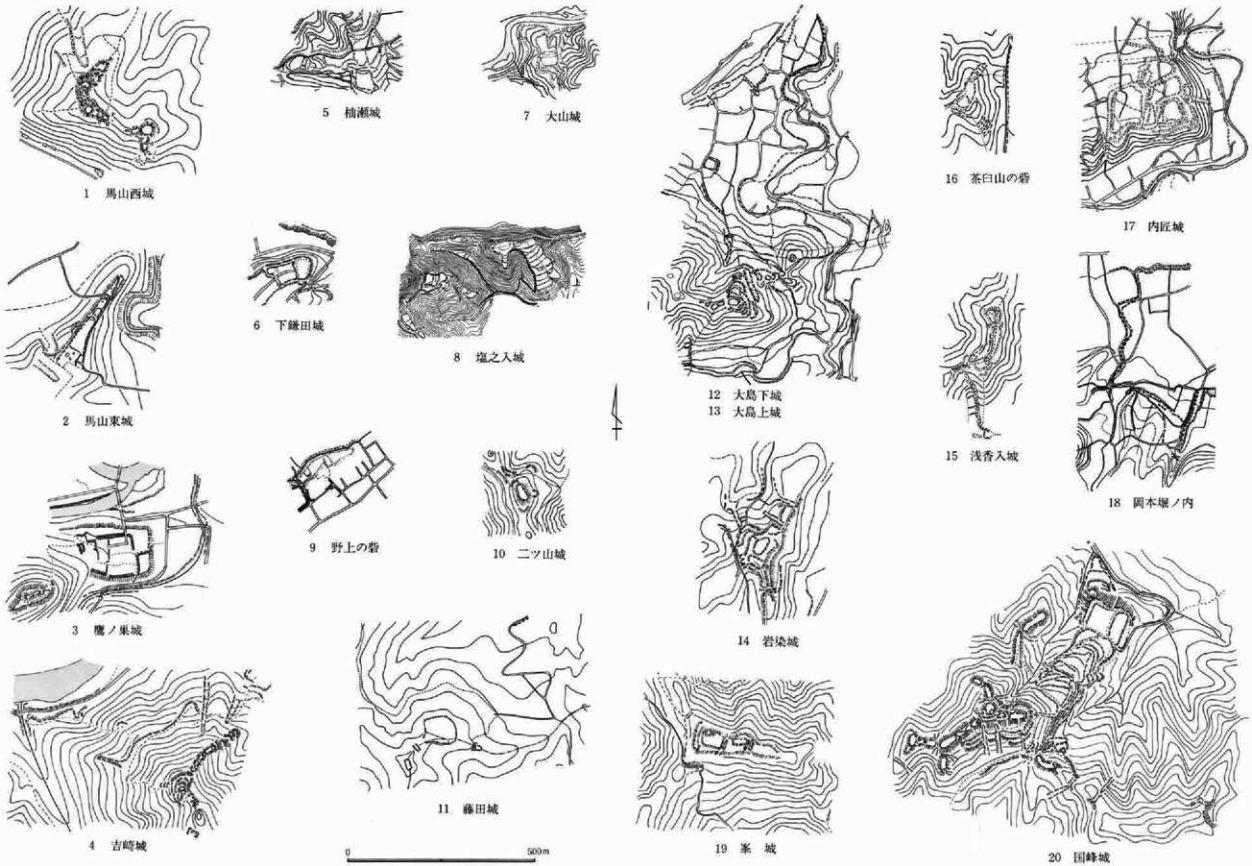
参考文献

山崎　一　1978　『群馬県古城塁址の研究　上・下巻』　山崎　一　1981　『群馬県古城塁址の研究　補遺篇　上・下巻』
群馬県教育委員会　1988　『群馬県の中世城館跡』

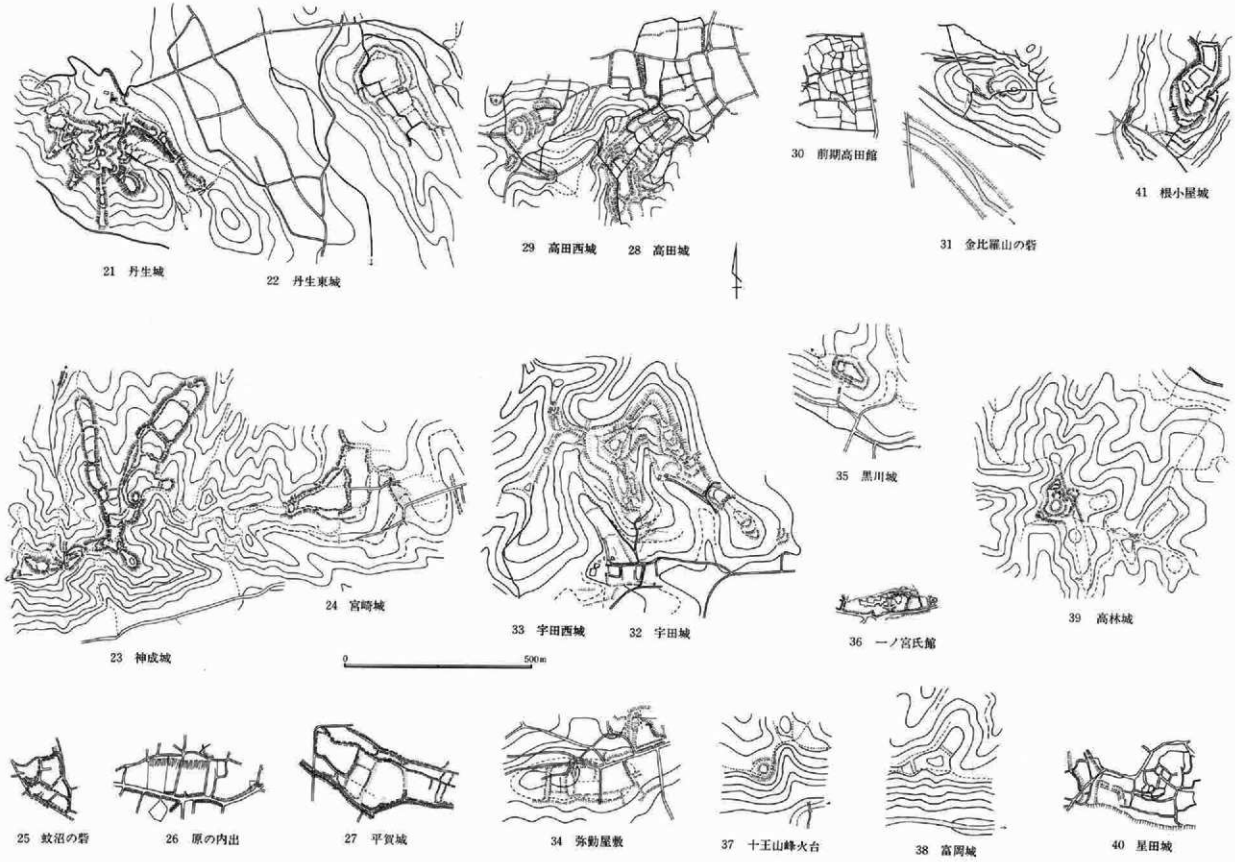


第113図　鏑川周辺中世城郭位置図

	名称（別称）	所在地	立地	現況	遺存状況	存続期間（推定伝承）	築・改城者（推定伝承）	関連地名	遺構・遺物等	備考
1	馬山西城	下仁田町馬山	山	山林	良		小幡氏	字東城山	堀切、腰郭	
2	馬山東城	下仁田町馬山	丘	寺、畠	中等		小幡氏	字東城山	腰郭	米山寺
3	屋ノ黒城	下仁田町吉崎	丘、山	畠、山林	中等	16世紀	小幡信尚	字中島、おくるわ、屋ノ黒、大崩山	戸口、石垣、物見郭、腰郭	
4	吉崎城	下仁田町吉崎	山	山林	良			字藤山	堀切、腰郭、戸口、竪塀	
5	柚岡城	下仁田町馬山	丘	畠、山林	良	天正末年	北条氏小幡氏	字柚瀬、城原	堀切、戸口、水の手、礎石列	63年発掘調査 墓石・記紀皿等出土
6	下鏑田城	下仁田町馬山	丘	畠	良	天正末年	北条氏小幡氏	字下城、字鏑田	堀切、武者屯、戸口、建物跡	63年発掘調査
7	大山城	富岡市神農原	尾根	山林	良	16世紀	野宮信勝	字向山	戸口、竪堀、堀切、土居	
8	塩之入城	富岡市野上	山	山林、畠	中等	16世紀		塩ノ入		当該遺跡
9	野上の砦	富岡市野上	丘	畠	不良			字内出、字番場、字中井		野上地域城の堡塁
10	二ツ山城	富岡市野上	山	山林	良	16世紀		二ツ山	土居、腰郭	野上地域城の堡塁
11	藤田城	富岡市岩染甘楽町秋畑	山	山林	不良		藤田弾正	字藤田、かがりたき場	堀切	のろし場
12	大島下城（小関屋敷）	富岡市大島	尾根	宅地、畠	中等	16世紀	小関氏	大島、舟川	堀、土居、堀切、石垣	大島上城の出城
13	大島上城（西平城）	富岡市大島	山	山林	良	16世紀		西平	堀切、土居、戸口、腰郭	61年発掘調査 野上地域城の堡塁
14	岩染城	富岡市岩染	山	畠	良	16世紀		城山	堀切、腰郭、土居、戸口	野上地域城の堡塁
15	浅香入城	富岡市南後箇	山	山林	良	16世紀	浅香弾正	浅香入	戸口、腰郭	野上地域城の堡塁



第114図 塩之入城周辺中世城郭縄張り図(1)



第115図　塩之入城周辺中世城郭縄張り図(2)

	名称（別称）	所在地	立地	現況	遺存状況	存続期間（推定伝承）	城・在城者（推定伝承）	関連地名	遺構・遺物等	備考
16	茶臼山の砦	富岡市南後閼	山	島	不良			茶臼山	腰郭	古墳を利用
17	内匠城（井戸沢城）	富岡市内匠	崖端	山林、島	良	天正年間	北条氏		堀、土居、戸口、櫓台、馬出土居、堀切、腰郭	62年発掘調査　櫓台に稲荷神社
18	岡本堀ノ内	富岡市岡本	傾斜地	寺、耕地	中等			字堀の内	堀	福寿院あり
19	峯城	甘楽町秋畑	山	山林	良			字峰、城山	堀切、土居、腰郭、櫓台	百体申あり
20	国峯城	甘楽町国峯	山、丘、平地	山林、島、宅地、田	良	15世紀 16世紀	小幡氏	城山、城、御殿平、竹の内、中ッ沢、恩田、要害、宿平、根小屋、向い小屋、かじや鍛、丸小屋、的場、きむらい屋敷	堀、堀切、竪堀、土居、土橋、戸口、腰郭、水の手、遠堀、根小屋、惣郭、物見台	町指定史跡
	（竹の内館）	甘楽町国峯	平地	島	中等	15世紀	小幡氏	字竹ノ内、おやしき	削平地	
	（中ッ沢堀）	甘楽町国峯	平地	堀	中等		小幡氏	中ッ沢		
	（善慶寺遠堀）	甘楽町国峯	平地	堀	不良		小幡氏	恩田、善慶寺		60年農地改良で試掘
21	丹生城	富岡市丹生	丘	島、山林	良	15世紀 16世紀	新田岩松氏 小幡信実	字中村、字上丹生、字小屋敷	戸口、腰郭、水の手、根小屋、堀切、土居	
22	丹生東城	富岡市丹生	丘	島	良		横尾丹波守	字城山	堀切、腰郭、戸口	丹生城の支城
23	神成城	富岡市神成	丘、山	島、山林	良	16世紀	小幡氏		堀切、土居、腰郭、戸口、水の手、物見台	宮崎城の要害城
24	宮崎城	富岡市宮崎	丘	島、校地	不良	16世紀	宮崎和泉守 小幡信昌	梅岡、風呂、城谷	堀切、堀、腰郭、水の手	一時奥平信昌の近世城郭となる
25	蛟沼の砦	富岡市蛟沼	丘	宅地、寺	不良			字内出	堀、腰郭	
26	原の内出（丹波屋敷）	富岡市原	傾斜地	島、宅地	不良		横尾丹波守	字内出		
27	平賀城	富岡市中沢	台地	宅地、島	不良		内山氏	字平賀、字垣崎		内山氏は信州平賀の族
28	高田城	妙義町下高田	丘 平地	島、宅地	良	16世紀	高田氏	字城腰、字本村、字観音寺、上城、池の谷、藤沢	堀切、土居、戸口、腰郭、堀、根小屋	高田憲明の城
29	高田西城	妙義町下高田	丘	山林、島	中等	16世紀	高田氏	字本村、字西平、山王平、西城	堀切、腰郭、のろし台	高田城ののろし場　山王神社あり
30	前期高田館	妙義町下高田	平地	島	消滅	13～15世紀	高田氏	字新光寺前、堀の内		
31	金比羅山の砦	妙義町下高田	平地	山林、社	中等	16世紀		字東明戸、押出	腰郭、のろし台	
32	宇田城	富岡市宇田	山	山林、島、寺	良	16世紀	小幡影定	字城山、字北城、字東小谷	堀切、土居、腰郭、戸口、水の手、竪堀	63年一部発掘調査
33	宇田西城	富岡市宇田	丘	寺、耕地	良		甘楽友成 小幡氏	字西小谷、字陣田ヶ谷、字恵下原		神守寺がある
34	弥勒屋敷	富岡市一ノ宮	丘	島、墓地	良	16世紀	延崎氏か	字弥勒	堀	
35	黒川城	富岡市黒川	丘	苗圃、島	不良		渋谷高重	字両宮	堀、帯郭、土塁	近年壊され苗圃となる
36	一ノ宮氏館	富岡市一ノ宮	丘	公地	中等	16世紀	一ノ宮氏		堀、堀切、土居、帯郭	貫前神社の西に続く
37	十王山練火台	富岡市別保	崖端	公園	良	16世紀	小幡氏	十王山	腰郭	のろし台
38	富岡城	富岡市別保	丘	山林	不良		字城山		堀切	
39	高林城（黒岩城）	富岡市上黒岩	丘	山林	良		小野氏	字印中	堀切、土居、腰郭、戸口	
40	星田城	富岡市星田	崖端	島	中等			字城、字地神木	堀、土居、戸口	
41	根小屋城（巌城）	富岡市巌	丘	島	良	16世紀			堀、堀切、腰郭、戸口	

（群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』より抜粋　一部改変）

付載　野上塩之入遺跡出土炭化材の樹種

鈴木三男（金沢大・教養・生物）　能城修一（農水省森林総合研究所）

群馬県富岡市野上の、野上塩之入遺跡A区の炭窯から出土した炭化材の樹種を調べた。調べた試料は、奈良・平安時代の炭窯２基（１号炭焼窯跡と３号炭焼窯跡）から出土した炭化材それぞれ24点と13点、合計37点である。しかしこれらのうち１点は樹皮部分しかなかったので、同定できず、結局36点を同定した。

試料は室内で乾燥後、徒手により横断および必要なものは接線と放射の破断面を作成し、落射照明付きの反射顕微鏡で観察、同定した。同定後、それぞれの試料について同定の根拠を示す顕微鏡写真を撮影し、フィルムのかたちで証拠として保存してある。これは、埋れ木では通常、顕微鏡用のプレパラートが証拠標本として保存されるが、炭化材ではそれは困難であり、また炭化物の破片として保存しておいても、保存してある破片それ自身が同定作業を経なければ同定の根拠を示すことが出来ないため、写真のかたちで保存するものである。フィルムはフジフィルムのネオパン400、35mm36枚どりを使用し、撮影されたフィルムは金沢大学教養部生物学教室に保管されている。

同定結果

全36試料はすべて次に述べるクヌギ節であった。また樹皮１点は樹皮同定用の対照標本が完備していないため正確な同定は出来ないが、クヌギ節と同定された36点の標本のいくつかに付随していた樹皮と形態的には区別できなかった事から、これもクヌギ節であることが推定される。

コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科

（顕微鏡写真）図版Ⅰ：１～７：試料番号１、１・２－横断面、３－その拡大、４・５－接線断面で複合放射組織（４）と単列放射組織が見える（５）、６・７－放射断面で、単列放射組織（６）と小道管の単一穿孔（７）が見える；８：試料番号６の横断面；９：試料番号７の横断面。１・２・８・９－40倍；３・４－80倍；５・６・７－160倍。

図版Ⅱ：10～16：試料番号４、10・11－横断面で11は拡大したもの、12～14－接線断面で、大きな複合放射組織（12）とその拡大（13）および単列放射組織（14）を示す、15・16－放射断面で柵状の道管－放射組織間壁孔（15）と単一穿孔（16）を示す；17：試料番号11の横断面；18：試料番号31の横断面。　10・12・17・18－40倍；11・13－80倍；14～16：160倍。

（材形質）年輪の始めに大道管がほぼ一列に年輪界に沿って並び、晩材部では中～小型で円あるいは楕円形の道管が単独で、放射方向にルーズに配列する環孔材。放射組織は巨大な複合放射組織と単列放射組織があり、後者は同性。道管の穿孔は単一で、側壁には小紋孔がある。また道管周囲には周囲状仮道管がある。道管－放射組織間壁孔は大きく、柵状になる。

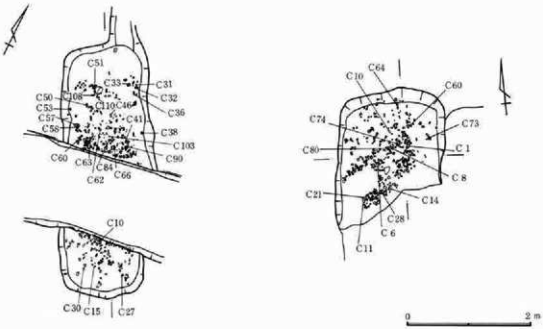
以上の形態から、ブナ科コナラ属の落葉性のコナラ亜属の内、クヌギとアベマキを含んだクヌギ節の材と同定した。この２種は材構造での区別は難しいが、現在の東日本にはクヌギは一般的であるのに対し、アベマキはほとんど分布しない事から出土炭化材はクヌギと考えて差し支えない。

コナラ亜属の落葉樹の炭化材では一般に複合放射組織のところから放射方向に割れ目が出来、柾目の薄板状にばらばらになる。そのためしばしば良好な横断の破断面を取るのが難しいが、これに対し、アカガシ亜

属やシイ属では放射方向に割れる事が少なく、またクリでは年輪始めの大道管に沿って接線状の両曲した薄板に1年輪ごとに剝がれる。これらの事から炭の外形である程度樹種の見当がつけられるが、同じコナラ亜属の、コナラやミズナラ、カシワなどのコナラ節とクヌギ節の区別は時として難しい。一般には、晩材部の中～小型の道管が輪郭が丸くて、壁が多少とも厚いことで区別されるが、炭化材では容易でない場合がある。

写真1と2、8、9、10、17、18は6つの試料の横断面の同倍率（40倍）の顕微鏡写真であるが、年輪幅の違いにより晩材部の小道管はかなり変異する。1、8、10のように年輪幅が中くらいのものでは一般に小道管は明瞭できれいに放射状に並び、コナラ節と間違う事はない。ところが2、17、18の下半分のように年輪幅の広いものでは年輪界近くに行くと小道管はかなり小さくなり、条件が良くないとコナラ節との区別が困難な場合がある。複数の年輪が確実に観察できる場合は問題なく同定できるが、保存が悪く、また放射方向に割れ易いため良好な破断面がある程度の広さをもって作成できない場合などは慎重を要する。

群馬県地方では現在コナラの二次林が広く分布していて、これが過去にも優占していたと考えられている。事実県内の古墳時代の焼失住居の用材がコナラ節中心であった事が勝保沢中ノ山遺跡（鈴木・能城、勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団：180～192：1988）などで知られている。その点からも当遺跡での燃料材の中心がコナラである事が予想されたが、予想に反してそのすべてがクヌギ節であった。クヌギは一般的には低湿地及びその周辺に多く生育し、当遺跡のような丘陵上では希であり、身近なものを燃料材として利用した結果であると考えるには、当遺跡周辺で人々がこの木をよく栽培していたと見なすことなしには出土結果は考えにくい。クヌギ節の選択的利用は、新保遺跡（鈴木・能城、新保遺跡Ⅰ、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団：71～94：1986）にみられるようにすでにこのころの群馬県内にあり、当遺跡でもクヌギ材をある目的に応じて選択的に燃料材として使用した可能性も考えられる。

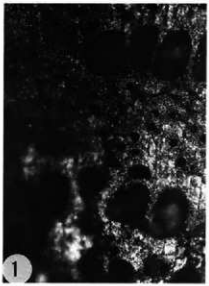


第116図　1号(左)、3号(右)炭焼窯分析試料出土状況（一部の試料は図示されていない）

付載　野上塩之入遺跡出土炭化材の樹種

第4表　群馬県野上塩之入遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	樹　　種	地区	遺　　構	遺物番号	フィルム番号
1	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C108	400－16－28～34
2	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 90	400－16－35
3	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 32	400－16－36
4	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 63	400－17－1～8
5	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 60	400－17－9
6	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 41	400－17－10
7	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 58	400－17－11
8	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 10	400－17－12
9	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 30	400－17－13
10	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 51	400－17－14
11	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 31	400－17－15
12	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 46	400－17－16
13	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 84	400－17－17
14	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 57	400－17－18
15	広葉樹樹皮	A区	1号炭焼窯跡	C110	写真無
16	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 33	400－17－19
17	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 38	400－17－20
18	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C103	400－17－21
19	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 62	400－17－22
20	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 50	400－17－23
21	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 66	400－17－24
22	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 15	400－17－25
23	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 27	400－17－26
24	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 8	400－17－27
25	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 21	400－17－28
26	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 73	400－17－29
27	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 10	400－17－30
28	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 11	400－17－31
29	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 28	400－17－32
30	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 64	400－17－33
31	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 74	400－17－34
32	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 60	400－17－35
33	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 14	400－17－36
34	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 80	400－18－1
35	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 6	400－18－2
36	コナラ属クヌギ節	A区	3号炭焼窯跡	C 1	400－18－3
37	コナラ属クヌギ節	A区	1号炭焼窯跡	C 36	400－18－4


1

2

3

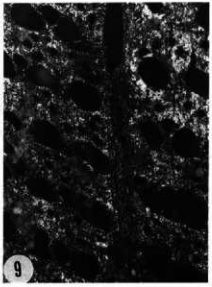
4

5

6

7

8


9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

写 真 図 版

野上塩之入遺跡　A区全景（南から）

野上塩之入遺跡　A区全景（東から）

図版　2　野上塩之入遺跡

1号住居跡全景（西から）

1号住居跡　鉄製紡錘車出土状況（東から）

1号住居跡　鉄斧出土状況（東から）

1号住居跡　木炭および焼土検出状況（南から）

1号住居跡　掘り方全景（西から）

1号住居跡 カマド遺物出土状況（西から）

1号住居跡 カマド全景（西から）

3号住居跡 全景（西から）

3号住居跡 カマド右脇遺物出土状況（南から）

3号住居跡 カマド全景（西から）

図版　4　野上塩之入遺跡

4号住居跡　全景（南から）

4号住居跡　西側炭化材出土状況（西から）

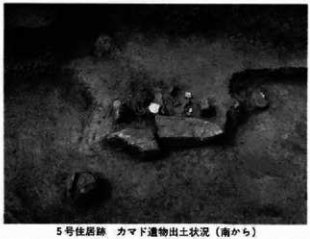
4号住居跡　南西部遺物出土状況

4号住居跡　カマド全景（南から）

4号住居跡　掘り方全景（南から）

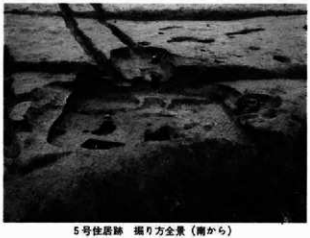
5号住居跡　全景（南から）

5号住居跡　こも編石出土状況（東から）



5号住居跡　カマド遺物出土状況（南から）

5号住居跡　カマド全景（南から）



5号住居跡　掘り方全景（南から）

図版　6　野上塩之入遺跡

1号炭焼窯跡　全景（北から）

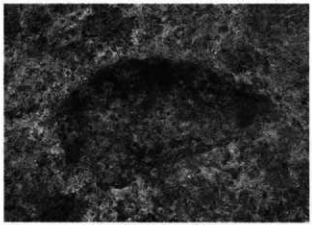
1号炭焼窯跡　全景（東から）

1号炭焼窯跡　炭化材出土状況（東から）

2号炭焼窯跡　全景（南から）

3号炭焼窯跡　全景（南から）

6号住居跡　全景（北から）



6号住居跡　炉　全景（西から）

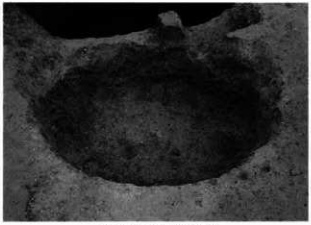
6号住居跡　掘り方全景（西から）

2号住居跡　全景（北から）

7号住居跡　全景（東から）

図版　8　野上塩之入遺跡

16号土坑　全景（南から）

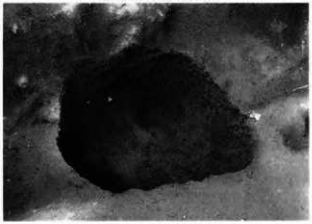


17号土坑　全景（北から）

27号土坑　遺物出土状況（北から）

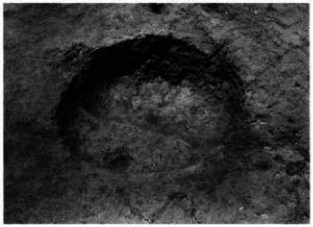
27号土坑　全景（北から）

32号土坑　遺物出土状況（南から）



32号土坑　全景（南から）

46号土坑　全景（東から）



18号土坑　全景（東から）

25号土坑 全景（東から）

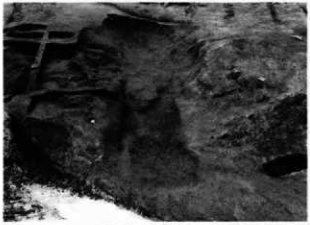
26号土坑 全景（東から）

29号土坑 全景（南から）

30号土坑 全景（東から）

31号土坑 全景（東から）

34号土坑 全景（南から）



36号土坑 全景（南から）

38号土坑 全景（西から）

図版　10　野上塩之入遺跡

44号土坑　（南から）

45号土坑（南から）

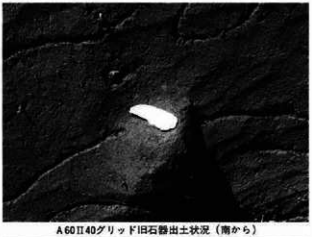
野上塩之入遺跡　B区全景（南上空から）

1号溝　全景（西から）

1号溝　石出土状況（東から）

テシロ部 全 景

A 60 II 40グリッドトレンチセクション（南から）

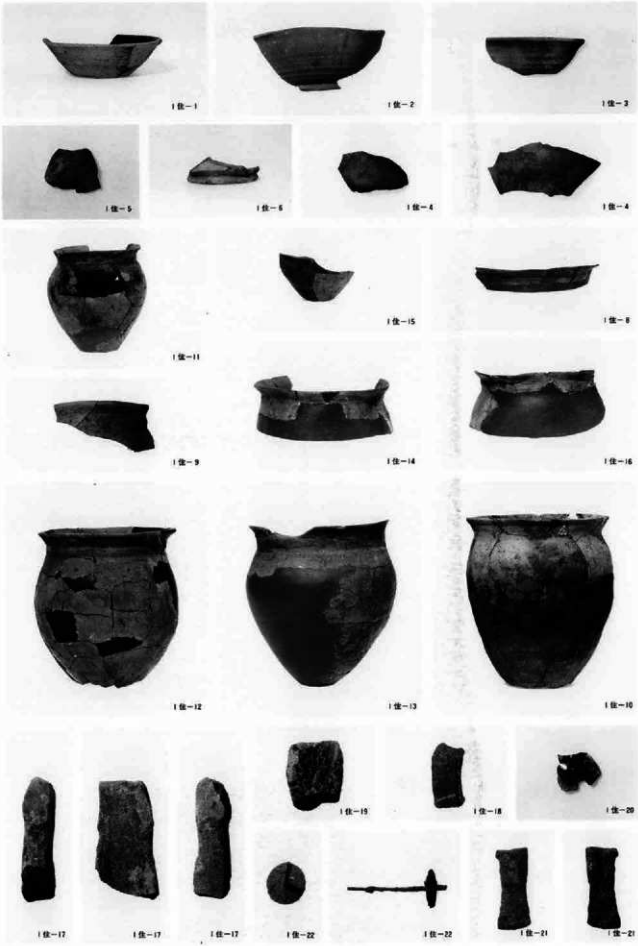


A 60 II 40グリッド旧石器出土状況（南から）

2号土坑 全景（東から）

8号土坑 全景（南から）

図版　12　野上塩之入遺跡



3住－1

3住－2

3住－7

3住－8

3住－6

3住－5

3住－3

3住－4

4住－1

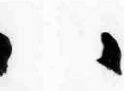
4住－2

4住－4

4住－5

4住－3

4住－7


4住－6

4住－11

4住－8

4住－10

4住－9

4住－12

19土坑－16

19土坑－16

19土坑－17

4住－15

4住－13

4住－14

図版　14　野上塩之入遺跡

5住－1

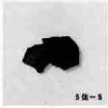
5住－3

5住－7

5住－6

5住－2

5住－4


5住－5

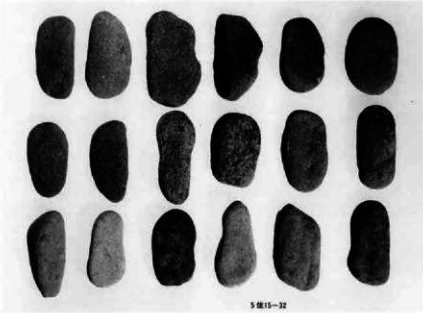
5住－10

5住－10

5住－11

5住－8

5住－9


5住15－32

5住－12

33土坑－1

6住－5

6住－6

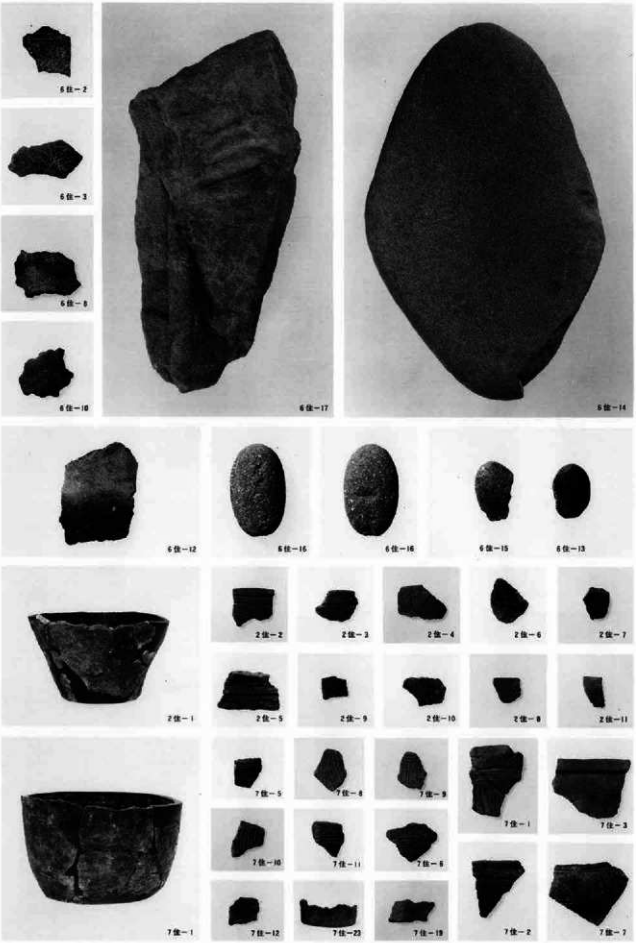
6住－11

6住－9

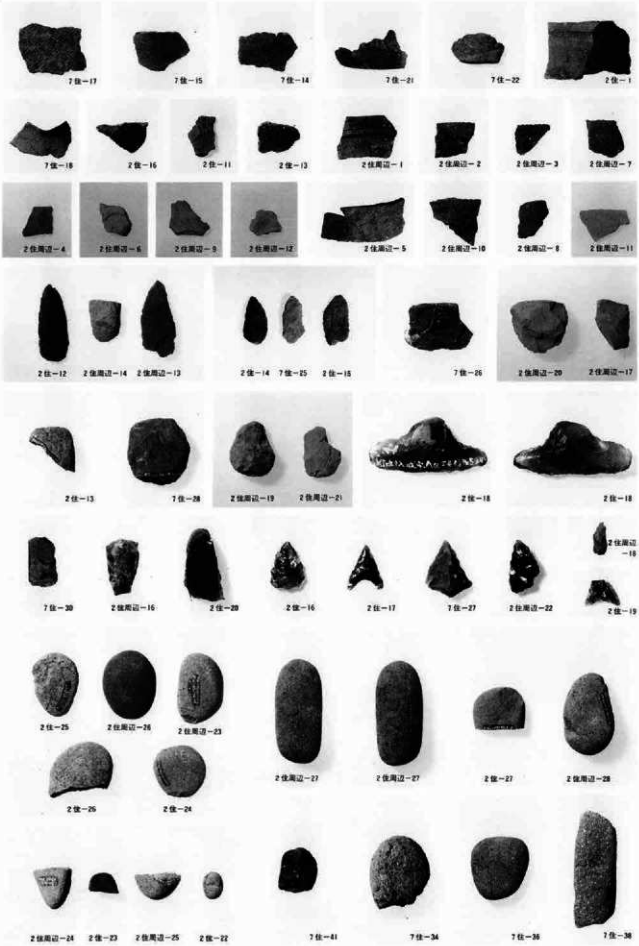
6住－4

6住－7

6住－1

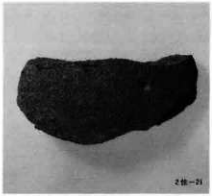

6住－2
6住－3
6住－8
6住－10
6住－17
6住－14
6住－12
6住－15
6住－16
6住－15
6住－13
2住－1
2住－2
2住－3
2住－4
2住－6
2住－7
2住－5
2住－9
2住－10
2住－8
2住－11
7住－1
7住－5
7住－8
7住－9
7住－1
7住－3
7住－10
7住－11
7住－6
7住－12
7住－23
7住－19
7住－2
7住－7

図版　16 野上塩之入遺跡



7住－31

7住－40


2住－21

7住－32

7住－37

7住－33　7住－32

7住－29

7住－39

7住－44

7住－45

2住周辺－29

7住－43

7住－43

7住－36　17A土坑－2

17A土坑－1

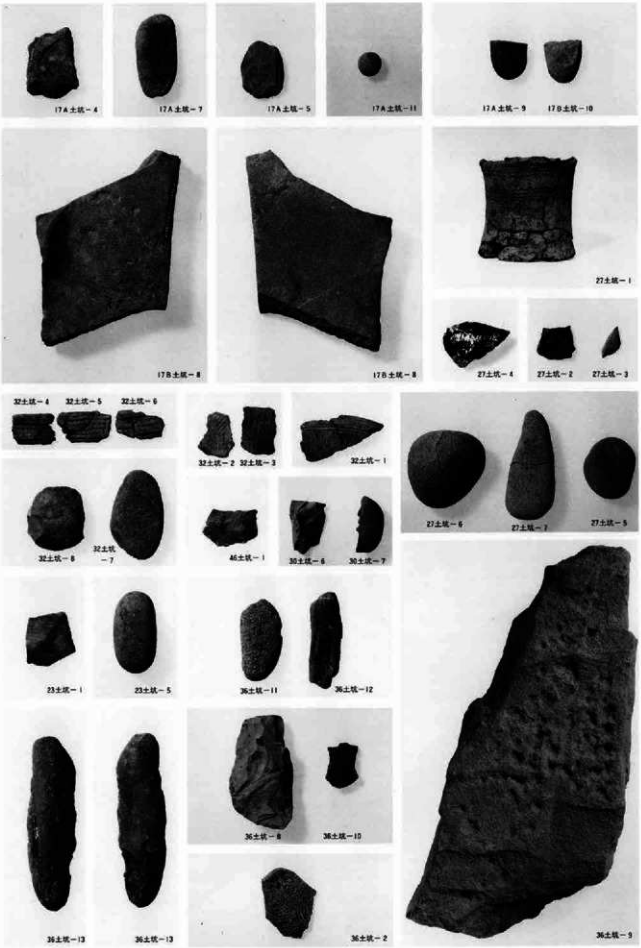
7住－42

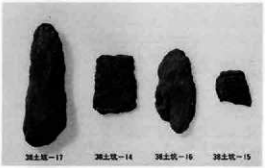
17A土坑－3

7住－46

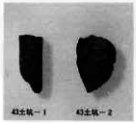
7住－46

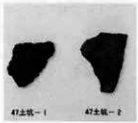
図版　18　野上塩之入遺跡




38土坑－17
38土坑－14
38土坑－16
38土坑－15

38土坑－3


43土坑－1
43土坑－2


47土坑－1
47土坑－2

38土坑－17
38土坑－14
38土坑－16
38土坑－15

47土坑－7

47土坑－7

47土坑－9

47土坑－8

47土坑－8

48土坑－5

48土坑－3
48土坑－6

48土坑－10

47土坑－4

A区遺構外－1

A区遺構外－2

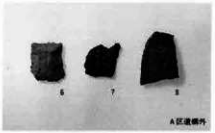
A区遺構外－4

A区遺構外－3

A区遺構外－5

A区遺構外－10

11
9
10
A区遺構外


6
7
8
A区遺構外

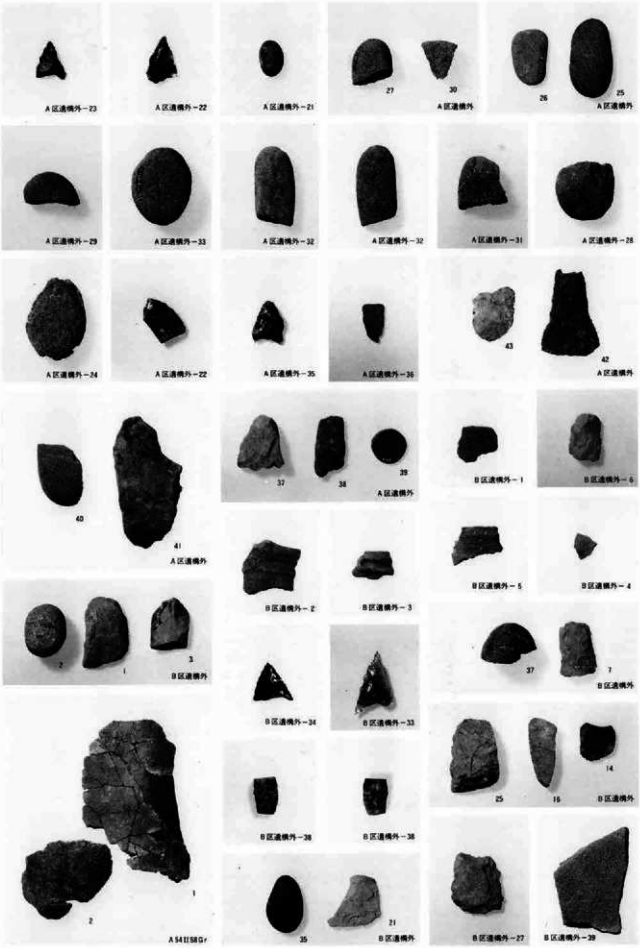
14
17
A区遺構外

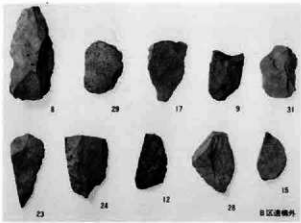
15
12
13
16
A区遺構外

A区遺構外－19

A区遺構外－20

図版　20　野上塩之入遺跡




8
29
17
9
31
23
24
12
28
15
B区遺構外

29
26
30
13
18
19
B区遺構外

10
22
B区遺構外

B区遺構外－41

B区遺構外－32

B区遺構外－32

B区遺構外－11

B区遺構外－36

B区遺構外－26

B区遺構外－40

B区遺
構外－42

B区遺構外－44

B区遺構外－43

B区出石器

B区出石器

B区遺構外－45

図版　22　塩之入城遺跡

塩之入城遺景（調査前　東から）

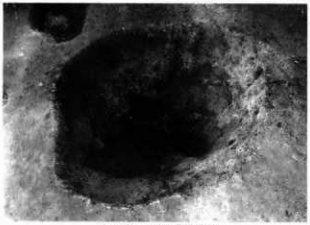
塩之入城遺景（調査後　東から）

塩之入城全景（東上空から）

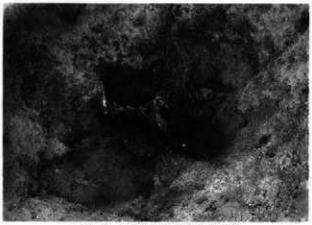
安全柵　施工状況

登坂道　取付状況

曲輪Ⅰ　全　景



Ⅰ号土坑　全景（北から）



Ⅰ号土坑　炭化材出土状況（北から）

虎口前方　下組（北から）

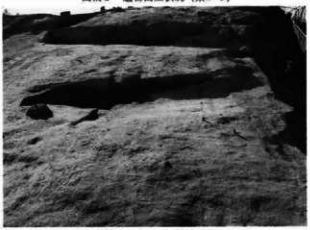
虎口登坂口（南から）

図版 24 塩之入城遺跡

曲輪2　全景（北から）

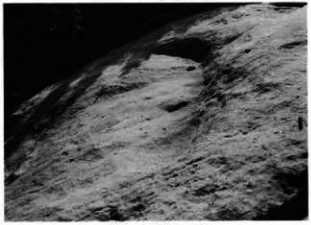
曲輪2　遺物出土状況（東から）

曲輪3　全景（南から）



曲輪2・3全景（東から）

曲輪5全景（北から）



曲輪6全景（北から）

北側斜面石組検出状況（北から）

調査風景

調査風景

1号墳　掘り下げ前（東から）

1号墳　全　景

1号墳　石出土状況（東から）

1号墳　石室右壁（南から）

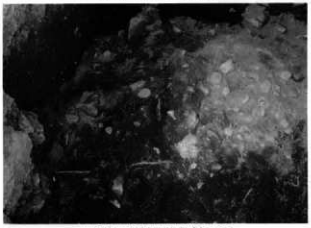
図版 26 塩之入城遺跡

Ⅰ号墳　天井石崩落状況（南から）

Ⅰ号墳　石室奥壁（南から）

Ⅰ号墳　石室右壁（南から）

Ⅰ号墳　石室左壁（東から）



Ⅰ号墳　鉄鏃出土状況（東から）

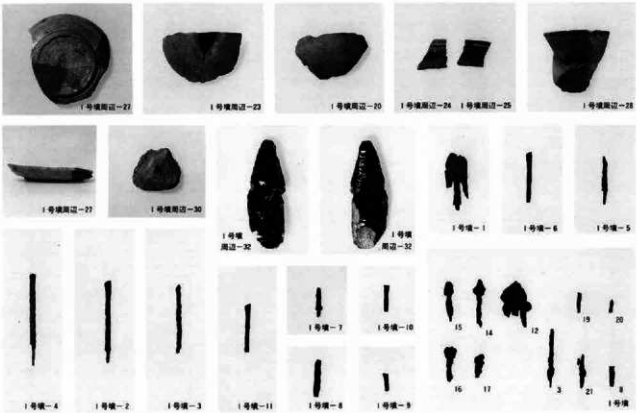
Ⅰ号墳　鉄鏃出土状況（北から）

Ⅰ号墳　床面掘り方（南から）

Ⅰ号墳　掘り方全景（北から）

曲輪1－4
曲輪1－4
曲輪1－3
曲輪2－1
曲輪2－3
曲輪1－1
曲輪1－2
曲輪1－8
曲輪1－5
曲輪1－6
曲輪2－2
曲輪3－1
曲輪3－1
1号堀周辺－33
1号堀周辺－33
1号堀周辺－31
1号堀周辺－31
1号堀周辺－31
1号堀周辺－9
1号堀周辺－11
1号堀周辺－11
1号堀周辺－13
1号堀周辺－12
1号堀周辺－18
1号堀周辺－14
1号堀周辺－11
1号堀周辺－15
1号堀周辺－16
1号堀周辺－17
1号堀周辺－7
1号堀周辺－8
1号堀周辺－18
1号堀周辺－26
1号堀周辺－29
1号堀周辺－19
1号堀周辺－6
1号堀周辺－5
1号堀周辺－21
1号堀周辺－1
1号堀周辺－4
1号堀周辺－2
1号堀周辺－3
1号堀周辺－22

図版　28　塩之入城遺跡


1号壕周辺－27
1号壕周辺－23
1号壕周辺－20
1号壕周辺－24
1号壕周辺－25
1号壕周辺－28
1号壕周辺－27
1号壕周辺－30
1号壕
周辺－32
1号壕
周辺－32
1号壕－1
1号壕－6
1号壕－5
1号壕－4
1号壕－2
1号壕－3
1号壕－11
1号壕－7
1号壕－10
1号壕－8
1号壕－9
15
14
12
19
20
16
17
3
21
8
1号壕

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
調 査 報 告 第 121 集

野上塩之入遺跡
塩之入城遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第7集

平成3年3月15日 印刷
平成3年3月25日 発行

編集／㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村下箱田784－2
電話(0279)52－2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村下箱田784－2
電話(0279)52－2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社